

三つの選択肢

文才鍛える用

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した日本人が特殊なスキルを手に入れて頑張る話。追記、評価の一言に必要な文字数を0にしました。

目次

| | |
|--------------------|-----|
| アストレア・レコード | |
| I F アストレア・レコード | |
| 1 | |
| I F 事情聴取 | 7 |
| I F 工場見学 | 16 |
| I F 【平和の象徴】オー○マイト | |
| 22 | |
| I F コヒユ | 28 |
| 原作の少し前 | |
| 始まり 前編 | 36 |
| 始まり 後編 | 45 |
| 原作開始 | |
| 少年は悩む | 128 |
| 大切なもの | 114 |
| | 103 |
| 世の中金が全てなんじゃああああい!! | |
| に・・・ | 97 |
| 価値を知っておけば億万長者だったの | |
| (尚、仲間のお金) | 90 |
| 金ならある! 装備を新調しようぜ! | |
| お酒の恐怖 ※神酒ではない | 81 |
| 呆気ない終わり | 75 |
| ! | 66 |
| テンション上げてけ! ケモ耳だぞオラ | |
| ミノタウロス | 56 |

- シン・ヒロイン ————— 135
- バーニング・ファイティング・ファイ
ター ————— 144
- くんかくんか ————— 152
- 絶望から希望へ 鍵は【鼻】 ————— 161
- 悪臭と迷子と尻尾 ————— 168
- 黒くて硬くて大きなアレ ————— 173
- イケメン死すべし慈悲はない ————— 182
- 男の浪漫 ————— 192
- 今日からお前はリーダーな!! ————— 200
- 脅迫は不敬? そりゃ失敬 ————— 207
- 強気な少女を見ると・・・ゲへへ ————— 215
- 二人は英雄候補 ————— 223
- オギャー! オギャー! ————— 228
- そんなのあり? ————— 237
- お前が囧になるんだよ!! ————— 244
- 高み ————— 253
- マジ勘弁つす ————— 262
- 幕間 数万年後の君へ ————— 269
- ツンデレの需要 ————— 274
- “ダンまち”はいつ“このすば”とコ
ラボしたんだ? ————— 279
- 君が一番綺麗だよ ————— 285
- お、お前! ————— 290
- 女子会に男が混ざるな ————— 296

うわあああん、ママアアアア（泣）

303

よっしゃー！ランクアップだぜえええ！！

知識が尽きた

323

なんだかんだ言って長生きがしたいっ

す

329

敵か味方か（外伝のネタバレ含みま

す）

336

プロポーズ

344

NTRと卒業式

349

昨夜はお楽しみでしたね

354

俺必要ですかね!?

361

366

フィルヴィス・ブートキャンプ

アストレア・レコード

IF アストレア・レコード

失禁
血尿しながら白目を剥いて胃酸を吐くような、とある大派閥との【戦争遊戯】を控えた今日この頃。

作戦会議と自身の修行を交互に繰り返し気絶、そして起きる。そんなブラック企業勤めの社畜みたいな生活を送っていた。

色々ヤベエ恋人エリスですらナニもしてこないのは時間が合わない、という理由もあるが一番の理由は疲れからである。ベル同様成長補正スキル持ちの彼女を遊ばせる余裕はない。スパルタ妖精と化したフィルヴィス・シヤリアとのマンツーマンで修行をしてもらっている。涙目でダンジョンへ行っていたエリス。お疲れ様ですホントに。

そして俺、アラン・スミシーは何度目かの気絶からの覚醒し、違和感を覚えていた。

「ここは、城壁か？ え？なんで？」

「ヘスティア・ファミリア」の本拠地ホームで気絶就寝したはずなのだが、とうとう夢遊病になつたか、と背中に嫌な汗をかくがそうじゃないっぽい。

オラリオを見れば、破壊されて修復すら忘れられたような建物がチラホラ確認できる。ついでに爆発して火災が発生した。

俺の知らない間に世紀末？それとも、美の女神の指示で奴らが暴れだした。いや、それはないか。うん、ない。

俺がここにいる理由は分からないが、取り敢えずオラリオへ向かおう。そしてベル達と合流だな。アイツらはダンジョンへ行つてないし。

▪▪▪ なんか身体と足取りが遅い気がする。▪▪▪ 寝すぎかな？

▪▪▪ 体に鞭打つて大^{メイン・ストリート}通りへと走った。

—————

「はあ。はあ。おえ。おいおい、なんだこりゃ。▪▪▪」

建物だけじゃない。露店の天幕もビリビリに引き裂かれ、売り物がぐちゃぐちゃに散らばっていた。通行人の数が少なく、道行く人も元気がない。なんだろ、何かに怯えてる？ 好奇心の権化である神々が絶対に居るはずなのに、姿が見えない。

情報収集するために人に尋ね。▪▪▪ ゲホツ、ちよ待つて、急に走ったから吐き気がするオエ。

あんな距離、前世ならともかく今は第二級冒険者ぞ。なのにこんなに疲れるなんて戦争前に不調ですか？嘘だろオイ。

肩で息しつつ心の中で悪態を吐く器用な真似をしてたら、絶叫が聞こえた。そして耳を疑った。

「闇派閥」だああああ!!」

「え？ うわああああああ!!」

「きゃああああああ!!」

は？

「死に晒せエ、冒険者ア！」

「我が同士よ、一人でも多く道連れにしろオ！」

え？

逃げ惑う住民の背には、ギンギンに血走った目をして迫る全身白ローブの男達。

以前見たことがある。呪いを振り撒き「ロキ・ファミリア」に刃を向け、そして、神が【穢れた妖精】の栄養として生け贄壊滅させにした邪教徒ども。

救いを求める者、大切な人を失った者、強い復讐心を抱く者。そこに娯楽に餓えた神々がいる限り再び現れるだろう、とラクシユミーから聞いたけど、いくらなんでも速すぎる。

奴らの本拠地はもう潰された。だから潜める場所なんてもう無いだろ!?

「!? お、おい! そっちは逆方向だぞ!」

誰かの静止が聞こえたけど、俺は無視して走り出す。人殺しはキツイけど、それは悪逆を無視する理由にはならない。

俺は自分の愛剣^{レイピア}を虚空から取り出し、てうえつ!?

「レイピアが、出てこない。」

それだけじゃない。二つ目の武器である槍も、使用用途が未だにあやふやなバンダナも、魔法の「癒光の羽衣」もスキルの「気配察知」ですら。

ああそうか。ようやく気づいた。気づきたくなかった不調の原因。それは、

——【恩恵】の剥奪

それが意味することとは。

「ラクシユミー」

もつとも最悪な想像が、神の送還。

確認できない。する余裕がない！

「死ねええええええ!!」

「――」

あつという間に凶刃が迫る。

頭上から振り落とされるソレに、今の俺じやあ反応すらできない。

ラクシユミーが送還されたのなら、ダンジョンにいるエリスの生存は絶望的。ファイル
ヴィスが居るならと考えたけど、極論を言えば俺のスキルの一部だ。剥奪されてるのな
ら一緒に消滅しているはず。

ハハ、アハハ、アハハハハハハハハハ！見てみる！動きがゆっくりだ！そして思考が加
速する！死ぬ直前のアレじゃん！やべえ、ハイになる！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん、守れなくなつて。

目を瞑る。

俺もそつちに逝くよ、と思いつながら。

「さっせません！」

知ってる声が聴こえた気がしたけど、確認できず意識が遠退いた。

I F 事情聴取

男子禁制というわけではないが、女性だけで構成されたとある派閥の本拠地。今日も今日もとて報告会が開催された。

内容は閻派閥^{イヴイルス}について。

無視されがちな軽犯罪とは違い、閻派閥による犯行はどれも重罪であり無差別殺人がメインときた。さらに厄介なのは徒党を組んで地上^{オラリオ}や地下^{ダンジョン}に現れるという点だろうか。この時代、他派閥だろうが何だろうが、冒険者総出で閻派閥掃討に当たらなければならなかった。

特に彼女達——〔アストレア・ファミリア〕は治安維持を生業としてしているので、閻派閥との激突は免れない。本日の報告会だって戦闘帰りに行われたものだった。

報告会の目的は情報共有。

それを取り仕切るのは、真つ赤な髪をポニーテールに纏めた女性——アリーゼ・ローヴェル、二つ名は〔紅の正花〕^{スカーレット・ハーネル}で役職は団長に当たる。いつもの戯れ^{ジョーク?}?をかまして場を苛つかせた後、少々真面目な口調に変わった。

「で、どうだった？」

イヴイルス

「闇派閥に遭遇したけど、近くにいた『ガネーシャ・ファミリア』と共闘して何とか対処できたよ。そのお陰で死者は無しなんだけど。」

「スピー、スピー」

「ああ、数が多すぎる。今日だけで五ヶ所だぞ、五ヶ所。しかもだ。あちこちで暴れ回るせいで被害は増える一方だ」

それでも死者が出なかったのは本当に幸運だった、と語る。

だがしかし、闇派閥の襲撃がこうも続くと明日以降には再び死者が出る。誰も何も言わずとも各々が察していた。

そんな深刻な空気でも、彼女アリーゼは変わらない。

「でも、私達は間に合ったわ！怪我人は出しちゃったけど、それでも最悪な結果にはならなかった。これはすつごくすごいことよ！」

「ぐー、すー」

「アリーゼの言う通りね。襲撃が激化する一方で貴女達は正義を貫いた。胸を張って誇つていいわよ」

アリーゼが重い空気を変え、主神であるアストレアが慈愛に満ちた笑みを浮かべて続ける。

全員の表情が和らいだ。

「それよりも団長様？」

「さつきからずつと気になってたんだけどよ。」

「？ どうしたの輝夜、ライラ？」

ある一点に、二人はチラリと視線を移す。

事情を知る者以外の全員が気になっていたのであるが、触れていいのかどうか迷っていた。輝夜もライラも例外ではなかったのだが、しびれを切らして切り出した。

ことの顛末を知っているアリーの顔はドヤ顔に変わる。うーん、ムカつく。

「ソファアでぐーすか眠ってるコイツ／＼この男は誰だ」

「(。ーωー) z z z」

「あ、私がここに運びました」

「「「「リオンが!?!」」」」

「、(; 。 ㄩ) ノ ビクツ!?!」

「あ、起きた」

「—————」

おっすおっす、アラン・スミシーだお！

知らぬ間に恩恵も家族も失くしたただけでなく、あの閻派閥が復活を果たしていた

! . . .

が、実はそうでもないようだ。あくまで予想の範疇だけだ。

まあそれは置いて、襲い掛かる闇派閥の凶刃によって討たれたはずの俺は現在、「さて、要望通り個室を用意したわ。部屋の作りで外には聴かれないようになってから安心してね」

「ありがとうございます」

アストレア様と二人つきりになっていた。別にイヤらしい展開など起きない。起きたりしたら愚息と即グツパイで死ぬ。

命の恩人とはいえ、あまり大勢の人達に話したくない。それでも話さないといけないので、彼女達の主神であり善神のアストレア様ならと判断してお願ひした。

『ダメですアストレア様！（得たいの知れない）男と二人きりになるなど！』

『大丈夫よ。悪い子じゃないから』

『アストレア様』

個室に二人だけは女神様は大丈夫と言っても、眷属は違う。当然反対されたが、装備を置いておくこと、鍵を開けておくことをせめてもの条件に二人になることを許した。

まあ、戦闘衣バトルクロスを着てたけど、レイピアや槍があるから武器の類いは持つてきてないの
で、置いていく装備は無いに等しいのだが。

丸腰でふらついていたのかコイツ、と警戒心が無いマヌケを見るような視線が俺を

ぶっ刺した。

個室に入つて俺は喋る。未来から来たこと含めて。予想外だったのか、アストレア様の顔は盛大に引きつった。

「それで今、世界最速兎を巡つて【フレイヤ・ファミリア】と【戦争遊戯】が——」

「ま、待ちなさい、もういいわ。貴方の潔白は証明されたから」

受け入れられる許容量を超えたのか、あまりの情報量にアストレア様は切り上げる。根を上げる。

俺はついつい喋ってしまったことを反省した（※内容はプロログ以降）。信用できる神に、未来から来た俺の身の上話ができることが嬉しかったんだろうな。悩みを一人で溜め込むのはダメだね。

ちなみに闇派閥じゃないことは初っ端に言った。

「信じられないことばかりね。冒険者になつて1ヶ月の子がランクアップして、たつた五人で百人いる派閥に勝利して、初めての遠征で深層に行くなんて。貴方も貴方で負けず劣らずの速さでランクアップして、たつた一人で階層主に勝つちやうなんて。未来は魔境ね」

頭を抱えて独り言を呟く女神に、恐る恐る尋ねる。

「えと、俺はこれからどうすれば」

「え？ああ、貴方のことは私が責任を持つて保護するわ。この家に居るのもいい、都市

外に逃げてもいい、何をするにも貴方の自由よ」

悪に荷担することはやめてね、と付け加えた。

「この女神は、俺を守ることを前提で選択肢をくれる。身の潔白を証明しただけでこ
うもしてくれるのか。もしくは、俺——アラン・スミシーがもてる情報をほとんど話し
たからか。

何にせよ、この女神は善性であることを再確認した。

「一緒に、戦うって選択肢は、ありますか？」

「本気？」

アストレア様の口調が変わる。

冒険者となってモンスターと戦うのとは訳が違う。一緒になつて戦うというのはつ
まり、極論を言えば人と人、悪と定めた者を殺すということだ。

俺とて人殺しに抵抗はあるし、正義の味方を気取るつもりはない。しかしここは俺が
いた「ダンまち」世界の過去に当たるとなるのなら、それならば、未来で不幸な目に遭う・死
亡してしまうキャラを救えるのではないか。

殺し合いで精神が病むとしても、バタフライなんちゃらで恋人エリスに会えなくなるとして
も、薄っすら存在する最高の未来にしてみたい。

あ、でも。

「? どうしたの?」

「あはは、^{ファルナ}恩恵授かっててもLv. 1スタートだから足を引つ張りますね」

下界にはまだラクシユミーがいない。

過去に俺は戦闘経験を積んでいない。

彼女達と一緒に戦うのは土台無理な話だった。おとなしく都市外にでも逃げるか。

ああくそつ、元のレベルだったらなあ——!!

「それなら大丈夫よ、多分」

「うえっ?」

「確かにラクシユミーはまだ降りてない。でもね。今までどんな修羅場だつて乗り越えた。貴方はここに居るわ」

「それって」

「恩恵を刻めば元に戻るわ。戻らなくても、魔法かスキルに反映されると思う」

「おお、なんかイケる気がしてきた」

「本当にいいのね?」

「そうですね。でも助けたい人がいる。俺はそれのために戦います」

「そう、とアストレア様は小さく答えた。」

恩恵授かったら情報収集をしたい。

.....
ところで、俺が裏切るとは思わないのだろうか。潔白が証明されたとしても、こんな不気味な男を眷属と行動させるか？警戒心がないのかな？

「ふふふ、貴方なら大丈夫よ。あの子達の助けになつてくれるから」
心読まれてた。分かりやすい性格なかな、俺は。

「それじゃあ背中を見せて。」
アストレア様は頭を痛めることになる。

「——と、言うわけです」

リユーは経緯を話した。

それと自分が触れられたのは恐らく父とか兄とか、そんな風に頼れる存在だと思つたからじゃないか、と予想した。

恋？恋したの？ねえねえ？とか囁いてくる仲間は放置した。

「武器が無い状態で突貫したの？」

「ええ。拳闘士インファイターでしょうか？」

「いや、あの男は剣士だろう。掌には剣ダコがあつて拳は綺麗過ぎだった」
拳で戦う者なら皮が剥がれてゴツくなる。あの男にはそれらしき痕跡がなかった。

「剣士が、剣を忘れるかな？」

「ああ。修理に出していた、なら一応の説明になるが。このご時世に武器は忘れな
いだろうな、普通は」

うくん、と頭を悩ませる。

「闇派閥に立ち向かったのはいいものの、剣を持ってないことを忘れて殺されかけた
て」と？」

「とんだマヌケだなと、さきほどまで思っていたが」

マヌケで片付けられたらどんなに楽か。冷静に考えて、あの男は重要な何かを隠して
いる。それが何かが掴めないでいた。

戦闘衣を見ていたライラが呟いた。

「おいこの戦闘衣に使われている素材、もしかしてゴライアスじゃねえか？」

「！！！！」

本当に、掴めない。

I F 工場見学

アストレア様による事情聴取から一週間が経過した。

男と暮らすことに当然反対はあったが、アストレア様、アリーゼ、それと以外にもリユーさんが賛成したことで、彼女達との共同生活を実現できた。

『まずはパトロールから始めましょ。私とリオンのチームに入ってー!』

アリーゼの言う通り、一週間の仕事は街中を見て回るパトロールだった。未来とは違い、閥派閥による襲撃が頻繁に起こる。敵は弱かったと言っておこう。恐らくLv.1〜2が中心で、戦力を温存したいけどそれでもオラリオを攻撃したい、敵の目論見はそんなところだろうか？

俺からしたら有象無象だとしても、市民にとつては命に関わるほどの脅威だ。決して油断はしない。

これは余談だが、俺のスキル【気配察知】。なんと敵の判別ができるようになったのだ!

判別とはいっても、特定の個人を追跡できるとか破格な性能でなく、気配の種類を

探れるだけ。ランクアップによって感覚が強化されたためだと思われる。

悪意ギンギンの冒険者を尾行したら、実は闇派閥でしたー、なんて笑えないオチを見せられた。

そして現在、

「前から三人！左右に二人づつ隠れてる！奇襲だ！」

「それなら前方は私がやるわ！」

「ならば左は私達が請け負おう！右はお前アランに任せる！」

「了解！」

魔石工場を襲撃していた闇派閥を叩いていた。

【気配察知】のスキルが奴らの居場所を暴く。だから奇襲される前に攻勢に出れている。

「アリーゼ、三番倉庫押さえた！アランの言う通りの数だったぜ！」

「そのまま四番まで制圧！イスカとマリューに指示！ライラは先の区画も押さえて
!!」

「数は九人だ！頑張つて！」

「おう！」

次々と制圧していった。

「私、索敵担当の獣人なのに。」

「アランを見てると自信を失くすわ。」

「ごめんっ！」

「くっ、なぜバレた!？」

「気配も臭いだって消したはずだッ！」

「俺のスキルが以下略」

「な、なんだそれ。ぎゃあああああ!？」

ふうーっ、制圧完了。

アリーゼ達も奇襲される前に制圧し、合流した。お？

「お、おのr」

「せい☆」

「ぐぶうう!？」

伏兵の存在に気付いたので、現れると同時に顔面グーパンチ。壁までぶっ飛んだ。手に持っていた武器に視線を落として冷や汗が出た。

炎の魔剣じゃねーか。工場で爆撃とか危ないからやめろよな。

「——言うじゃないかあ、糞雑魚妖精え〜〜!」

『——くそぎこなどと呼ぶなああ!』

「お、またやってら」

手足を縛つてると、ゴジヨウノ・輝夜とリユー・リオンの口喧嘩が聴こえてきた。恐らくランクアップしてない以前の自分でも聴こえるような、そんなバカデカイ声で。

一週間過ごしてきて最初こそ驚いたものの（輝夜をおとなしい人、リユーさんは未来と変わらない人だと思つてた）、今ではすっかり慣れた。だって毎日いっつもやってるんだもん。あの二人。

まあ、リユーさんが言い合いであんなに声を荒げるのは珍しいと思うし、何よりいや、いいや。俺が言えた義理じゃないし。

他の仲間達はそれを見てるだけだった。

・ ・ ・ 苦笑いで。

あつ、やべ。この気配は！

遅れてやってきた「ガネーシャ・ファミリア」に身柄を引き渡し、俺達はホームに帰つ

「アリーゼ。私を見るや否やこそこそ帰ろうとするアランを借りてもいいか？」

「え、そんなの

『「こんとこ働き詰めなんです、過労でぶつ倒れますのでご容赦を！」』

と、懇願する視線をアリーゼに向ける。アリーゼは俺の気持ちが通じたのかニコツと

微笑み、

——いいわよー！」

アリーゼさああん!!わざとですか、俺のこと嫌いなんですか!?

「よし。アーディ、連れていけ」

「はいはーい、さあ行こっかアラン。平和のために身を削ろう！」
頭張ろう

「なんかおかしくなかったか、そのセリフ!?!てか、引つ張るな!サービス残業で労基に訴えてやるうー!」

「さーびずさんぎよう?ろーき?なにそれ?さきつ、行こうアラン」

連れ去られるアランを見送り、後にうわあああああん、という断末魔泣き声が反響する。残された者達は彼に同情した。

「しっかり働いてくるのよ、アラン!」

アリーゼには鬼かコイツ、という視線を送った。

—————

工場からパトロールに連れていかれ、その帰り道。

エレンを名乗る男神に絡まれていた。

「問おう、若き英雄候補。正義とはなんだ?」

「べル?」

「ん？べ、ベル？あ、おい、ちよつ——行ったか。ふーむ、ベルつて言つたよな？何かのキーワード・いや名前か？それも、あの男の根幹にある大切な者の？少し調べてみる必要があるか」

背後からブツブツ独り言が聴こえたが無視した。眠たいので。

「」

そんなおかしなやり取りを、屋根から見下ろす影が一つ。

「ヨビダシテソウソウ、アレコレタノンデオイテワスレテナイカ、ワタシノコト？」

仮面の下にある顔は、果たしてどんな顔をしているのだろうか？予想はできず、きつと本人にしか分からない。

I F 【平和の象徴】オー○マイト

「アストレア・ファミリア」の一員として、闇派閥と戦闘を繰り返すうちにある変化が起きた。

闇派閥による襲撃頻度が目に見えて減少したのだ。

俺のスキル、「気配探知」は生物を特定するだけでなく、悪意やら殺意やらの感情までも察知する。だからか、パトロールで街を歩いてると偵察中、もしくはこれから騒ぎを起こす闇派閥の人間と遭遇するのだ。

「て、てめえ！俺が闇派閥だっていう証拠があるのかよ！」

「逆に、それで闇派閥じゃないってんなら驚きだよ。それと、神に嘘は吐けないのは分かっているよな？」

「——ッ!？」

このように、片っ端から制圧しているうちに俺が闇派閥の人間を特定できると敵に伝わり、不要な外出を避けるようになったし、それとは別に、俺の仲間であるフィルヴィスの存在が大きいと考えている。

知つての通りフィルヴィスは俺のスキルで手に入れるまでは、元々闇派閥側の人間。全部を把握しているわけではないが当然、奴らが拠点にしている【人造迷宮】に通ずる出入り口の位置を把握しており、俺が出した命令は『奇襲』。

巢から出てきた敵、巢に戻ろうとする敵を待ち伏せにして徹底的に排除する。フィルヴィス曰くそれで一度、敵幹部を一人半殺しにしたそう。ソイツは現在、【ガネーシャ・ファミリア】で服役中。『影が来る・影が来る・ひいひい!』と、うわ言を呟きながら発狂し、フィルヴィスの存在がしつかりトラウマとして刻まれた。

また、オラリオで冒険者をしているファミリアが、実は闇派閥だったと言うのはこのご時世有り得ない話じゃない。

「コイツら全員闇派閥側の人間なら、主神であるお前は必然的に邪神になる」
「ひひひ、神をお前呼ばわりとは、不敬なガキが痛だだだだ!?!腕はそつちに曲がらないからヤメテエ!」

例の如くこれを検挙して、邪神を捕まえるという大捕物をした。

これが決め手になったようで、闇派閥は戦力を減らすような真似を止め、闇派閥側のファミリアがオラリオから姿を消した。

オラリオは少しづつ活気を取り戻し、俺を【平和の象徴】として英雄視する者が出始めた。

まあ、何事も上手くないのが世の常である。

ゴスベル
【福音】

「——ツツ!!」

「「うわあああああ!!」」

鐘の音が一度だけ鳴る。それだけで、俺以外の仲間が床にひれ伏した。

「ほう。目に見えて満身創痍とはいえ、これを喰らって尚も立っていられるか。魔法に耐えられるほどの装備を持っていたか。或いは、場所が場所だから手加減してしまつた私の落ち度か。お前はと思う」

「ハア、ハア。なら、三つ目だ。俺のアビリティが凄かった」

間違えではないと信じた。俺はLv. 5で今のシャクティよりもレベルも耐久も高いし、それでも骨にまで響いた魔法を、咄嗟に【癒光の羽衣】を発動したことでダメージを防いだ。

「つまらん受け答えをするな。私が提示した中から答えろ、面倒くさい」

この人は多分、自分の指針で動くタイプ。それも、気に入らなかつたら老若男女問わず容赦なく殴り飛ばすヤバい人。

この時の俺はそう思った。

「まあいい。お前『は』奴らよりも見応えがある。今回はそれで良しとしよう——今は眠れ、英雄候補」

「ッ！」

（この人の魔法に当たればもうお仕舞いだ！だから——）

「速さで決める！」

気配は明らかにオツタル並みだが、先ほど見せた魔法、それと手ぶらの装備。魔法がメインの後衛だと推測できる。

正面から行けば魔法の餌食。だから女の背後に回る。いくら強かろうが、前衛として戦ってきた俺の方が速——

「遅い」

「グガア!?!」

レイピアによる攻撃をヒラリと躲し、脇腹に蹴りが入る。内臓が飛び出るほどの衝撃をその身に喰らい、

「ゴスベル眠れ」

再び鐘の音が鳴る。

【ガネーシャ・ファミリア】を墮とした初手の全体攻撃ではなく、一点に集中させた魔法が突き刺さった。

「読みが悪い。場数はそれなりに踏んでいるようだが、まだ若い」
 その眩きが耳に残る。俺は意識を手放した。

「っ、ここは」

目が覚めると、何やら慌ただしく動く人影が見えた。続いて誰かのうめき声のようなものも。

体を触ると、いつもの装備が脱がされており代わりに包帯が巻かれていた。鈍い痛みが走る。

「！ 目が覚めましたか？」

「ああ、お陰様で」

「まだ安静にしてください。傷は全て治しましたが、痛みまでは消せませんから」
 上半身を起こす時に制止の声が掛かるが、あえて無視する。

「他のみんなは無事、みたいだな」

「ガネーシャ・ファミア」の団員が寝ている。起きている者のほとんどが上級冒険者のようだが、あの魔法が相当堪えたようで痛みに苦しんでいた。シャクティ、アーディの二人は立ち上がって仲間を献身していた。

「貴方が一番重症でした。肋骨が折られるほどの衝撃が内臓にまで達したせいか、血

管が破れて吐血を繰り返し、あと僅かでも治療が遅れたら後遺症が残るレベルでした」
脇腹への蹴りと、「ゴスペル」って魔法だな。多分意識を失った時に「癒光の羽衣」は
消えたけど、あれを喰らって後遺症が残るレベルで済むのは「恩恵」様々だな。

高いステータスを持つ俺を倒すとか、恐ろしい女。

目が覚めたことに気が付いたのか、シャクテイとアーデイがやってきた。その後、俺
がやられたことを聞き付けたアリーゼ達が見舞いに来たが、騒がしくしたことで出禁に
された。

I F コヒユ

体が回復した翌日、俺は久方ぶりの休みを言い渡された。みんなはパトロールだとか他派閥との会議だとか女神同士の井戸端会議だとかで留守。家には俺一人。ポツチである。

だから、街を散策することにする。ここはオラリオだけど、俺が知るオラリオではない。地理や情勢を把握しておきたい。てのが建前で、本音を言えば暇潰しだ。このご時世呑気だと思いが。

「することないもんなあ〜」

だってこの世界、娯楽が少ないしスマホが無いし。一日を消化できるゲーム機があればいいのに。【万能者】のアスえもんが開発してくれんかな。

などと、下らないことを考えつつ街をぶらつくつと、

「んお？」

服を引つ張られる。まるで離さないと言わんばかりにギュツと強く引つ張られた方を振り向くと、幼女が見上げる形で立っていた。

機緑色の髪に同じ色の瞳に犬耳犬尻尾。種族は犬人だろうか。ケモナーのワイ、大歓喜。

じゃなくて。

「どうした、もしかして迷子？」

とりあえず同じ高さに合わせて膝をつく。怖がらせないよう優しめな口調で。

闇派閥による襲撃が鳴りを潜めてきたとはいえ、幼女が一人迷子なのは危ないから保護しなきゃ。いかがわしいことはしない。

でも、なんだろ、この娘に逆らえそうにない。逆らったらダメだって脳が警鐘を鳴らしている。あつれー、なんだか誰かさんと似てるぞお？

幼女は首を横に振る。

「お礼が、いいたくて」

「お礼？」

「うん」

コクリと頷く。

お礼をされるようなことをした心当たりがない。

「お父さんを、悪い人から助けてくれたお礼」

はっはーん、闇派閥を倒したことでこの子のお父さんは救われたのか。

「あー、でもなー意図して助けたわけじゃないからな。お礼をされるのは」
 「ありがと！」

おっほほ、問答無用ですか。

「！ あつ、エリス！ 一人で彷徨いたらダメじゃない！」

■ 黄緑色の髪と瞳、そして犬耳犬尻尾。母親っぽいってか、母親似だね。

■ 君、エリスって言うのね。

■ 「めんなさい、この子が何かご迷惑を。って、貴方は確か」

■ 「アランです。迷惑だなんてとんでもないです、はい」

自己紹介を簡潔に済ませる。未来で出会うエリスと、ここで変なフラグを立てる前に逃げるが吉。あばよ、とつつあくアレエ!?

「夫を助けていただき、ありがとうございます！」

子は親に似る。

腕をガシイ！と掴まれ、礼を言われた。この強引き、エリスはまさしくこの人に似たんだ。間違いない。

いつの間にかエリスちゃんは、然り気無くもう一つの手を繋いでいる。気付かなかつた。

「あらあら、この子がここまで懐くなんて。家族以外だと一線を置くような、人見知

りなんですよ。まあ、心を許せる相手にはベツタリなんですけどね」
「はは、身を持って知ってます。」

「する」

「ん？」

「アランお兄ちゃんと、結婚する！」

「あらあら、まあまあ♪」

「んふふ♪」

「コヒユ」

フラグが立った。まあ、すでにアレコレしてるから原作に響いているけど、これはどうしたものか。

—————

未来の恋人である幼女エリスと、エリスのお母様を送り届けた帰り道。「泊まっ
ていないの。」と涙ながらに言われたが、丁重に断った。これ以上はなんだか不味い気が
するからだ。

そそくさと退散し、ある人物と出会う。

『あんたが噂の英雄様だろ？ちよつといいか？』

話掛けたのは同年代くらいの子。恩恵の影響で若く見えてるだけかもしれないが、話掛けた理由は知らないが、気配に悪意は感じられない。

まだ昼前で暇潰しになるから大丈夫だろう。俺は男の後ろを着いていった。

「ここって確か。」

「おう。ヘフアイストス様の眷属になった時に貸し出してくれた俺の工房だ。俺はロデイ・ハンナ、ロデイでいいぞ」

「俺はアラン・スミシード。英雄様じゃなくてアランで頼む」

「分かった。よろしくな、アラン！」

自己紹介を互いに終え、改めて今いる場所を考える。案内された場所はオラリオにある工業区。ロデイの言うように「ヘフアイストス・ファミリア」の団員達の工房が多数あり、暗黒期である今も鎚を打つ音が聞こえる。

それよりもロデイの工房。この工房は確かアイツの家名も――。

「おう、シトリー！帰ったぞお〜！」

おっふ。

「誰？」

わあ、似てる〜（遠い目）

「紹介するぜ。コイツは妹のシトリー。俺の助手として住まわせてもらってるんだ」

「えと、俺はアラン。よろしくね？」

無言で見られるのはしんどいッス。

「あゝ、コイツは人見知りなんだ。まあ気にしないでくれや」

「お、おう。じゃそうする」

中に案内される。ベッドが無かった。

「いきなりなんだがその装備、見せてもらっていいか？」

「装備？これのことか？」

「おう。ちよつと脱いで貸してくれ」

言われるがまま、俺は装備を脱ぐ。あの魔導士との戦闘のせいで、戦闘衣も革鎧もロボロになってる。正直防具として機能するのかわ不明だが、いつ襲撃されるかわからないこのご時世、無防備なまま外出はできない。

はあく、ゴライアス製の戦闘衣は特にお気に入りだったのになあ。

渡した装備をロディ、隣に座るシトリーもジーと見る。恥ずかしいな。

「似てる」

「お前もそう思うか」

「?」

似てる?何が?

「全部つてわけじゃねえけど、俺の装備と造りが似てる。これをどこで手に入れたんだ?」

未来の妹さんからです。兄貴をよく見てたんだなあ。

「たまたま売り物をな。似てるのは珍しいことなのか?」
なんて、言えるわけないから誤魔化す。

「ああ。鍛冶士一人一人には癖がある。ここまで似てるのは、普通なら有り得ねえんだが。」

未来から来たよー!なんて、言えるわけない。悪いが迷宮入りな。
話をそらしてみるか。

「これ、直せるか?お気に入りなんだ」

「ん? ああ、時間は掛かるが、大丈夫だろ」

「助かる」

他人にやらせるのは気が引けるが、シトリの兄貴なら大丈夫だろう。ロデイに会えたのは嬉しい誤算なのかもしれない。

・と、シトリが袖を引っ張る。もじもじしてる。可愛い。

「また、会える？」

「会えるよ。装備を預けるからね」

頭を撫でると、嬉しそうに目を細めた。

「つし、三日後に来てくれ。完璧に仕立てるからな！」

「ありがとう。バイバイ」

「ん！」

工房を後にする。エリスみたいに穩便に済んでよかった、よかった。ハハハ！腹減つたなあ。なんか食って帰るか。

工房にて。

「気の良い奴だったなあ、アランは」

「」

「? どうした？」

「アランって好きな人、いるのかな？」

「えっ」

原作の少し前 始まり 前編

えつと、ここどこ……？

キヨロキヨロと辺りを見渡せば、自然豊かな原っぱに立っていた。暖かく心地のいい風が肌を撫でる。それが困惑を助長させる。

さつきまで俺は野原にいなかった。こんな環境のいい場所にもいなかった。なんなら外出もしていない。もつと空気が濁っている都会の、それも安さが取り柄の狭いアパートの一室にいたはずだ。

「……なんで？」

こういう時は、自室にいた数秒前を思い出そう。見えてくるはずだ。

『……もう朝か。寝よ』

うん、寝たね。

レポートやらゲームやらお勉強やらで夜更かしして、気付けば眩い太陽が差し込む朝方で。

俺は寝たのだ。んで、

「目が覚めれば知らない土地にいた——．．．などと言ってる場合かあ!?! 誘拐されたんか俺は!!」

あの時笑つてごめん。気持ちがあつた気がする。某賢王様に謝罪した。

俺は死んだのかな? 死んで転生して(もしくは転移)、ここに迷い込んだ。あの世、冥府、地獄に煉獄。はたまた天国か。何に当て嵌めるのだろうか。

「これからどういしょ．．．」

えーと、まずは情報収集が先だね。半分思考放棄して軽い足取りで前に進んだ。

—————

「ここに来た目的は?」

「えと、なんとなく．．．?」

「なんとなく?もしかして旅人か?それにしても軽装だし．．．」

門番に怪しまれてら。

歩き進めること二時間半(体感で)。でっかい門が見えたので、そこまでダッシュで向

かった。距離が離れているのにも関わらず、息切れが起きるところかあつという間に辿り着いてしまった。

俺はいつから運動出来るようになったんだ？

向上した自身の運動神経に驚きつつ、ふと下を見ると。

「・・・は？」

服装が違う。ダボダボで清潔さがない寝間着じゃない。異世界でよく見るあの服装だ。顔をペタペタ触る。骨格からして違う。体をまさぐる。見慣れた不健康な体じゃなくて筋肉のある細マッチョに。俺の手はズボンのポケットの中に侵入し、愚息に触れると。

——衝撃が走った。

日本人男性の平均よりやや小さい旧愚息は、新たに生え変わり大物へとなっていた。なんか感動。

・・・てか、はよ気付けよ俺。

「次の者！」

「あ、俺か」

そして上部に移行する。

この世界は恐らくあの世とかそういう類いのものじゃない。神話とか宗教の世界と

か知らんけど、獣耳とかエルフ耳とかいないでしょ？そんな世界に。

だからここは異世界と見て間違いない。この世界が物語の世界かオリジナルかは分からんが。

「えーと、この国でしばらく働いてみようと思います・・・」

なんとなく。理由も宛もなくこの国に来た俺は、少々テンパっていたのか、気付けばそう言っていた。門番は犯罪者かどうかを探るように俺を見てるし、このままだんまりを決め込むのも違う。

だからまず働こう。無一文だから金銭も必要だし、なんか情報も手に入るだろうし。

コンビニから配達まで。バイト戦士の俺なら大丈夫だ！H A H A H A H A !!

「大方畑仕事で生涯を終えるのが嫌で飛び出した。なるほど、若気の至りか。よし、通つていいぞ！」

「あざますー！」

なんか盛大に勘違いしてらっしゃるけど、通れたんならいいや。俺は新しい人生の第一歩を踏み込んだ——

「あ、その前に背中見せて。決まりだから」

「あ、はい」

出鼻を挫かれた。

・ ・ ・ 背中？

門をくぐり抜け、中世風の大きな建物が並ぶ街に入ると、数多の人でごった返していた。ごつつい鎧を身に付けた男に、ワンピース姿の少女。そして多種族。それだけではなく、上を見上げると長細い塔。倒れてきたら国も人も潰れるね。

ここで情報を纏めよう。

・ 中世風

・ 異種族

・ 塔

「ジャガ丸くんいかがつすかー！」「小豆クリーム味と新作を一つづつ」「また散財したろ主神の糞野郎!!」「だって十万払えば好きだって言つてだぶぎや!」「あんたチョ口過ぎんだろオオオオ!!」

時折聞こえてくる声。

はい、それだけで特定可能ですわ。

「ダンまちですね、分かります」

だとすれば俺のすることは一つ。

主神となる神を探して冒険者になることだ。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

「冒険者になりたくて。現在募集しているファミリアはありますか？」

「分かりました。では候補を絞らせていただきますね。何か希望とがありますか？」

「じゃあ零細でお願いします。我が儘を言えば、出来れば眷属は誰一人としていない所で」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

エルフ耳の綺麗な受付嬢は、そう言つて下がった。何やら書類を持つてくるのだとか。

待っている間、この世界の情報を思い出そう。

この国の名は迷宮都市オラリオ。世界に一つだけしかないダンジョンで数多の英雄が生まれる土地である。そこで出会いと英雄に憧れた主人公ベル・クラネルは、メインヒロインのアイズ・ヴァレンシユタインに窮地を助けられ一目惚れ。発現したチートスキルで成長し立ち塞がる困難を乗り越える話だ。

時系列は恐らく原作開始前。道行く人が何やら、「ロキ・ファミリア」の遠征がどうのこうのとか言つてたし。だからヘスティアはいるとしても、ベルはまだ来てないのかな？と予想している。

チラッと横を見れば、ピンク髪的女性が受付している。この人はミイシャさん・・・

だっけ？彼女がここで働いているということはどういうことだ（？）

原作で有名なキャラがいる所より、名前が載ってない所がいいので（原作に下手に聞
わらないようにするため）零細を希望した。

「お待たせしました。リストになります。それと住所も書いておきましたよ」

「ありがとうございます。助かりました」

「いえいえ。ファミリアに入団した際は是非いらしてくださいね」

「はい、失礼しました」

俺はお辞儀をしてこの場を後にした。どうせなら女神様がいいなど邪な願望を抱き
ながら。

—————

「ごめんくださいー！誰かいませんかー？」

日本でいう、なんか昭和溢れる感じの空き家っぽい建物あるじゃん？こう屋根に瓦積
んであるあれ。

俺はリストに記されていた住所を辿ってここに来た。

所有者の名はラクシユミー。確か豊穰と運を司る神様だっけか？を選んだ。リスト
に書いてある神々はどれも聞き覚えがなく、唯一分かったのはこの神様だからという
が理由の一つ。

扉の前で呼ぶこと数分。

「はいはい、元気があってよろしいが新聞ならいらぬよ」

「違います。新聞の勧誘じゃないです」

「新聞の勧誘じゃない？ならそなたは何しに来たのだ？」

目の前の女神様は可愛らしく首を傾げる。

・・・改めて見ると綺麗だな。背は低めで顔は幼さがやや残る大人な感じ。古風な喋り方。何より褐色肌に豊かな胸。豊穡を司るだけある。土いじりしてたのか、土の匂いがかすかに漂い、手を見れば少し汚れていた。

「眷属になりたくて来ました」

まあ、俺の感想はどうでもよくてね。

「・・・私の？」

「貴女の」

「・・・嫌がらせ？」

「ちやう」

「・・・マジ？」

「マジ」

目の前の女神様は目を見開く。信じられないと思ってるのだろうか？

「えと、俺は眷属になれるんでしょうか？」

沈黙を破る。心臓に悪いからね。

「！ あ、ああそうだな。そうだのお！そなたを私の眷属として歓迎しようぞ！」

「本当ですか？ありがとうございます！」

晴れて冒険者になった。

始まり 後編

「そうと決まればまずは恩恵じゃな！おっと、手を洗わねば。私としたことがかなり浮かれとるのお！」

あ、そなたは私の寝室で服を脱いでて。

そう言い残し、女神様、改めてラクシユミーは、テンション上げたまま洗面台に向かった。

本人曰く、

「敬語も敬称も不要じゃ！何せ初めての眷属なんじゃからのお、堅苦しいのはお互い無しにしようぞ！ガハハハ！」

とのこと。

俺は言われた通り寝室・・・てか、リビングじゃねーか。布団敷いてるだけだろこれ。部屋と呼べねーよラクシユミー。と内心で思いつつ、脱いだ。

「・・・すっごいな」

俺は自分の体を見る。力を入れずとも筋肉が浮いており。ふっ！と腹に力を入れれ

ば見事なシックスパック。前世では全く筋肉無かったからなんか嬉しい。友人に自慢したいし、なんならこれで外に行つて見せびらかしたい。もう本当にありがとう、神様」
「? どういたしまして?」

「はうわ!」

うつわ、変な声でた。え、独り言呟いてた?

「安心せい。友人に自慢したい、の所からしか聞いておらんわ」

「聞かれたくない所じやないすか。恥ずかしーなもう!」

ま、まあ前世のことを知られたわけじやないしい? ベベベ別にいいよね!

「ところで・・・」

まずい、感づかれたか・・・?

「そなたに友達がいたのか?」

「いたよ!」

三人ほどね!

—————

恩恵。それは神々から与えられる力であり、その力を使って冒険者はモンスターを倒すのだ。ダンジョンは深く潜るにつれモンスターも強くなる。だから冒険者に恩恵は

必須。また、何かしらの方法で経験値を集めることで、冒険者も強くなる。成長には個人差がある。

L v. 1

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

”魔法”

”スキル”

【言語理解】
コミュニケーション

・会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞ】
サード・ワゴン

・三つの中の一つから獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄(0)

「これがそなたのステータスじゃよ」

「ありがとうございます……あれ？」

スキルがある。それも二つも。俺は羊皮紙に書かれているスキルを見る。

【言語理解】……まんまだね。文字も言葉も分かってたからこれはいいや。スキップスキップと。

【三択からどうぞ】……知らん。どこに三択あるんだよ。選択肢を見せてよ。名称もルビもいとおかし。すると

① 剣（鉄製）

② 籠手（革製）

③ タワシ

「いやタワシて！」

「!? ど、どうしたのだ大声出して！それにタワシとはなんじゃ!」

目の前に三択現れる。念じたからかな？

「タワシとは主に清掃目的で「知つとるわ!」ですよねー」

テンパってて草。

「ごほん。まあいいわ。スキルが二つもあるのは稀じゃからのお。内容はともかく、

恵まれておるよそなたは」

「そつすかね」

そう言われると嬉しいな。内容はともかく。

「で、何か分かったのか？」

俺は話した。

「なるほど・・・ならば籠手を選べ」

「それはなぜ？」

「武器はギルドから支給されるからじゃ。剣の性能が良すぎると成長に悪い。優先すべきは命を守る装備だと私は思うよ」

なるほど、よく考えてるし一理ある。

「籠手にしようかな」

「うむ」

俺は②の籠手を選び、何も無い所から籠手が落ちてきた。なんかシユール。てか、タワシて（二度目）。モノの範囲広いな。

「あ、俺はどこで寝ればいい？空いてる部屋無いよね」

「？ そんなもん、ここでよかろうて」

なにキョトンとしてんの？危機感天界に置いてきたの？

俺は（現実から）逃げるようにギルドに向かった。

――

「恩恵授かったので冒険者登録をしにきました」

「え、もうですか？まだ三時間ほどですよ？」

ギルドに到着。受付嬢はさっきのエルフさん。一日も経過してないことに驚いてい
るようだ。そんな貴方も綺麗だな（キモい）

「早くに決まって早くに授かって早くに登録したかったんで」

「はあ、そうですか・・・」

早くに、と言いきり過ぎてわけわからなくなってる。

「では主神とご自身のお名前をお願いします。それと文字を書けますか？」

「（文字書けないから）代筆で。主神はラクシユミーで、俺は――あれ？」

「？」

俺の名前ってなに？前世の名前？それとも生まれ変わったから違う名前？

やべ、どうしよ平八郎の乱。

「・・・あの？」

「あ、アラン！アラン・スミシーでお願いしやすー！」

「は、はい」

アラン・スミシー。確か架空の名前だった気がする。この世界ダンまちに登場しない自分。うん、ぴったりだ。

「以上で登録は完了です。武器はあちらで受け取れます。他に何かお聞きしたいことはありますか？」

「ダンジョンについて詳しく知りたいんですが、大丈夫ですか？」

これは必須だ。既存の知識と擦り合わせ、理解を深める。それは命を守ることに繋がるので学べられるのなら学んでおくべきだ。

・・・なんか周りが目を見開いて驚いてるけど。

「なんなら本か何か貸してくれませんか？自分でやるんで」

「で、では空き部屋へどうぞ。後で私が持つてきますので」

「どうも」

案内された空き部屋で待つと、すぐに沢山の本と紙を用意された。自習してくれだそう。俺はお礼をいい、上に積まれた本から読み始めた。

「ふいー、疲れた・・・」

勉強が一段落して外を見ると、真つ赤な夕日が差し込んでいた。

以前の俺はここまで頑張れなかっただろう。でも、好きな作品であるダンまちのダンジョン事情を知れるのは楽しい。だから集中できた。

「お疲れ様ですスミシー氏。こんなに読んだんですか？」

「ええ。とは言っても上層だけですよ」

Lv. 1ならそれで充分だろうよと、セルフツツコミ。

「スゴいですねえ、スミシー氏は」

「? ああ、やっぱ冒険者つて座学が苦手なんですかね？」

やはり小説を読むと、基本的に座学に弱いイメージがある。ベルもそんな感じだったと……いや、エイナさんのスパルタ授業のせいかな。

「基本的に苦手と嫌いの両方です」

「最悪じゃないすか」

俺は苦手かな。別に嫌いではないんだよなあ。

エルフさんは沢山文字が書かれた紙を見ると、

「字は読めませんが、これなら大丈夫そうですね。明日からダンジョンへ？」
字は日本語だし仕方ないね！

「取り敢えず一階層を中心に活動してみます」

「分かりました。それと担当は私が務めさせていただきます、名はソフィと申します」
エルフさん↓ソフィさんか。これからよろしく願います。

「相談事や階層の更新の際はお申し付けください．．．あー、敬語じゃなくていいよね？」
いや、急つすね。

晴れて冒険者になった。

—————

冒険者になって後日。

俺は朝早くからダンジョンに来ていた。理由はもちろん好奇心から。次いで生活費のため。

ラクシユミーから頑張れと言われ、ソフィさんから油断しないでねと言われた。

だからダンジョンに入って気持ちを切り替える。油断慢心ダメ絶対。ヨシ！

「ほえー、明るいな．．．」

一階層。

薄暗い感じをイメージしていたのだが、そんなこともなく。鉱石か苔でも光っているのだろうか？別に見えづらいこともなかった。

目指す場所は小さなルーム。休憩に使えるし、沢山産まれても囲まれない限り逃げられる。ここを中心に活動しよう。

「お、あれがゴ布林か」

目の前には一体のゴ布林。緑色の体に尖った耳。そして鋭い目。初見だと少し怖いな。

「だが、ここでビビるようなら・・・」

冒険者に向いていない。

ふうーと息を吐き出し、俺は一気に駆け出した。

「!?」

「遅い!」

奴がこちらに気付き、振り向くと同時に斬った。支給品の剣は劣悪なもの聞いたのだが、それでもなかった。頭が体から離れた死体を見て思った。

・・・それよりも。

「やっぱスゴいわ、この体」

恩恵授かる以前も思ったが、この体は運動神経がとても優れてる。下手したらオリンピック選手になれるくらいに。それに恩恵が加わるのだ。もしかしたら五、六階層に通じるレベルかも——

「油断も慢心もダメ絶対って決めたらさつき。しばらくこの階層だ」

うんうん。いきなり破るのはダメだね。ベル君でももう少し慎重を持つてる・・・よ

ね？

「魔法撃ちまくってたわそう言えば」

俺もそうなるのだろうか？なるんだらうな。日本人たるもの魔法に憧れを抱いて当然だ。夜中にダンジョンに向かわないもの、調子に乗って精神枯渇を起こすと予想できる。

「気を付けないとなあ・・・」

魔法に思いを馳せつつ、探索に集中した。

原作開始

ミノタウロス

あれから一週間が経過した。変わったことと言えば、一階層から三階層へと足を進めたことだ。コボルトとの初戦闘は特に苦戦することもなく呆気なく終わった。

日常生活では変わりなく、主神であるラクシュミーと楽しくやっています。

そして、一週間が経つと待っているのはあのスキルだ。

①乾電池（単三）

②羊皮紙

③レイピア（鉄製）

ラクシュミーと相談することなく③を選んだ。てか地球のモノもでるんすね。

—————

それから一週間。今日も今日とて探索で稼いでます。お金は少しずつ増加傾向にあるが、それでも雀の涙。ラクシュミーに贅沢させたいので頑張ろう！

ソフィさんの紹介で、エイナさんの座学を受けました。舐めてかかると死にます。マ

ジで。

一週間が経ったので例のスキルつす。

① 包帯

② ポーチ

③ 調合書（薬）

「どれがいいと思う？俺的には①②③」

「それ全部じゃよ。まあ、好きな選ぶがよい。あつて困るものじゃなし」

「りよ」

・・・決められなかった。じゃあクジ引きで。

選ばれたのは③でした。

—————

さらに一週間。変わったことと言えば、五階層へと進出したぐらいか。新たに手に入れたレイピアは大変素晴らしく、この階層のモンスターにも通じた。それとフロツグ・シューターのペロ攻撃を鳩尾に喰らいました（；∨———へ；）

誤つてラクシユミーの尻を触った後、とても気まずい空気になっちゃった。それプラス、酒場の街娘と遭遇し勧誘されました。それからというもの、バベル上部から視線を感じるようになった。・・・やべ、武者震いがががが。

一週間に以下略。

①ファイアアロー（魔法）

②刀剣乱舞（スキル）

③座薬

やば。

「ラクシユミー今回ヤバイよ、どうしよう?」

「ああ、そのようじゃな。③の落差がヤバいな、うん」

俺はともかく、ラクシユミーは珍しく落ち着きがないように見える。モノとは魔法とスキルも例外ではなかったようだ。今回は大当たりだな。

「好きなの選ぶがよいぞ。痔なら③じゃろうて」

「ラクシユミーも痔になるのか?」

「ハハハ、はっ倒すぞ?」

びえん。

—————

「ほれ、お前のステータスじゃ」

「どれどれ・・・」

アラン・スミシー

力：G 2 3 0

耐久：H 1 0 1

器用：H 1 4 4

敏捷：G 2 2 3

魔力：I 0

”魔法”

”スキル”

【言語理解】

・ 会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞ】

・ 三つの中から一つ獲得

・ 選んだモノの貯蓄と引出し

・ 一週間後に再選択

・ 貯蓄（1. 籠手 2. レイピア 3. 調合書

4. 【刀剣乱舞】

（【刀剣乱舞】）

・ 剣での戦闘時、必要なアビリティに補正

・ 剣術の最適化

こんな感じ。

私見だが、アビリティの伸びは速いほうだと思う。この体の可能性と言うべきか、化け物染みた才能が時折垣間見れる。嬉しいと思う反面、それが少し怖かったりする。

そしてスキルにある貯蓄はいつでも取り出すことが可能なので、ダンジョンに行かない日は全て収納しているが、やはりお金やポーションなどの類いは無理だった。あくまでもスキル入手物のみ。スキル「刀剣乱舞」も貯蓄でき、好きな時に使用できる。もはや任意のスキルと変わらないような・・・。

魔法ではなく「刀剣乱舞」を選んだ。理由としては出費を抑えるためである。確かに魔法があれば手札が増え、決定打になるだろう。でも、俺は貧乏の零細派閥。精神力回復薬なんて買ったたら、今よりもっと手取りが減る。ならば戦闘向きのスキルの方が良い。自分でも最善の判断だと思う。

「じゃあ、おやすみ」

「ああ」

俺は寝た。隣にはラクシユミー。一緒に寝たいのじゃと言われたらねえ？しよーがないよなあ？（ゲス顔）

—————

時系列はそろそろ原作開始に差し掛かろうとしていた。「ロキ・ファミリア」が遠征か

ら帰ってくるのと専らの噂だし、この前コート？を着た白髪頭を見かけたし。ならばあのイベントが始まる。

どうしようか？出現するのが一体だけなら放置。襲ってくるようなら逃亡するし……。

まあ、遭遇なんかしないか（笑）

「ヴモオオ……ヴモ？」

「あ」

ふと、思い浮かんだ言葉は「フラグ回収」。

逃げた。

「なんでフラグ建てるんだ俺のアホオ!!」

「ヴモオオオオ!!」

「こつちだ【ロキ・ファミリアアア】!!ミノタウロスはここだよお!だから助けてお願いします!!」

迫り来るミノタウロスから逃げる。逃げつつ救援を呼ぶ。戦う?多分勝てん。戦闘スキルがあるつても、補正スキルやし……ん?

【刀剣乱舞】

・ 剣での戦闘時、必要なアビリティに補正

・ 剣術の最適化

・ 剣術の最適化

いけるかこれ？

倒すまでとはいかなくとも最適化された剣術で補正付きなら数秒間なら渡り合える。

俺はレイピアを出してミノタウロスと向き合う。支給品よりも上等なこれなら多少はいけるはずだ。なにより上質な経験値となる。リスクキーだが逃す手はない。賭けに出る。

「ヴモオア！」

「っ！ ハアアア!!」

繰り返されたのは右の掌。勢がいいものの、後先考えず狙いが丸分かりの雑な大振り。なので充分避けられる速度だ。

俺は右前下辺りに躲しながら脇腹を斬った。その際重たい反動がミシミシと両腕に伝わるが、なんとか斬り抜けられた。

損傷部位を確認すると、浅く血が垂れる。切っ先だけだ。切っ先部分で斬っただけで、こちらの腕が折れるかと思った。

「……うん、勝てる気がしない」

「ヴモ？ヴ、ヴモオアツ!？」

こんな無理ゲーだ無理ゲー。絶対に勝てないし。二度目の逃走を凶ろうと思ったら、牛の断末魔が響いた。

「……」

「うつつ、ありがとうございます。助かりました」

目の前にいるのは灰髪の狼人。無言でこちらを見ないでくれませんかね。あなたの顔すげえ恐いっす。

【凶狼】ベート・ローガ。Lv. 5にして、かの派閥の幹部を務める敏捷特化の冒険者。ロキ曰く、性格はツンデレのこと。

「……せめてもの詫びだ。魔石はくれてやる」

そう言つて去つていった。本当になんだったの？あ、魔石助かります。

あく、ベルはどうなったんだろ。原作通りになったよね？原作崩壊とかやだよ、マジ勘弁。

「だああああ!!」

どうやら杞憂のようだ。

俺は足早にダンジョンから立ち去り、換金すべくギルドへと向かった。

—————

「ミノタウロスと戦った!?何やってるの貴方は!」

「はい、すみません」

「不可抗力なんです。」

原作知識があつたとはいえ、遭遇するとは思わな．．．いや、よく考えればミノタウロスにバツタリ出くわすと分かるはずだ。

「それにしても、よく無事だったね．．．」

「二太刀入れた後に【凶狼】に助けてもらったんです」

「二太刀って．．．」

ソフィさんは驚くどころか呆れているように見える。

普通は冒険者になっておおよそ一ヶ月の新人に、ミノタウロスに攻撃すること事態無理なのだ。

ホントこの体様々。

「分かったわ。それとどうする?【ロキ・ファミリア】を訴えられるけど」

今回の件は明らかに【ロキ・ファミリア】の過失となる。上層にまで追いやつたのだ。ソフィさんの言う通り、訴えて慰謝料を請求できる。

「やめときます。それと換金お願いします」

「そう？分かったわ。ちよつと待つてて」

これ以上原作と関わるのはゴメンだし。ミノタウロスの魔石貰ったから別にいいや。お金受け取ったらとつとと帰ろ。眠たいや。

「はい、お待ちどうさま」

「ありがとうございます」

いつもよりズツシリした財布に、少しばかり嬉しくなった。

「テンション上げてけ!ケモ耳だぞオラ!

「ほれ、更新終わったぞ」

「どうも」

「どうしたのじゃ。そんな腑抜けた声を出して」

「どつと疲れが来たんよ。ミノタウロスと戦ったから」

俺は敷かれた布団に寝っ転がりながら答える。ご飯食べて風呂入った後はまだ元気があった。でも布団にうつ伏せなつた瞬間これだ。これが布団の魔力。恐るべし。

「ふむ。口で簡単に伝えた方がよいか?」

「サンクス」

ラクシユミーは俺の状態を察したのか、要所要所を分かりやすく伝え始める。まあ、魔法もスキルも発現してないからアビリティだけだが。

「ミノタウロスに一太刀入れたから力が伸びておるな。次いで耐久。最後に敏捷かの」

ん?

「敏捷より耐久が上がったのか？」

俺の予想だと、力と敏捷が同じくらい伸びていたかと思つてた。だって全力で逃げたし。

「それほど奴の体が硬かつたようじゃな。腕を持つてかれそうになつたんじゃろ？ 私
は納得しとるよ」

「あゝ」

ラクシユミーの意見に納得した。てか、もう考えるのも面倒だ。眠くて意識がZZZ
「寝たのか？ 全くこやつは・・・今日はしつかり寝て、明日も頑張るのじゃよ。そして

「——生きて帰つてこい」

一番最初の眷属アランを見るラクシユミーの目は、呆れから慈愛の眼差しへと変わる。優しく撫でながら眠つた。

—————

そして後日。

なんでかラクシユミーを抱いて（意味深）寝てた俺は、疲れが綺麗さっぱり消えてす
こぶる快調だった。筋肉痛覚悟してたけどそんなこともなく。むしろいつもより元気

だった。

俺はダンジョンの出入り口であるバベルへと向かう。最初は道に迷って、恥ずかしながらラクシユミーに付き添ってもらったが、今では慣れたものだ。スイスイ進めちゃう。

「はい、到着と」

辿り着きましたね。途中道行く冒険者と肩などが当たっちゃうと、高確率でバトルイベントが発生するので注意を払いましょう。また、バトルを回避するには大声で「犯されるー!!」と叫べば逃げ出せます。敵はホモ疑惑、自分はその敵から狙われちゃうかも。そんなことにならないよう気を付けましょうね。

「・・・何考えてんだ俺は」

気分が上がってるのだろうか。快眠だっただけで、舞い上がりやがって。俺は俺に呆れた。

今日も今日とてダンジョンで稼ごうとしたら。

「あのか。そこのお兄さん」

「ん?」

後ろから声が掛けられ、条件反射でくるりと振り向く。これで俺じゃなかったら恥ずかしいね(笑)

まあ、自意識が過剰になったわけではなく、声を掛けられたのは本当に俺だったようだが。

目の前に立っていたのは黄緑色の髪と瞳。そして犬耳から察するに種族：犬人族。敏捷重視なのか上下軽装に揃えられており、所々にほつれと汚れが見られるくらい年季が入った服装。年齢は同じくらいかな？綺麗より可愛い女の子だ。

「なんですか？」

本当になんですか？客引き？美人局？怖いよお。

「えと、あの、パーティを募集とかしてたりとか・・・」

「？ えくと？」

「わ、私は別に怪しい者じゃなくてですわね！昨日ギルドに立ち寄った時に、偶然聞いたちゃいましてね！強い貴方とならもつと稼げると思った次第です、はい！・・・あとイケメンだし」

最後が小声で聞こえなかったが、簡単にまとめるとどうやらお金が欲しいみたいだ。犯罪とか何か悪いことに俺を陥れようとしているのか。それとも俺みたいに貧乏な零細派閥なのか。多分前者はない。緊張しているのか、顔を真っ赤にしている女の子から悪意は感じられない。なら後者？

それと関係ないが、知らない人と喋ると早口になるよね。分かるよホント。

「まあ、金がいるのも俺も同じだしなあ」

「!・じゃ、じゃあ!」

ソフィさんからパーティ組んだら到達階層進めてもいいと言われている。この先組めるか分からないので、ここで組んどくのも有りだろう。

「取り敢えず三日間だけ組んでみて、それから決めていいですか?」

「はい!それで構いませんよ!」

やったー!!と喜びを露にする女の子。可愛いから、なーんて邪な考えで組んだわけじゃないから。あわよくば、なんて思っていないから。

「あ、そう言えば名前を教えてくださいませんよね!」

「え?・・・ああ、そうですね」

「私はエリス・キヤルロ、【ソーマ・ファミリア】所属の冒険者です!あと敬語じゃなくとも大丈夫ですよ!」

先ほどとはうってかわり元気に自己紹介を決める。なるほどなるほど。エリス・キヤルロね。そして所属は・・・え?

「【ソーマ・ファミリア】?」

「そうですそうです、【ソーマ・ファミリア】・・・あ」

「・・・」

お互い無言になる。

俺は知っている。金のためなら奴らは犯罪を平気で犯すことを。主人公ベルのサポーター、リリルカ・アーデもその派閥出身で、金が欲しいために同じ派閥の奴らから殺されかけたくらいだ。だとしたらエリスはどうなのだろうか。ザニスとかカヌウとかと同じ下衆・・・ないな。これでそうだったらとんだ策略家だ。

彼らの悪評は広く知れ渡っているので、好んで組む人はいない。それを知ってるエリスは口が滑ったと言わんばかりに俯いている。

「俺はアラン・スミシーだ。最近新興した『ラクシユミー・ファミア』所属で、同じく敬語とか別にいららないよ」

「え？あの、知ってますよね？その・・・」

ええ、知ってますよお姉さん。原作読みましたからね（ニッコリ）。

「酔ってるのか？」

「よ、酔ってない！酔いが解けたから、真面目に働いて抜け出そうとしてるんだよ！」

「なら大丈夫だよ。で？組むの？組ま「組む！」おおう」

まだ途中なんだが。

それと酔っていると本当に危ないので、冒険者の皆さんお気を付けて。

「ほいじゃあ、改めてよろしく」

「(ち)ち(こ)そよろしく!」

当面は資金集めか。

頑張つていこー!

—————

エリスと組んで思ったことは、ダンジョン探索が効率的になったことだ。獣人の嗅覚と聴覚を最大限利用する索敵は、モンスターとの位置を的確に補足した。また、エリス指導のもと、階層を五階層から七階層まで上げられた。キラアートを倒せるか不安だったが、自慢のレイピアは通じてひとまず安堵した。

「しっかし、本当にスムーズになったよ」

「そうかな?」

「うん。なんか無駄がないっていうか。援護も的確だし」

休憩時間中に思ったことを口に出す。彼女の戦闘スタイルは短剣による速さ重視の剣術。そして、ここぞとばかりに繰り出されるボーガン。探索もそうだが、彼女自身からも無駄が省かれている。

組んで分かった性格は、(仲間には)元気で時折呑気な姿を振る舞う感じだが、意外と現実主義者な側面を持っており、戦闘の際には油断が一切感じられない。失礼な話だが、調子に乗るタイプだと思つてた。

「一時サポーター組んだ子から見えて学んだんだ。これ私に向いてるんじゃないか!? てね」

「待った、教えてもらったんじゃないやなくて見て学んだの?」

「? そうだけど」

まじかこいつ。こんな奴が「ソーマ・ファミリア」で埋もれていたのかよ。

実際見たら分かる。見ただけでもものにする（努力したのだろうが）こいつは、間違いなく天才だ。「ロキ・ファミリア」にいたら頭角を表していただろう。

正直もつたいたいと思うが、気になる点は他にもある。

「そのサポーターつてのは同じファミリア?」

「そーだよ。名前はリリ・ルカだっけ? だいぶ昔に組んだ子だから忘れちゃった」
エリスはてへっ、てな感じで笑った。可愛いなくそっ。

そのサポーターつてのは、十中八九リルカ・アーデだな。取り敢えず主人公と近いネームドキャラとは関わりたくないなあ。

てか、忘れるなよ。影響受けたんなら。

・・・それにしても。

「そんなことよりそろそろ行こー! たくさん稼がなきゃ」

「うっす」

呑気なのか現実的なのか、
本当に分からねえな。

呆気ない終わり

「回復薬を三つください」

「はいどうぞ。アラン、いつもありがとね」

俺は今、【青の薬舗】という店でポーシオンを購入した。この店は「ミアハ・ファミリア」が経営しており、主人公馴染みの店でもある。とある事情で借金生活を余儀なくされておられ、それに少しでも貢献したいと考えた俺は、足繁く通って常連となった。あとナアザさん結構好きだし（本音）

それとエリスと組むにあたって、資金に余裕が生まれ始めたので、いつも買う本数より多くしてみた。どっちかが怪我してもこれで平気だし。

「いいえ、何か困ったことがあれば言ってください。それじゃ俺はこれで」
「またね」

原作では新薬完成させて持ち直してたけど、今はまだ開発段階なのかな？素材がいるんなら取ってきますよ！

「あ、そういえば・・・」

スキル「三択サードからどうぞ」で選んだ中に調査書なるものがあつたはず。あれは使えるのだろうか？ほら、あのスキルは地球のものも出るから、向こうの薬の場合作れないじゃん。一回も目を通してないから分からないけど、使えないのなら辞書の方がまだ役立つよ。

俺はう〜んと考えながら帰路に着いた。一回読んでみようかと思うが、明日からまた探索開始だ・・・し？

「おや？そなたはラクシユミーのところのアランではないか」

「あ、ミアハ様こんばんは」

「うむ、こんばんは。何やら下向いて顎を触っているが、悩み事でもあるのか？よければ聞かせて」

おお、これが善神か。善意かつ無条件で悩みを聞いてくれるとは。他の神様も見習つてどうぞ。

悩み事・・・までとはいかないが、今考えているのは使い道のない調査書のことだ。あつても使わないので押し・・・ゲフンゲフン、差し上げよう。

「実はですね・・・」

「なるほどな。使い道のない本ではあるが、なかなかもつたいたなくて捨てられずにいると。確かに探索系には使い道はないな」

「ええ。ですからミアハ様が貰ってくれませんか？」

「よいのか？こちらからあげられる物はないが・・・」

「よくポーション貰ってるので、それでチャラにしてくれるとありがたいです」
「通い始めたのだからポーション貰ったからだし。」

「そういうことなら。うむ、承った」

「ありがとうございます」

俺は調査書を手渡した。ミアハ様から別れ際、こんな分厚い本をいつも持ち歩いてたのか？と言われた。いっけね。

本を断捨離できたのでルンルン気分。もうすぐあの祭りが始まるね。行こっかなあ。行くまいかなあ。どうしようかなあ。

「・・・ま、ダンジョンで金稼ぎだな。んで、ラクシユミーに誘われたら祭りに行く。うん、そうしよう」

今日の晩飯なーにかなあ♪ハンバーグがいーなあ♪なんて、呑気に歌う俺だった。

この時の俺はこの重大さに気が付いてなかった。あの調査書を巡って、ポーション革命が起きることを俺はまだ知る由もなかったのだ・・・。

—————

ちなみに「豊穰の女主人」に行きました。案の定ベルは飛び出し、俺にもとぼちちりが来るかなあなんて、思ってたけど全然だった。

リユーさんきれい。シルさんこわい。

—————

「じゃあ！一週間経過でスキルの時間だぜ！」

待ちに待った一週間。例の三択が今表示される。俺的にはそろそろ魔法を獲得してもいいと思ってる。パーティ最高。

ちなみにラクシユミーは朝イチから留守にしている。神々が集いし宴の準備があるのだとか。本人は別に行かなくていいと言っていたが、こういう時にはしっかり美味いものを食べてくれ。俺の言葉で渋々了承した。

「本当はラクシユミーの意見を聞きたいけど、別にいいよね！一週間くらい！」
我慢できない俺を許したまえ。優雅にティータイム（特売茶）を極め込んだ。

① ヒール（回復魔法）

② 成長補正（スキル）

③ 魔導書

「はいっ！はいっ！」

ゲホツゲホツ!!・・・は!?

「なんだこのラインナップは!!イカれてんのか!」

魔法にスキルに魔導書。しかもスキルに関しては例のあれ。いつかは現れるとは思ったが、今来るのか!これが!!

「こんなん②一択だろ・・・」

強くなれるのなら②を即効で選ぶ。成長補正なんて喉から手が出るくらい魅力的だし、俺は②を・・・待てよ?

俺の頭には獣人の女の子が映る。③なら解放できるのではないか。魔導書と云えば魔法を強制発現させるための本。それ故に高額で取引される代物だ。ならば取れる手は一つ。

「俺は——」

「お疲れさん。どうだった?」

【ソーマ・ファミリア】がある屋敷前。その屋敷から出てきた女の子に、俺は声を掛けた。

「ザニスが、『本当は一千万ヴァリスだが、この魔導書一冊と取引しようじゃないか。

なに、仲間に対する恩情というものだ』だつてさ！

ちなみに魔導書は一千万ヴァリスを軽く超える値段。このセリフからザニスがどんな奴かが分かる。

ま、そんなことはどうでもよくて。

「脱退おめでとうがいい？それとも、今までご苦労様のがい！『ガバツ！』うおつと！」
俺の言葉に我慢できなかつたのか、エリスは俺に飛び付いた。俺の胸に顔を埋めて表情が分からないが、その体は小刻みに震えていた。

成長補正のスキルは正直もつたいないと思うが、まあこれはこれで良かったのかもしれない。

「よしよし。これからよろしくな」

「うんーアランに報いるよ、この命に代えてもねー！」

こうして、エリスが仲間に加わった。長年派閥に拘束されていた彼女の顔はとても嬉しそうだつた。

お酒の恐怖 ※神酒ではない

エリスが無事脱退したので、我ら「ラクシユミー・ファミア」に入団させるためホームに連れてきた。ウチは少しボロいけど大丈夫か？と聞いたたら、ソーマよりマシだと笑顔で言ってくれた。

家主であり主神であるラクシユミーが帰ってくるまで待つこと数時間。ようやく帰ってきたと思つたら・・・。

「ほぅ？私が留守にしている間に女を連れてくるとはのお？お楽しみか？お楽しみなんじやるこれから」

「いや違いますよ」

「何が違うのじゃ？言うてみる」

ほら早く、とせかすラクシユミーから、若干の苛立ちが感じられる。まあ、同じ立場なら俺も腹立つが。

取り敢えず誤解を解くことから始めないと。

「あ、あのー！」

「？」

このギスギスした空気の中、隣にいたエリスが口を開く。

「私はエリス・キャロロと言います！」【ソーマ・ファミリア】から解放してくれたアランのためなら何でもやります！だから私を【ラクシユミー・ファミリア】に入団させてください！」

「勇気を振り絞ったエリスは、最後にお願ひします！」と言い頭を下げた。これにはラクシユミーも驚くが、

「・・・ふむ。エリスと言ったか？お主の覚悟は充分過ぎるほど伝わった。入団を許可してもよい」

「な、ならー！」

ラクシユミーはエリスを認めたようだ。暗かった顔がパアツと明るくなる。しかーし！

「ただし条件がある」

「じよ、条件・・・？」

「おいおい、俺の時は条件なんて「シヤラアアップ」ええ・・・」

「ゴホン。ああ、これを聞き届けてくれるのなら正式に許可するのじゃー！」
「ビシィー！」という効果音を叩き付ける。それにエリスは唾を飲み込んだ。

「その条件とは——」

「それでなそれでな！アランのやつ、私の留守の間に畑の雑草を取り除いてくれるのじゃ！アイツは知らん顔しとったがバレバレなんじゃよ、誰が土いじりしとると思つてるんじゃ全くう！」

「アランやさしくい、でもでもまだありますよ！アランは探索帰りにお腹空いたらジャガ丸くん奢ってくれるんれすよお？私は毎回断るんれすけど、間違えて多くかつたから貰つてくれ（キラーン☆）って言うんれすよ〜！」

「アランカツコい〜い！」

「優しくてカツコいいのが、アランなんれすよ〜？」

「アハハハハハハハツ!!」

「なんじゃこりゃ」

ラクシユミーが出した条件とは、俺のことを喋れというもの。必要最低限のことしか報告しない俺について、探索中どんなことしているのかとかを知りたいのだから。それを肴に、同郷であるガネーシャから強奪・・譲り受けたお酒を飲みながら喋つたら二人ともこうなった。

俺？この二人のテンションに引いてる。てか恥ずかしいし、キラーン☆とか言っ
てねえわ！

「おいアラン！酒が足らんぞお、もっともってこお〜い」

「もうないよ」

「なら買ってくるのじゃ！ほらお駄賃上げるから！余ったお釣りはくれてやるのじゃ
！」

「子供か俺は！それにこんな夜更けに店は空いてないぞ」

「あ、それなら私が行きますよお？子供時代はよくパシられてましたから、足の速さ
は自信ありますのです！」

「行くな行くな酔っ払い！てか反応しづらいな！」

コイツらは本当に……！！

酔っ払い共のダル絡みは、およそ二時間後に寝落ちするまで続いた。

—————
そして翌朝。

エリス・キヤルロ（16）

力：E↓B766

耐久：E↓B720

器用：C↓A801

敏捷：C↓A847

魔力：E↓C642

〃魔法〃

”速度増加”^{速ま} 【加速】^{アケセル}

〃スキル〃

【犬人咆哮】

・獣化

・全能力値に高補正

「これで契約完了じゃ。存分に励むがよい」

「ありがとうございます！」

エリスはラクシユミーに礼を述べた。彼女は獣人特有のスキルである獣化に加え、超短文詠唱で速度を上げる魔法を所有していた。正直羨ましいが、

「それにしても凄い伸びだな。どれだけ更新してなかったんだ？」

俺は気になったことを尋ねる。上がり幅が凄いので誰でも気になるだろう。

エリスはスツと指で数字を表す。指は2本・・・2!?

「お前2年も上げてなかったのか!？」

「う、だって更新にはお金が掛かるから……。それに更新しに行ってもコイツは金を持つてるってカモだと思われるし……」

「うわぁ……」

改めて「ソーマ・ファミリア」の闇を垣間見た。味方から狙われるとかどんだけだよ。俺もラクシユミーも実情にドン引きである。

「まあなんじゃ。これからはどんどん更新してやるし、アビリティも充分高い。それならば、もうすぐランクアップするのではないか?」

「ですかね……」

ランクアップとは、神々が認める偉業を成し遂げることで恩恵を更なる高みに昇華させること。数値は一旦リセットされるが、積み重ねたものは器に貯金される。その他の条件としてアビリティのどれかがD評価以上である必要がある。

確かこんな感じだった。エリスはどれもD評価を超えている。ならば可能性は大いにある。

「Lv. 2になればもつと先の階層に行けるから、俺も頑張らなきゃな」

アラン・スミシー(16)

力：E530

耐久：E 5 1 2

器用：F 4 2 0

敏捷：E 5 0 1

魔力：I 0

魔法

スキル

コミュニケーション
【言語理解】

・会話や文字の自動翻訳

【三択サードからドどうぞワズン】

・三つの中から一つ獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄（1．箆手 2．レイピア 3．【刀剣乱舞】

【刀剣乱舞】
ソードダンス

・剣での戦闘時、必要なアビリティに補正

・剣術の最適化

そう、俺だって伸び率は（異常なくらい）速いのだ。今はエリスの後ろを着いていく

形になるが、それでももつと成長できるはずだ。目指せ半年ランクアップ！

「それより気になったんじゃが・・・」

「え？」

「なんで顔に手形があるのじゃ？」

「ああこれ？」

酔い潰れたラクシユミーとエリスを、適当に寝かせて俺も寝ようとしたら、

『えへへへ、あらんもいっしょに寝よう』

『え、あ、ちよっ』

エリスに引つ張られて寝かされたのだ。離れようとしても、コイツの力が強すぎて離れられずそのままダウンした。そいでエリスが朝起きた時に、

「叩かれましたね。正直首が挽げるかと思った」

「くくくくくつ!!」

未だヒリヒリする俺の頬、羞恥でカツと赤くなるエリスの顔。面白いもの見たと綻ぶラクシユミーの口元。

「本当にお楽しみじゃったわけか」

「どっこがよ」

あ、でも抱き着かれた時はスゲエいい匂いがして何がとは言わないけど柔ら・・・と

イカンイカン。

「じゃあダンジョンに行つてくるよ」

「あ、待つて。私も行くよ！」

「ああ、気を付けるようにな」

気持ちを切り替えてホームを出た。仲間がいるってのはいいものだ。テンションが上がるわ。

金ならある!装備を新調しようぜ!(尚、仲間のお金)

「私の装備を新調するついでに、アランも装備を新調しない?」

エリスの恩恵を刻み終え、ラクシユミー見送りのもとホームを出た後にエリスが提案した。なんでも、脱退のために用意していたお金が余り余ってるそうだ。

俺は当然断った。同じ派閥の一員とはいえ、エリスの私財を使うのは気が引けるから。

その旨を説明しても、頑なに首を縦に振らない。

「だって私のアビリティなら、今より深く潜れるんでしょ? 私がメインで戦うとしても、今の装備でアランは大丈夫なの?」

そう言われて改めて装備を確認する。スキルで獲得したレイピアと籠手。さらに支給品でギルドから貰った壊れかけの剣と胸当て。

心もとなないばかりか、今までよく無事だったな俺は。

「それにさ、アランにはずっと元気でいてほしいんだ。このまま遠慮されて大怪我でもされたら、嫌だよ私……」

「エリス・・・分かった、それならお言葉に甘えるよ」

俯くエリスを見て決心を固める。俺には危機感というものが欠如していた。そうだよな。エリスやラクシユミーのことを考えてなかった。

「ダンまち」の世界は過酷で、特に冒険者という職業は群を抜いて危険だ。今のままではいつか必ず死ぬか、仲間を失うだろう。

しっかりとしろ、アラン・スミシー！一人の時間が多かった前世とは違うんだぞ！

「本当に？」

「おう！オススメはやっぱり「ヘファイストス・ファミリア」か？」

「！ うん！バベルには掘り出し物がたくさんあるからそこに行こう！ピッタリのものがきつと見つかるよ！」

「よし、決まりだな。案内頼むよ」

明るく前を歩くエリスの背を追い掛けた。いい防具があるといいなと思いつながら。

「ほえ、色々あるんだなあ・・・」

「でしよう？私は自分の選ぶから、アランも選んでおいてね！金銭的なことは気にしなくていいから！」

お姉さんに任せなさい！と胸を張るエリスに自然と笑みが溢れる。姉弟よりも幼馴

染くらいが合ってるのかな?・・・そんなものと縁がなかったけど。

待ち合わせの時間を決めて、別行動となった。俺はまず防具から揃えようと防具のコーナーへと足を運んだ。

「鉄製の鎧」

これは重そうだなあ。俺の戦闘スタイルと合っていない・・・って、これドワーフ用じゃねえか。別のものを見ても似たようなものだった。ヴェル吉のがあったけど、ピンとこなかったのでパス。

「盾」

これは普通に有りだ。だが、不意打ちに対応出来なかった場合危ない。頑丈そうな物がそれなりにあるので、一応候補として考えておこう。

「革製の鎧」

先程より軽く、着ている服の上から装備できる。戦闘衣などと組み合わせることで、防御力の底上げが可能・・・これじゃね?

「決まったな」

俺は革製の鎧をメインに探す。俺のサイズと合ってるのはどれだろ。これはデカイ。これは小さい。うーん、中途半端。あれも違う、これも違う。どこだどこだくと・・・おや?

「これかな？」

俺は箱の中に置いてあった防具に手を伸ばした。実際にサイズを確認してみると、存外悪くなかった。

「これを作成した素晴らしい鍛冶士の名前はなんだろうな……」

シトリー・ハンナ。近くにいた店員に詳しく聞けば、最近Lv. 2になった女性冒険者で、ランクアップ前に鍛えた最後の防具なのとか。機会があれば会ってみるのもいいだろう。

よしよし、防具は決定だね。次は武器だ。これは支給品の剣を代えよう。レイピアはまだ使えるし、なんなら刃こぼれしてない。不思議だね。

「……だな」

武器専門コーナーに辿り着いた。遠くでエリスが集中して吟味していた。後で声掛けよ。

性能重視。オークみたいなデカイ敵と戦うのだ。防御は最低限にして、ズバツと斬れるのがいいよね。

防具みたいに合うものを探し、

「……これがいいかな」

サーベル状の剣。切れ味も良さそうで耐久面も申し分ない。鍛冶士も案の定シト

リー・ハンナ。もはや運命だろ。

全部決まったので、エリスのもとへ向かった。彼女も丁度終わったらしく、一緒に会計へと進んだ。

—————

十階層。

そこは霧が立ち込めるエリアであり、そのせいか常時視界不良に陥る。加えてオークという大型モンスターも新たに出現し、この階層に来た冒険者は苦労を強いられる。

「アラン前方に二体!」

「了解! 二体任せる!」

だがしかし、俺にはエリスという獣人の仲間がいる。彼女の聴覚嗅覚ならば即座に発見できるのだ。例えば迷子になってもエリスがいれば安心だ。頼りきりにするのは心苦しいが、慣れるまでの辛抱だ。

「よし、倒した!」

「こつちもだよ!」

先程購入した剣で戦ったが、充分過ぎるほど通じた。防具だつて動きを阻害されることなく効果を発揮している。エリスの言う通り、買ってよかった。

彼女も新調しており、年季が入ったボロボロだった服から新品に取替え、簡単に胸

当てを装備している。武器も中層にも通じる短剣にしているのだとか。以前と同じく敏捷重視の装備。

「じゃあ今日は撤退しようか。目的は様子見だし」

「そうだね。私も充分確かめられたし満足だよ」

俺達は十階層を後にする。オークもシルババツクもインプも倒した。一日の稼ぎとしてはこれでいい。

「私は換金してくるね」

「ん。ありがとな」

ギルドに入っていったエリスを見送った俺は、近くの椅子に腰掛ける。バベルではギルド職員が忙しそうに動き回っていた。その中にはソフィさんの姿もあったので挨拶をと思ったのだが、そんな空気じゃなかったので断念する。籠があったので祭りが近いのだろう。ならば忙しくて仕方ない。

時刻は夕方。俺達と同じように帰宅する冒険者でいっぱいだ……時折女性冒険者から視線が飛んでくるが気のせいだろう。俺がモテるわけない。

「お兄さん、お兄さん。イケメンのお兄さん」

「えあ?」

いきなり声を掛けられたことにより、間拔けな声が出る。待った、イケメンのお兄さ

んと言ったか?ヤベエ、反応しちまった。

「貴方で合ってますよ、お兄さん」

俺の視線は斜め下。目の前には俺に声を掛けたであろう女の子が。てか、お兄さん連呼すな。

・・・じゃなくて。アニメを見た俺なら分かる。この服装でこの声の主は絶対。

「はじめまして!私はリリルカ・アーデと申します!お兄さん、サポーターをお探してはないですか?」

「ぐはあっ!?!」

「お、お兄さん!?!」

俺は吐血する。このままだと原作がががが。とりあえず仲間と相談して決めたいと答えておいた。

価値を知っておけば億万長者だったのに……

【怪物祭】とは、客の前でモンスターをタイムする催しで、都市の治安を守る【ガネーシャ・ファミリア】が主導で行っている。

モンスターを地上に出すのはどうかと思うが、意外にもあのギルドが協力し、神々の楽しければそれでよし！というスタンスがあるだけで、別に反対意見はなかった。

「まあ、どうでもいいけどね」

「？ 何か言ったアラン？」

「いや、それより今日も稼ごうか」

そう、俺ことアラン・スミシーは祭りとは無縁のダンジョン・・・少しはあるかな？稼ぐためにそこに来ており、人混みが少なくなるであろう夕方、そこでラクシユミーと合流して祭りに参加することになった。

「ええ、いっぱい稼ぎましょう！今日は冒険者は少ないのでモンスターが狩り放題ですよ！」

変わったことと言えば、サポーターとしてリルルカ・アーデとパーティを組んだこと

だ。とはいえ、現時点では仮契約期間の様子見と言ったところ。そうなった理由としては、役に立つと思ったら採用してほしいと彼女から懇願されたため。

原作主人公と関わるのは祭りの後。だからまだ原作崩壊しないはず！・・・隙を見せ盗まれてみるか？

「うん！私もアビリティ伸ばしたいし、今日も元気に頑張ろー！」

エリスの掛け声で出発した。

ちなみに、リリルカとエリスは面識がある。エリスにとつてリリルカは同じ派閥だった同胞で、だから「ソーマ・ファミリア」の現状を知っているエリスは、稼ぎの七割を提供すると言い出した。これには俺もリリルカも驚いた。そしてリリルカは反対したが、脱退したいのなら受け取ってほしいと説得した。

リリルカは覚えてないが、エリスは昔彼女と組んだことがある。ボウガンを使用した戦い方もリリルカから見て覚えた方法だ。恩返しって意味もあると思う。

「・・・金で本当に脱退できるのか分からんがなあ」

「ソーマ・ファミリア」を仕切るザニスは、悪人氣質で根っからの守銭奴。更にいえば、リリルカの変身魔法を使ってとあるモンスター達と接近して誘拐と密売をし、金稼ぎを企んでいたほどに。なので易々と手放すとは思えない。関係ないが、末端の団員のエリスはよく抜けられたな・・・てつきり足元見られると予想していた。

リルルカの脱退に関しては、スキルでもう一冊魔導書が出れば大丈夫だと思うが、都合よく現れるものじゃない。リルルカには我慢させるようで悪いが、原作通りにベルに頼るしかないと思う。

俺は流れに身を任せることにした。

—————

日時は祭り終了の数日後。

二人のエルフがオラリオにある建物に入る。そこは魔導士が使う杖など、魔法に関わる魔道具を専門に扱うお店で、レノアという老齢の女性が経営していた。

入店したのは【九魔姫】^{ナインヘル}リヴェリア・リヨス・アールヴと、弟子の【千の妖精】^{サウザンド・エルフ}レフィーヤ・ウイリデイス。どちらも三つ以上の魔法を扱う規格外の魔導士。この店に訪れた理由は、遠征後に修理に出した杖を受け取るため。レフィーヤはリヴェリアの連れ添いである。

「魔導士の杖は魔力を高め魔法の威力を変えちまう。魔法石はその要であたしら魔術師にしか作り出せない貴重品なんだよ」

「分かってる。無下に扱ったりしないさ」

どうやら修理とは魔法石の交換らしい。リヴェリアは店主から忠告を聞き入れた。

「違うさ！ああ、違うとも！何せその魔導書を作成できる魔術師なんて、魔法大国にだっていやしないさ！」

「馬鹿な……！では何故ここにある？かの魔法大国の魔術師にも作れない逸品なのだろう？」

リヴェリアの指摘は至極もつともな意見。魔術師の中でも高名の者でしか作れない代物で、レノアほどの人脈ならば宛ぐらいあるだろう。でも彼女は分からないと言った。ここに置いてあるのはおかしい。

その答えにレノアは、

「知らんさね」

「え？」

「これ売ってきた若僧は価値を知らぬ愚か者。その者に聞けば、団員が脱退のために用意してきた物らしい。だから、どこから入手したのか不明なのさ」

ちなみに、買取価格は六千万さ。とレノアは付け加えた。金額の多さに驚くが、億を超えた競売品の値段を優に超えるから安い買い物じゃ。とも言った。レノアの言う愚か者がこの魔導書の価値を知っていたならば、たかが六千万で買えなかつただろう。眼鏡を掛けたあの愚か者にマジ感謝。

疑問が残るが、用が済んだので店を出た。毎度ありと言ったレノアの喜色を含んだ声

を残しながら。

世の中金が全てなんじやああああい!!

祭りから二週間が経過した。バベルにいる美の女神は、俺にも視線を飛ばされていたから何かしら干渉してくると踏んでいたのだが、特になかった。てか最近、視線が飛んでくるのが極度に少なくなった。よっぼどベルにお熱らしい。

そうそうベルといえは、

「今日もよろしくお願いします!」

俺達とパーティを組むことになった。エイナさんが彼と組んでくれと頼んで来たからだ。まあ、ソロより複数人で行動した方が安心だしね。

原作崩壊を防ぐため断ろうと思ったが、リルルカは現在こちらと組んでいる。だから断った場合、主人公はソロになりどこかで・・・いかん。それこそ原作崩壊で世界が終わる。

仲間達には俺の説得で了承してもらった。ベルの成長速度はスキルの効果で俺より速い。足手まといになるのはむしろ俺じゃね?

「今日はどうする?ベルがいるから下の階層?」

「ん、様子を見ながら上げていこうかな。リリはどう思う?」

「数日組んで分かりましたが、ベル様の成長速度は異常です。それこそ十階層に通じるほんです」

だから大丈夫では?と言った。装備はヘステイア・ナイフとあの兎鎧。あの魔法も使えていたから、素人目線でも大丈夫だと思う。

「うん。なら前衛がエリス、中衛が俺とベル、その中衛を援護する形でリリ。これのフォーメーションで行ってみようか」

俺達よりアビリティが高いエリスがメイン。取り零したモンスターを俺とベルが倒す。不意打ちなどをリリルカがカバー。完璧じゃね?

俺の提案で全員が了承した。

それとリリと言えば、何か盗まれると思ったけどそんなこともなく。エリスとベルの人柄に絆されているように感じた。俺は二週間も経ったのだ。脱退のための作戦を思い付いた。後は、もしものための軍資金が必要であることだけだ。

現在のステータスは、

アラン・スミシー(16) Lv. 1

力:(エリス入団時) E530↓(二週間後の現在) D611

耐久:(以下同文) E512↓(以下同文) D601

器用：F 4 2 0 ↓ E 5 0 3

敏捷：E 5 0 1 ↓ D 6 1 0

魔力：I 0

〃魔法〃

〃スキル〃

コミュニケーション
【言語理解】

・ 会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞ^{サード・ド・ワゾン}】

・ 三つの中から一つ獲得

・ 選んだモノの貯蓄と引出し

・ 一週間後に再選択

・ 貯蓄（1. 箆手 2. レイピア 3. 【刀剣乱舞】 4. 湿布（New） 5. バンダナ（N

e w）

エリス・キャルロ（16） L v. 1

力：（エリス入団時） B 7 6 6 ↓（二週間後の現在） B 7 8 1

耐久：B 7 2 0 ↓ B 7 3 9

器用：A 8 0 1 ↓ A 8 3 0

敏捷：A 8 4 7 ↓ A 8 6 5

魔力：C 6 4 2 ↓ C 6 7 7

〃魔法〃

〃速度^速増加^ま〃 【加速^{アウセル}】

〃スキル〃

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

こんな感じだ。二週間あったとはいえ、エリスを見比べて、俺のアビリティはやつぱ伸びすぎだと思う。それとなくラクシユミーに聞いたけど、魔法はおろかスキルも発現してないという。この体スゲーってことで納得している。

それとスキルで獲得した二つの湿布とバンダナ。この二週間は外れの選択肢で、以前より落差が激しい。もうすぐ一週間が経過する。何がでるんだろ。魔法が欲しいと常々思う俺だった。

|-----|

時刻はダンジョンから帰った夕方に移る。消費した回復薬を買おうと、ナーザさんがいる【青の薬舗】に行つたのだが……。

「おい小僧！金ならやるからこの調査書を僕等に寄越せ！」

「これディアン。アランが困っているだろう」

「ジジイ、いい度胸してる……！」

老人の男神に詰め寄られていた。内容は例の調査書について。隣に控える小柄の少女はディアンケヒトを止めているが、視線はこちらに向いている。可愛いこの人がアミッドさん？聖女属性とか唆るぜこれは（某科学者風）

「取り敢えず落ち着いて話をしましょう。丁度主神団長当事者も揃っているみたいだし……？」

「うむ、そういうことなら……」

「ああ、そうだな」

ディアンケヒトは俺から離れる。爺さんに詰め寄られるなんて誰得だよ。

「これは確認なんですけど、欲しいのは調査書ですよ。何か凄いいもんなんすか？」

「凄いいも何もあれがあれば従来の回復薬より遥かに優れた物が作れるのだ！」

「更に言えば不治の病に対する特效薬も調査可能です」

「うそん」

「嘘じゃない・・・私も嘘だと思ったけど、実際作ったら本当だった」

「アランよ。あの調合書はどこで手に入ったのだ？」

うわあ、どうしょ。スキルで手に入りましたー！なんて答えられるわけがない。神は嘘を見破れるとはいえ、簡単に話していいものじゃない。神は

だから、

「話せません」

「つ!!話せないだと！それは何故だ！」

「話せば絶対に自身のステータスを明かすことに繋がるからです」

「あの調合書は、そなたのステータスに関係してるのか？」

「まあ、はい」

やべえ、アドリブだけどダメだろ。四人とも疑ってるよ。

まあ、疑いだけでも晴らそうか。

「調合書は俺のです。決して悪事に手を染めて手に入れた物ではありません」

「ふむ、嘘ではないな」

「うむう・・・」

俺の言葉に嘘はなかった。ミアハ様はいつものように善意の顔を浮かべる。いや善意の顔ってなんだよ。ディアンケヒトは眉間に皺を寄せて険しい顔をしている。

「話を戻しましょう。あの調査書を譲ってくださいませんか？もちろんそれなりの礼をします」

「っ！アミッド、あれはアランがくれた物。もう私達【ミアハ・ファミリア】の所有「待った」ミアハ様？」

「我らが作れる数なんてたかが知れてる。なのでディアンの方の方が相応しいと思っ
ている自分がいるのだ。しかしな、私もこの店を経営する身。私の一存で決められ
ない」

だからアランが決めてくれ。善神ならではの葛藤がそこにあるのだろう。ミアハ様
から決定権を譲られた。

「・・・どんな結末になっても恨みませんか？」

「約束する。この名に誓って。ナーザも納得できないと思うが頼む」

「ミアハ様・・・」

ミアハ様は誓いを立てた。それなら俺の答えは決まっている。

「分かりました。お譲りします」

「クハツハツハ！小僧、人を見る目はあるようだな！」

高笑いするディアンケヒトと、信じられないという視線を送るナーザさん。普通に
考えればどっちがいいのか決まってることだ。

ま、俺には関係ない話だな。

「ただし条件があります」

「ハツハツハ！何だ言ってみろアランとやら！」

「ええ——十億ヴァリスで売りましょう」

「「?!?!」」

あまりの金額に四人は目を開いてこちらを見る。思わず笑い声を止めるほどに。

「じゅ、十億だと？貴様、ふざけているのか・・・！」

「いえいえ、大真面目ですよ」

ハツハツハと俺は笑う。ディアンケヒトには悪魔に見えてるのではないだろうか？

「それはいくらなんでも高過ぎです！せめて七割、いえ半額にしてくれませんか・・・？」

五億ヴァリスとな？それはポンツと出せるものではないので分割払いになりそうだ。

「お断りです。聞けば回復薬の常識を変える代物なんですよね？貴方達にとつて、これは半額で見合う物なんですか？」

「そ、それは・・・しかし、この調査書があれば救える命だつてあります！」

「でしようね。でもそれつて——俺に関係ありますか？」

「なっ！」

「き、貴様あ……!」

アミツドの顔が怒りで赤くなる。金の亡者であるディアンケヒトと違って、アミツドは人命優先。彼女にとって許せない言葉のはずだ。

「……よし、俺のターンはまだ続いている!」

「だから代替案を提案します」

「!!」

「啓示する案は——」

- ① 作成可能な薬は「ミアハ・ファミリア」が独占する。
- ② 「ミアハ・ファミリア」の借金を帳消しにする。
- ③ 「ミアハ・ファミリア」と俺にそれぞれ一千万ヴアリスを支払う。
- ④ 俺のファミリアを優先して治療する（もちろん治療費は支払う）。

内容の説明

①の場合、上層で採れる素材や店で販売している素材など、簡単に手に入る素材で作れる薬ならば「ミアハ・ファミリア」だけで作成するというもの。つまり独占販売。

②の場合、言わずもがな。抱えている借金を消す。

③の場合、俺と「ミアハ・ファミリア」にお金を差し出すこと。一千万もあればたく

さん素材を買えるだろう。

④の場合、「ラクシユミー・ファミリア」は探索系。これから深く潜れば潜るほど怪我だつてする。その時は優先してね。

「この四つを誓つてくれるのなら俺は差し上げますよ。もちろん変える気はないです」

そう、タダではあげない。三者三様得する方法で解決しなければ。とはいつても「ディアンケヒト・ファミリア」の損が多いけど。

「うぐう・・・!」

「受け入れないのならこの提案は無かつたことに——」

「分かりました。その条件を呑みます」

「アミツドオ!?!」

「ディアンケヒト様、仕方ないかと」

うん、仕方ないね。ここで駄々こねられて断られたら本当に利益無しで損することに繋がる。それでも聖女様の英断だと思ふ。

俺は最初に無茶苦茶な要求をして、次にハードルを下げるという交渉術を使った。

「ディアンケヒト・ファミリア」に恨まれるだろうが、

——これで軍資金は手に入った。奴らが罫に掛かればいつでも仕掛けられる。

大切なもの

「おい」

「!?」

俺とベルは後ろから声を掛けられる。声の主はヒューマンの男。何の用・・・ああ。

「お前らあのチビと連んでいるだろ？」

「だからどうした？あんたに関係ないだろ」

「バアカ、分かってねえな。あのガキを嵌めるんだよ。協力してくれたら金をやるか

らよ」

「なっ・・・」

俺が少し強めに言い放つが、この男はそれを流し誘い、ベルは信じられないという顔を
をする。

「な、何でそんなこと言うんですか？」

「あ？てめえはただ領いてればいいんだよ。それによお」

「？」

ベルを見ていた男は俺を見る。下卑た笑みを浮かべて、

「あのガキと仲が良いキヤルロを説得してくれよ。その方が幾分か楽になる」

「――」

こいつ何て言った？キヤルロ・・・エリスを利用するだど？それはつまり、「ソーマ・ファミリア」と同じことをしろと俺の口からエリスに言うのか？

「失せろ」

「あ？」

「失せろって言ったんだクソ野郎。エリスはもう、てめえらみたいなクズ共と縁を切つたんだ。それと、エリスに手を出してみろ。その時は――

――使える手を何でも使つててめえらを潰す」

「ひいつ!？」

底冷えするドスの効いた声に、男は間拔けな声を出して後退つた。そして正気にかえつた俺は、こんな声を出せたことに自分に驚いた。

「で、でもよ！アーデは役立たずの能無しだぜ!?!搾れるだけ搾つて捨てちまえばいいじゃねえか!」

こいつはまだ言うかと思ひ、今度は殴つてやろうかと手が出そうになるが、

「絶対に嫌だ・・・!リリは、僕達の仲間だ!」

「そういうことだ。ほれ、さっさと失せろクソ野郎」

「・・・ちっ!」

男は俺達の言葉に去っていった。あいつの目を見れば分かる。絶対に何かしらの形で干渉してくるだろう。

「・・・ベル様?」

「リリっ、ああいや、ちよつとイチャモン付けられただけというか、僕達は大丈夫だよ」
リリルカに誤魔化すが、彼女の顔色は優れない。そう言えばエリスはどこだ?」

「ア〜ラ〜ン♪」

「そこか・・・て、どうしたやけにテンション高いなおい」

顔がニヨニヨしている。正直不気味だ。

「獣人の私にははつきりくつきり聞こえたよ?」

なんだろう、嫌な予感がする。

「俺のエリスに手を出して見ろ。その時は——潰すぞ（キリツ）。いや、か・な・り・愛されていますなあ私!」

「待て待て待て!いつ“俺の”何て付けた!?意味が変わってくるからおお!!」

キヤイキヤイはしやくエリスに反論する。仲間だから手を出すなって意味で言ったのに、これじゃあまるで、どどど、独占欲が強いみたいじゃねえか!?

「え、じゃあさつきさんのセリフは嘘なの？私って、いらぬ子なの・・・？」

「っ?! いやそんなことないぞ・・・」

「ん？ 聞こえないなあ？」

「こいつうつぜえ・・・！」

「じゃあ行こうかベルとリリ。エリスは使い物にならなくなっちゃった」

「ハハハ。そうみたいですわね」

「フフ。ええ、三人で頑張りましょうか」

「ちよつ、置いてかないで！ごめん、本当にごめんなさい！」

俺達はダンジョンへ向かった。原作通りだとこれから奴らが待ち構えている。それと同じならば、これは利用できる。

もう原作崩壊は恐いけど、仲間のためならとことんぶつ壊すと今決心を固めた。

「リリ」

「? はい？」

「派閥を脱退させる策があるって言ったたら、お前は どうする？」

「!？」

ベルとエリスが驚く。エリスはまさかあの手をとっているようだがそれは違う。

「文句なら後で聞く。お前には辛い思いをさせるぞ」

リリルカと向き合い言い放つ。

「——俺達を裏切れ」

—————

ハッ、ハッ、ハッ。

息を切らしながら迷宮を駆け抜ける。モンスターが比較的少ない場所を狙ったので、戦闘の手間は省かれる。これなら、安全に帰還できる。

必要もない変身魔法を解除する。あの人の作戦通りならばこの辺りで——。

「あ」

何かに躓き転んでしまう。録に受け身を取れず激痛が走った。

「嬉しいねえ。狙い通りだ」

足を掛けられたのだ。ベルとアランを誘った男。その男は詫び入れるぜと言いながら胸倉を持ち上げ、リリルカを思いつきり地面に叩き付けた。そして二回、三回と蹴りを入れる。

「ハハハ！ 言い様じゃねえか！ そろそろ裏切る頃だと思ったぜえ？」

目論見通りだと言わんばかりに笑い、ペラペラ喋り出す。白髪と茶髪のがきがどうか、偉そうに断りやがってとか。

「まあいい。それよりも」

男はリルルカのローブを剥ぐ。腕を踏み付けボウガンを回収し、魔石と金時計、高額の魔剣を強奪した。

「また派手にやってんなあ、ゲドの旦那あ」

「おおー、早かったなカヌウ」

「……っ!?! (ソーマ・ファミリア)!?!」

カヌウと呼ばれた獣人と更に複数人がゾロゾロとやって来る。男……ゲドの協力者のようだ。

「それよりもゲドの旦那。魔剣を譲ってくれないかい?」

「ああ?これくらいの得があってもいいじゃねえか」

ゲドは断った。魔剣は残り数回で壊れるとしても、高額で取引される代物で、当然金が欲しいゲドは受け入れられなかった。

それを見越してカヌウは何かを投げる。

「キ、キラアアント……!?!」

「て、てめえ!嵌めやがったのか!?!」

「助けて欲しければ、魔剣だけでなく全部落としてくれませんかねえ?」

「……っ!!クソがあ!!」

ゲドは強奪した装備を投げ捨てた。それをカヌウは確認して、リルルカに近付く。

「助かりたいのなら、することは分かるよな？」

「な、何を……!」

「貸金庫に金を置いてあることぐらい知ってんだ！それを寄越しやがれ！」

「うあ……!？」

強引に鍵を奪ったカヌウは、

「じゃあなアーデ。最後くらい役に立てよ？」

「な、何を」

「俺達の囷になれ、サポーター？」

キラアアントの群れにリリルカを投げ捨てた。

リリルカは思う。冒険者は大嫌いだ。そんな冒険者から金品を奪って、脱退という自身の救済に使用する。モンスターに食べられるのが因果応報なら、別にこれでもいいのかもしれない。優しく気遣ってくれたベル。いつも明るく引つ張ってくれたエリス。そして――

仲間に優しいが、私でも引いてしまう作戦を提案するあの野郎。いや、感謝しますよ？でも本当に脱退できるの？これ死んじゃわない？

「作戦はもういいでしょう!?!早く助けてください鬼畜のアラン様あー!!」

「了解って、酷い言い草だなおい」

「これはアランさんが悪いですよ」

「全部終わったら説教だからね」

「・・・はい、すみませんでした」

キラアアントの群れからリルルカを助け出し、俺達はダンジョンから脱出した。作戦はまだ継続中。だから終わりまで気は抜けられない。

はりきつていこうか。

—————

「アーデよ、ダンジョンでは散々な目にあつたらしいな。して、何か用か？」

目の前に居るのは「ソーマ・ファミリア」団長ザニス。生で見るのは初めてだが、雰囲気から悪人だと分かる。そして、

「・・・」

隣に居るのが酒神のソーマだろう。何やらぶつぶつと聞こえる。独り言が激しいな、おい。

「ソーマ様！脱退を許可してください！お金ならここにありますが！ですから！」

「ソーマ様に代わり答えよう。本当に用意したのか？」

「はい！私の言葉に嘘はありません！貸金庫の鍵です！」

ソーマに確認を取り、嘘を付いてないとザニスに伝えた。脱退に必要な金は一千万。

嘘ではないならそれが手に入るといふことだ。

「しかしだなあアーデ？最近一人失って人手が足りないのだよ。だから、な？」

「そんな・・・!？」

つまり脱退は認められないという。一人失って、というのはエリスのことだろうな。

「どうしてもと言うのなら・・・その倍を用意すれば考えてやろうじゃないか。ハッハッハ!!」

どうしようもないクソ野郎だな本当に。反吐が出る。

「行きましようソーマ様。アーデ、分かったのならさつきと「待てよ」あ？」

俺はソーマを連れて出ていこうとするザニスを引き留める。ザニスの許可をえられないのなら、団長と同等の権限を持つ主神から貰えばいい。だからソーマに、

「いいのか？そのまま退出して。酒が作れなくなるぞ？」

「・・・なんだと？」

俺の言葉に足を止める。ボサボサの長い髪から覗いている目は鋭い。腐っても神。思わず怯みそうだ。

「あんたのファミリアは悪評だらけでな。そのせいでギルドからも目を付けられているんだ」

「っ！耳を貸す必要はありません」「うるさい」ソ、ソーマ様!？」

ザニスの言葉を遮るのは意外にもソーマだった。いや、酒が関わってるのだ。意外でもなんでもなく、ザニスを煩わしいと感じたからだろう。

「それがどうした？酒造りに関係ない」

「分からないか？ならば言おう。」

——俺の荷物を返せ」

「……は？」

二人の声が重なる。見に覚えのないことを言われたのだ。当然そうなる。

「リリルカの持ち物全て貰ったんだ。でも多すぎてな。一人で持ちきれなかったんだ」

「何が言いたい」

「さっきお前の眷属から盗まれた。だから返せって言ってるんだ」

ほら早くと急かす。ソーマはザニスに返してやれと言うが当たり前だが返せない。だつて持つてないし。

「あれれ〜持つてないのおく？ならこれは窃盗に当たるよなあ。それならよお、ギルドに報告するしかないよなあ〜！」

「……それが酒造りになにか「分からないか？」」

「お前らはギルドから目を付けられているんだ。元凶が神酒にあると知れば、真つ先

にそれを差し押さえる。お前らは俺の物を奪った」

だからギルドに報告したらどうなる？と、俺は不敬にも神を脅す。こんな神、最初から敬ってないけどな。

ソーマは考える素振りを見せず、

「お前の要望を聞こう」

「んじゃ、リリルカの退団な」

「分かった」

即決した。ふう、酒を優先する神でよかった。ザニスは顔を赤くしてプルプルしている。まだいたの？

「ザニス、退室しろ」

「!? し、しかし「ザニス」わ、分かりました・・・」

ザニスは命令通り部屋から退室した。ここに居るのは俺とリリルカ、そしてソーマだ。

リリルカは服を脱ぎ、俺は後ろを向く。ソーマは改宗の手続きをしながら口を開いた。

「・・・私は、どうすればいいのだ？」

「あ？」

「お前の言葉に嘘はなかった。ならば、遅かれ早かれ酒造りは禁止されるのだろう。簡単に酔ってしまふ眷属に対して、どうすればよかつたんだ？」

「ソーマ様……」

懺悔とも言える独白に俺は――。

「知るかそんなもん」

「!?!」

ぶつきらぼうに答えた。いや眷属野放しにしたのはソーマの自業自得だし、ぶつちやけどうでもいいし。酒が造れない？ 訴えられる？ ザマーみろ。

「俺から言えることは、完成品という危険物を二度と造るな。そして――もう一度やり直せ、大馬鹿野郎が」

「……」

「もう終わったか？ なら帰るぞ」

「は、はい！」

こんな所に長居したくないし。

「アーデ。こんなこと言う資格はないが、体に気を付けなさい」

「つ!! ありがとう、ごさいました……!」

主神と眷属最後の言葉を交わした。リルルカは込み上げてくるものを必死に押さえ

ていた。

扉を開けてすぐ近くにザニスが居た。え？そこで待機してたのお前？

「貴様あ、私を愚弄したこと覚えておけよ……！」

今にも武器を抜くんじやないかってぐらい殺気立っているが、

「俺達が時間までに戻らなかつた場合、仲間がギルドに駆け込むぜ？さっさとそこを退けるよクズ野郎」

「~~~~っ!!」

暗れて「ソーマ・ファミリア」を退団したりリルカの顔は、とても明るかった。以前のような暗さはどこにもない。前へと向いたのだ。

気になる改宗先はというと……

「よろしく願います、ベル様！」

「うん！よろしくね、リリ！」

「ヘスティア・ファミリア」に入団した。ベルは危なっかしいから一人にしておけないという理由と、

「アラン様には感謝してるんですけど、その……」

「？ その、なんだ？」

「貴方と居たら鬼畜が移ります！それと、ベル様の教育に悪いです！」

「ハハハ、はっ倒すぞクソガキ」

うーむ、あの作戦で思ったよりもリルカの株を落としてみたんだ。

「ですが・・・」

「？」

「脱退させてくれたことには心から感謝しています。ありがとうございました」

「ふっ、そうかい」

ま、いいか。

少年は悩む

リリルカが「ヘステイア・ファミリア」に入団して数日後。ベルがボロボロになって現れるようになった。リリルカが理由を聞いてもはぐらかす一方で、

「修行が始まったな・・・」

俺は原作を思い出す。この時期ベルがボロボロになる理由は、「剣姫」アイズ・ヴァレンシユタインとの修行以外他にない。

ということとは、もうすぐミノタウロスと戦闘が始まり、ランクアップを果たすということだ。俺は追い抜かされた時のことを思い、少しばかり焦燥心に駆られる。

俺もランクアップしてえなあ!!

アラン・スミシー(16) Lv. 1

力：D 6 1 1 ↓ D 6 3 4

耐久：D 6 0 1 ↓ D 6 2 2

器用：E 5 0 3 ↓ E 5 4 0

敏捷：D 6 1 0 ↓ D 6 3 0

魔力：I 0

〃魔法〃

〃スキル〃

【言語理解】

・ 会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞで】

・ 三つの中から一つ獲得

・ 選んだモノの貯蓄と引出し

・ 一週間後に再選択

・ 貯蓄（1. 箆手 2. レイピア 3. 【刀剣乱舞】 4. 湿布 5. バンダナ）

エリス・キヤルロ（16） L v. 1

力：B 7 8 1 ↓ B 7 8 6

耐久：B 7 3 9 ↓ B 7 4 2

器用：A 8 3 0 ↓ A 8 3 6

敏捷：A 8 6 5 ↓ A 8 7 0

魔力：C 6 7 7 ↓ C 6 8 0

〃魔法〃

“速度増加” 【加速】

“スキル”

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

相変わらずの伸び率だ。きっかけさえあれば半年以内にランクアップできるんじゃないかな。ベルと組んだら向こうからトラブル来るし。まあ、下手したら死にかけるんですが。

エリスの場合は伸びにくくなった。理由としてはここらが打ち止め、つまり成長限界だとラクシユミーが言っていたのだ。その事にショックを受けていたようだが、ランクアップが近付いている励まされ、むしろモチベーションが向上した。

エリスがランクアップしたら、原作で見せたあの地獄のような中層探索も楽になるのではないかと思う。まあ、分断されたら終わりなのだが。

「アランー出発するよー！」

「え、ああ分かった！今行くよ」

おっといけね。考えすぎてた。取り敢えず今日を生き抜くことに集中しないと。俺は仲間のもとへ向かった。

——だんだんと、その日が訪れようとしていた。

【豊穣の女主人】にて。

「なんで皿洗いさせられてるんですか!？」

「あーあ、まんまと引つ掛かったなあ」

「ごめんなさいい、私の仕事を手伝わせちゃって!」

街中で偶然? 出会ったシル・フローヴァに、俺とベルは仲良く皿洗いをさせられていた。助けてくださいって言葉にベルが釣られた形で。

・・・なんで俺まで? 別に用事なんてなかったけどさ。

「おら、とつとと働くニヤ白髪頭、茶髪頭」

「少年達はシルに売られたニヤ、観念するニヤ」

アニヤクロコンビにちよっかい出されつつも、仕事をテキパキこなす。こちとらホームで皿洗い担当なんだよ! WEB予告の一番盗むぞオラ!

「二人とはいえ、この量は凶悪だ。私も手伝います」

「どうもありがとう。えくと?」

知っているが知らないふりを決め込む。そういえばベルは初対面なのかな? ナイフ

盗まれてないし。てことは、リリルカはシルから脅されてないのか。

「リユー・リオンといます。うちのシルが申し訳ありません」

「俺はアラン・スミシー。困った時はお互い様ってことで」

「ありがとうございます」

リユーが加わり三人による皿洗いが始まった。俺とリユーが洗って、ベルが水気を拭き取って片付ける。二人で行うより効率的だった。

そんな折り、

「クラネルさん、悩み事ですか？私でよければ聞きますよ」

「え？」

「この際だから喋っておけよ。この先ズルズルと引きずるよりはマシだろ」

そうは言うが、理由は恐らく・・・

「ランクアップって、どうやったら出来るんですか？」

「・・・偉業を成し遂げればいい。人も神々さえも讃える功績の達成を」

ベルの質問にリユーが答える。こんなことを聞いた理由はただ一つ。【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインがLv. 6に到達したからだ。憧憬に追い付けない焦りから、ランクアップの方法を知りたがっていたのだろう。

「己自身より強大な相手の打破し、上位の経験値を獲得する。これがランクアップの

条件です」

ランクアップとは心身の強化で器の昇華と等しく、神々の恩恵は難関な試練を乗り越えた者にしか資格を与えられない。

「でも、強敵と戦ったら普通は負けちゃうんじゃない」

「それを埋め合わせるのが技と駆け引きです。また、パーティを組んで自分達を補完します」

もちろん時間は掛かる。パーティ戦の場合、経験値は分散される。一人で得られたはずの経験値が、人数によって半分、また半分と減っていく。

「貴方が本当に強くなろうとしているのなら、今のパーティを大事になさい」

「はい」

リユーは老婆心ですがと付け加え、

「貴方は冒険者だ。貴方が望むものは恐らくその先でしか手に入らないと思います」

「は、はあ……」

「あまり気にしないでください。私の勘はよく外れる」

そのセリフを最後に、俺達は黙々と作業に取り掛かった。そして、

「ベルさんは冒険しなくていいんじゃないでしょうか。無理はなさらないでください」

い。それだけは伝えたくて」

「……」

「すみません。今さら怖気付いちやって」

『貴方は冒険者だ』『冒険者は冒険しちやいけない』それはきつと、矛盾の意味を持っている。二人の店員の言葉はしつかりと、ベルの心に刻まれたのだった。

——以上、途中から蚊帳の外だったアラン・スミシーがお送りしました。

シン・ヒロイン

①【癒光の羽衣】（回復魔法）

②タオル

③スマートフォン（iPhone）

久し振りのスキルに、久し振りの登場（メタイ）のラクシユミー。ラインナップが豪華である。

「すまーとふおんが何なのかは知らぬが、①を選べ。私の勘がそう囁いておるのじゃ」
「最初からそのつもりだけど・・・」

神の勘は超高確率で当たる。無視してたら痛い目に遭うので、真面目に聞き入れるようにしている。

ラクシユミーが①を選べということ、この魔法が鍵になるといふことなのだろうか。回復魔法だから、誰かが瀕死の重症を負うとかか？

俺は最悪の想定をして①を選んだ。

—————

バベルにて。

「——私に貴方の輝きを見せなさい」

妖艶な女神が見据えるのは、白い輝きを放つ兎の少年。眷属から報告が届き、見定めるために今日仕掛けるのだ。

そして。

「あの子と行動を共にするなら、貴方にも試練が必要よね」

隣にいる、輪郭も色も何もかも朧気な不思議な子。少年と会うまでは、狙いを定めていた第一候補。

新たに第一候補になった少年と、第二候補になった彼。その二人が今後どんな化学反応を示すのか。

「ウフフ、私って案外欲張りなのね」

女神は美しく微笑んだ。

———
 そんな女神の思惑は露知らず。

いつだ？いつなんだ？いつ来る？俺は周囲を警戒していた。あの【ロキ・ファミリア】が今日遠征に出発した。遠目で見ても女性陣は綺麗だった。．．．じゃなくて！

今日あのイベントが始まる。ベルが因縁の相手と出会い冒険を果たすあれが。それ

なのに・・・

「今何階層だっけ？」

「？　もう十階層に到達しますよ」

リリルカに、こいつ頭大丈夫か？という視線を送られる。最近、俺に対する攻撃力が増してきた。

原作だと九階層、正規ルートのエ―16。それを俺達は通り過ぎた。

どうなってる？俺の存在で原作が崩壊してる？それとも――。

「何かおかしくない・・・？」

「ですよ。モンスターが異常に少ないですし」

違和感を感じ取ったのはエリスとベル。獣人故に感覚が鋭いエリスと、不躰な視線のせいで視線に敏感なベルが、モンスターの少なさに苦言を切り出した。

「言われてみれば・・・」

リリルカも二人の意見に賛同し、辺りの警戒をし始める。俺はというと、
「・・・」で始めるのか」

誰にも聞こえない声量で呟いた。十階層の広いエリア。出入り口は十一階層へ続く正面と、九階層へ戻る背後の二つだけ。

気付けば俺達は背中合わせになっていた。

「……匂いが近付いてくる」

「……ちなみにどこから？」

「両方」

ギャオアアアアツ!!

ヴウモアアアアツ!!

「!!」

遠くから鳴り響く二体の咆哮。一体は絶対ミノタウロスだ。聞いたことがあるから
まず間違いない。もう一体はなんだ？

「ベル」

「は、はい」

「もうすぐ『ロキ・ファミリア』が来る。憧れにもう一度守られ命を助けられるのと、
己を賭して立ち向かうのとどっちがいい？」

発破を掛けた。原作だと恐怖で立ちすくみ、リルルカが怪我を負う。不安定な状況の
中、それだけは避けたかった。

「ぼ、僕は……!」

「【剣姫】に憧れたんだろ？冒険しようぜ」

「!!」

ベルは覚悟を決めた。ミノタウロスはベルに任せるとして……。

「私達は前方の敵だよね」

「ちよつ、皆さん正気ですか!？」

「正気も正気。すでに囲まれてるから逃げ場はない。隙を作るから、リリは念のため
【ロキ・ファミリア】を呼んで来てくれ」

「つ!!あーもう!分かりましたよ!また貴方に乗せられますよ!」

よしよし士気は充分だな。

足音はすぐ近くまで迫り、霧の向こうには巨大なシルエットが映し出される。

——俺達は冒険をする。

—————

【加速^{アクセラ}】!!」

【ファイアボルト】!!」

初手はエリスとベルの魔法で始まった。速攻で繰り出される魔法を囫に、リリル力を逃がし自分達は確実に攻撃を当てる方法を取ったのだ。青白く光るエリスに続いて、俺も走り出す。彼女は一瞬で到達していた。

「インフアントドラゴンか。面倒な相手連れて来やがつて!」

シルエットでなんとなく気付いていたが、やっぱり迫力が違う。一瞬でも臆したら奴

に呑まれそうになる。

「ハアツ!! っつて、硬あつ?!」

「オマケに強化種かよ! なに考えてんだあの女神は!!」

それとも眷属か? どちらにせよ頭がおかしい。

「ギャオアツ!!」

「っ!! ぶねえ!」

前足での踏み込みを躲す。重量のせいか地面が陥没していた。それにより生じた隙を俺は逃さない。

「よし、通じた!」

エリスの斬撃はかすり傷が出来るだけで録に入らなかつたが、俺のレイピアは致命傷に至らないものの、硬い皮膚を深く切り裂いた。

「ハア、ハア、ハア・・・くそ」

「アラン大丈夫?」

「大丈夫だとカツコつきたいけど・・・正直キツイ」

攻撃を当てるだけでこんなに疲れるのか。いや、**【ソード・ダンス**を常時発動しているからか。例えるなら全力疾走を維持している状態。

インファントドラゴンは、俺のレイピアを警戒して動こうとしない。無駄に動き回ら

ず反撃を狙っているのだろうか。モンスターのかせに嫌らしく小賢しい。

「私がレイピアを使う？アランよりアビリティが高いし」

「いやそれよりも——」

俺はエリスに耳打ちした。この作戦が成功すれば勝てる。

「ウウウ……！」

【癒光の羽衣】

新たに獲得した魔法を使用する。効果は常時回復の付与魔法。精神力が尽きるまで、身を包む癒しの羽衣は消滅しない。

今俺はレイピアを持っていない。俺は決定打を作るための罠。本命は——。

「グアア!!」

「っ！ うわっ!？」

危ない危ない、集中しろ！姿を隠しているエリスに繋げるために！

反撃姿勢を解いて巨体を縦横無尽に動かす。あまりにも激しい動きに地面が抉れる。俺の体にもかすり傷が無数に生まれるが、

「……すげえなこの魔法」

一瞬で治る。破格の効果を誇る【癒光の羽衣】は絶対当たりだ。恵まれた幸運に感謝。躲す躲す防御躲す躲す躲す躲す。これを繰り返し、

——そして。

「グギヤアツ!？」

「あれだけ暴れ回ったんだから、そうなるに決まってるんだろ」

インファントドラゴンの後ろ足が、罅が入った地面に深く沈み込んだ。

これが俺の考えた作戦。

『暴れさせて床を踏み抜かせる』という作戦と言えないような至ってシンプルなもの。それでも効果あつたようだ。

ドラゴンは前足に力を入れて起き上がろうとするが、

「アクセル加速!!」

エリスの魔法を乗せた全力が、前足の腱を削ぎ落とした。

「グギヤアアア・・・」

「さーて覚悟は出来てんだろうなあ、トカゲ野郎」

「・・・アラン動けるの?」

「無理。だからエリスに任せる!」

あれだけ動いたんだ。疲労のせいで体力も限界で、初めての魔法で精神力が底を尽くす寸前だ。

最後の力を振り絞り、

「ギャア!？」

魔石があるであろう胸部に投擲した。投擲武器？もちろん収納していたレイピアさ。時間稼ぎにあれは邪魔だもん。

「アッセル【加速】!!ヤアアアツ!!」

加速されたエリスは突き刺さったレイピアを蹴り飛ばし、インファントドラゴンの魔石ごと穿った。

バーニング・ファイティング・ファイター

「ただいまなのじゃー」

「お帰りラクシユミー」

「お帰りなさいラクシユミー様……どうでした?」

ぐったりと元気を失くしたラクシユミーが、我らがホームに戻ってきた。理由は明白、今日開催された「デナトックス神会」での二つ名命名式である。

本来ならば、上級冒険者を眷属に持つ神にしか参加権は与えられないのだが、先の戦いでエリスがランクアップを果たしたことで認められたのだ。

「うむ、今から追って話すのじゃ」

回想

堂々と優雅に道を歩く女神がいた。その振る舞いは神々さえ目を奪われるほどに。瑞々しい褐色肌。衣装越しでも分かる柔らかな肢体。顔からにじみ出る余裕の表情。

そう、眷属二名の新興にして零細派閥の主神、女神ラクシユミーである!

「・・・ヤバい、吐き気がする。ストレスで胃が痛い。待つて私死ぬの？天界逝き？原因は二つ名命名式のストレスで？そんな理由で死にたくないよおおお！助けてマイ・アラン!!」

内心エグいことになってるラクシユミーだが、下界の子達よりも策略に長けている神だけあって、見事な鉄ボカ飯カク面フエを決める。事実ここまで誰にも感づかれていない。

ラクシユミーは適当な席に座り、神々に社交辞令の微笑みを送る。それだけでアホ共男神達は歓喜した。

それから次々と神が席に座り、

「第ン千回【神会】を開かせて頂きます。今回の司会進行役はうちことロキや！よろしくなー！」

「「「「イェーイ!!」」」」

ロキと言えば、フレイヤと双璧を成す最大派閥の一角。隣の神に聞けば、遠征で眷属がいなくて暇だから請け負ったとか。

そのロキの進行により、まずは情報交換が始まり、意外な神物が挙手をした。

「いいだろうか？」

「んー？・・・て、ソーマかいな!？」

「「「「なああああにいいいい!!?」」」」

誰だあの神？と疑問を抱いていた多くの神々が思う中、ロキはソーマだと特定した。無類の酒好きのロキは完成品が飲みたいがために、無用心にも一度ソーマのホームに侵入している。その時顔を知ったのだ。

ソーマは立ち上がり、

「ロキの言う通り俺がソーマだ。俺は己の趣味のために交流を断ち、派閥経営を全て眷属に任せていた。しかし、ある男と出会ったことで自分を見つめ直しこれまでの考えを改めた。今は生産系から探索系へとシフトして頑張っている。主神としても探索系としても初心者だが、ご指導ご鞭撻のほどよろしく頼む」

「お、お。そうかそうか。それで？その男とやらは誰なん？」

「内緒だ」

ソーマは言いたいことだけ言って席に座った。神々は当然置いてけぼりになった。

「(アラン、じゃよなあ・・・)」

ラクシュミーはソーマが変わったことに検討が付いていた。だってソーマと接近した男って、最近だとアランぐらいだし。

「私もいいだろうか」

「んお？なんや、これまた珍しい神やないか」

ソーマに続いて挙手をしたのは、薬を販売する生産派閥のミアハ。経営で忙しいの

と、眷属が一人だけしかいないので長らく参加してなかったのだ。

「私からはちよつとした宣伝だ。ある男からの贈り物である調合書にあつた薬の量産及び販売の目処が付いた。明日から店頭に並ぶのでぜひ訪ねて欲しい」

「ある男？調合書？それになんや、薬つて？」

「なに、回復薬の上位互換だ。従来の回復薬の三倍を引き上げる効力がある。値段はなんと・・・」

「「「なんと・・・？」」」

神々はごくりと喉を鳴らす。いやミアハよ。ノリがいいなあんだ。

「上級回復薬と同じだ！」

「「「安っしいー！！」」」

「まとめ買いでさらに300ヴァリス値引きだ！」

「「「お買い得うー！！」」」

盛り上がりを見せた。

「結局、ある男つて誰なん？」

「内緒だ」

「お前もかいいいいいい！！」

ミアハもミアハで、言いたいことだけ言つて席に座つた。

「(これもアランじゃなあ・・・)」

スキル「三択サード・ツワからどうぞ」によって、確か何でもいいと自分が言っつて、アランは調合書を召喚させていた。とんでもないなあいつ。

「いいだろうか」

「な、なんや?」

眼鏡を掛けた無駄にダンディな男神が立ち上がる。ロキと、ついでにラクシユミーは警戒する。

「ロキアがまた攻めてくるらしい。オラリオに攻め込む準備が完了したと眷属が言っていた」

以上だという言葉で占めた。

「・・・へ? 終わり?」

「終わりだ」

「そ、そか。それは・・・」

例の男は絡んでないんかあああああああ!!」

ロキはあらんかぎりの声量でツツコミを入れ、ラクシユミーはゴツンと机に頭をぶつけていた。

色々あった情報交換は筒がなく終わり、「神会」の醍醐味である命名式が開催された。

【美尾爛手】ビオランテ【絶†影】ぜっえい【神々の嫁】俺達の嫁など。最後は普通に却下された。

「んじや、次は・・・ラクシユミーのところか」

「(き、来た・・・!)」

エリス・キヤルロ。元「ソーマ・ファミリア」団員で改宗。ランクアップにおける所要期間は六年。

「か、可愛い顔だな・・・」「犬耳がよく似合ってる」「この表情、とてもいじらしい」「彼女を躑たい」「むしろ躑られたい!」「ならばこの娘の二つ名は・・・」

「【神々の犬】」

「駄目に決まつとるじやろがあああ!!」

ボーカーフェイス
鉄仮面、ここに崩れる。

急に声を荒げたことで、某幼神のツイントールが激しく揺れた。

「そうだぞ。流星におふざけが過ぎる」

「同じく」

ミアハとソーマが反対し、

「せやなあ、こんな可愛い娘をお前らにやりとうないわ」

ロキも反対することで、ようやく神々は渋々引き下がった。ロキの場合は下心で助けたのだが、ラクシユミーは変えられたことに安堵した。

それでも大喜利大会が続けられる気配を感じたラクシユミーは、

「こ、この通りなのじゃ・・・」

自慢の胸を強調させながら頭を下げた。実をいうと、こういう仕草に慣れてない。自身の褐色肌をトマトのように真っ赤に染め上げた。

神々の反応はというと・・・

「ま、まあ？そこまで言うなら？」

彼女に影響されて、思春期ならではのピュアな反応を見せた。そんなアホ共に永久凍土もかくやの視線を送る女神達であった。

「んじゃ、この娘の二つ名は【豊犬^{ほうけん}】で決まりや！」

「異議なし!!」

その後はヘステイアがロキに弄られ、フレイヤが助けるといふ珍事が起きた。ヘステイアより勘のいいラクシユミーは、ベル・クラネルがフレイヤに狙われていることを察した。

フレイヤは一瞬だけラクシユミーの方を向き、僅かに微笑んだ気がした。

回想終了

「これが【神会】の出来事じゃ」

「お、【神々の犬】・・・？」

「か、神々やべえ・・・」

俺とエリスは戦慄した。

ソーマを改心させ、ミアハに知恵を授けた「あの男」はオラリオ七不思議となった。

くんかくんか

日時としてはベルとエリスのランクアップのお祝いでの話。宴会中、ベルはシルとリユーから褒められて喜び、リルルカは私も早くしたいと羨ましがっていた。俺もリルルカと同じ気持ちだ。それを察したのか、隣のエリスによしよしされた。お酒に酔っていたのかな。

ちなみに俺とエリスのステータスはこんな感じだ。

アラン・スミシー(16) Lv. 1

力：D 6 3 4 ↓ D 6 8 8

耐久：D 6 2 2 ↓ D 6 7 1

器用：E 5 4 0 ↓ E 5 9 7

敏捷：D 6 3 0 ↓ C 7 0 0

魔力：I 0 ↓ H 1 0 5

“魔法”

スキル

【言語理解】
コミュニケーション

・会話や文字の自動翻訳

サード・ワゾン

【三択からどうぞで】

・三つの中から一つ獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄（1・箒手2・レイピア3・【刀剣乱舞】4・湿布5・バンダナ6・【癒光の羽

衣）

【断捨離還元】
リサイクル

・スキルによって入手したモノを捨て自身の能力値に還元する

・価値によって変動

エリス・キャルロ（16） L.V. 2

力：B786↓I0

耐久：B742↓I0

器用：A836↓I0

敏捷：A870↓I0

魔力：C680↓I0

“発展アビリティ”

狩人：I

“魔法”

“速度増加” 【加速】

“スキル”

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

【貴方想奏】

・ ーーーー

・ 特定の人物を想うほど効果上昇

・ 魅力無効

ステータスはランクアップしなかったものの、かなり上昇した。さらに【三択からどうぞ】と連動するスキルも（今更）手に入れたので満足だ。効果の程はまた今度。

また、エリスの場合はランクアップを遂げたので、発展アビリティである【狩人】を手に入れ、更に謎のスキルまで手に入れていた。ーーーーって意図的に隠してるの何？

ラクシユミーよ、早熟じゃないよね？なんか最近エリスの雰囲気変わった気がする。大人っぽい余裕が生まれたみたい。スキル名から察するにあいつ恋でもしてるんか？

それとどうでもいい話だが、原作通りモルドさんはリユーさん達にしばかれていた。ミアさんのお叱りに内心ビクツとしたのは内緒だ。

話しは変わる。

「ヘファイストス・ファミリア」とは、鍛冶を司る女神ヘファイストスを主神として構成される生産系派閥。鍛冶の腕もさることながら、団長の椿・コルブランド筆頭に実力も折り紙つきだ。

都市内外問わず有名な「ヘファイストス・ファミリア」に、俺はインファントドラゴンとの激闘により損傷した武器と防具を買いに来た。

「すいません。この武器と防具って、同じのが他にありますか？」

「少々お待ちください。製作者は……あくあの子か、これはもうありませんね」

やっぱりか。前買った時も店員が似たような反応してたから察していたが、正直これ以外使いたくないんだよなあ。かなりしつくりくるし。

「じゃあ他のを探してみます」

俺は武器コーナーへと足を運ぼうとしたのだが、

「……もしよければ、製作者に会ってみませんか？」

「え？」

「もしかしたら同じのを作ってもらえるかもしれませんので」

「いいんですか？俺としては嬉しいけど・・・」

本当に大丈夫か？俺が悪人だったらヤバいぞ。向こうはL.V. 2みたいだから返り討ちにあうけどさ。

「アハハ、大丈夫ですよ！お客さんはイケメンですから！」

「え、何その判断基準」

イケメンなら許されるあれか？

「冗談は置いておいて、私の名前を出せばいけますよ」

店員曰く、この製作者は友人なのだとか。謎の信頼を得たことにより、製作者と場所を教えてもらった。

—————

「ごめんくださいー！貴方のご友人の紹介で来ましたー！」

工房の扉をノックする。鍛冶場特有の武器を造る金属音がしないので、作業中という訳ではないと思うが・・・。

主は留守にしてるのかな・・・おや？

「眠りを妨げる無礼者は誰？」

「俺です」

「本当に誰？」

「ごもつとも。」

現れたのは長い黒髪に本来のものなのか、単に寝不足なのか分からない目元の隈。小動物っぽい小柄なヒューマン。少々無防備じゃないかと不安になるタンクトップと短パンの服装。

この人が俺の使用した武具を造った鍛冶士シトリー・ハンナなのだろうか。

「俺はアラン・スミシーと言います。貴方の武具が損傷したので修理して欲しいんですが……」

「私の武具……？」

「これです」

俺は横に置いていた箱を持ち上げた。シトリーはその箱を覗き込む。

「……かなり損傷してるね。何と戦ったの？」

「強化種のインファントドラゴンと少々」

「よく勝てたね」

「仲間が居たので」

あれは死ぬほど大変だったなあ。あの後、二人とも精神枯渇で倒れそうな所に「ロキ・ファミリア」に助けってもらった。生ヒリユテ姉妹にテンション上がったね。

話しは戻る。

「修理……いや、新調しようか」

「やっぱ無理っすかね」

「うん。こんなポロポロならね」

着いて来てと言われ、工房の中に入る。足場には沢山の物で溢れており、隅っこに小さなベッドがポツンと置かれていた。片付けが苦手なタイプか。

「採寸する。上着脱いで」

「あ、はい」

指示通り上着を脱いでシャツ一枚になる。地面に投げ捨てていたであろうメジャーで測った。

「ガツシリしてるね」

「鍛えてますから」

これ本当。朝早く起きて運動してるんだ。恩恵に頼りきりになるのもアレだし。

測定終わった後、シトリーは興味深そうに俺の体を触る。あ、やめ、ちよつとくすぐつたい。

「すんすん」

「!? シ、シトリーさん!?!」

「・・・落ち着く。あと呼び捨てでいい」

いきなり匂いを嗅ぐな!あと抱き付くな!それに落ち着くつてなんだよ。

「だめ?」

「ぐっ」

上目遣いやめて。理性が飛んじやう。

「専属契約結ぶ?」

「いきなりだな。理由を聞いても?」

「友達が紹介したのと、お兄ちゃんに似てて落ち着くから。次も抱かせて」

言い方よ。途端にいかかわしくなっちゃうからやめよ?友達とはあの店員のことか。

「装備は二日後にできるから、その時に」

「分かった。だから離れて?」

「あと、いちじ、かん・・・ZZZZ」

「え?もしかして立ったまま寝たの?流石鍛冶土器用だねえ」

呑気なこと言いながらシトリーをベッドに投げた。彼女は寝不足だったようだ。

欲を言うなら、ヴェルフみたいに熱い思いを語ってほしかった。そうすればマイペー

スな性格の他、シトリー・ハンナという鍛冶士の人となりを知れたのに。

絶望から希望へ 鍵は【鼻】

「確認します」

中層手前の十二階層で、リリルカは仲間達に作戦の確認をする。俺の装備は一新されてはいるが、デザインは変わらなかった。その代わり性能は上がっているとのこと。

ちなみに全員サラマンダー・ウールを着用している。

「まずは前衛にヴェルフ様とアラン様。中衛にベル様とエリス様。後衛にリリが担当します」

「前は俺達でいいのか？」

ベルと専属契約を結び、新たに仲間になったヴェルフ・クロツゾが質問する。L.V. 1二人で大丈夫なのかと。

「問題ありません。もしもの時は中衛のベル様とエリス様が対応してもらいますから」

「うん」

「分かった」

やる気は充分。二人は意気込んだ。

二人で頑張ろうぜとヴェルフは俺の背中をバシバシ叩いた。痛い痛い、やめい。確認が終わったあと、俺達はいざ十三階層へ。

当然この後起こる出来事ははつきりと覚えている。強臭袋モルプルなる物を一応二つ用意してもらい、遭難した場合は十八階層を指す取り決めだ。遠征帰りの【ロキ・ファミリア】に助けってもらえるかもしれないから。

中層は上層とは違い、担当のソフィさんから過酷だと聞いた。回復薬も多めに購入した。ベルと座学を受けた。油断するつもりは毛頭ない。

今一度気合いを入れ直して十三階層へ行った。

—————

「ガアアア!!」

「! 後方から三体!」

「あれはヘルハウンドです! 並みの防具なら炎で簡単に溶けます!」

【放火魔】の異名を持つヘルハウンドと、いきなりの遭遇。現れるよりエリスの索敵の方が速かったので、

「ハア!」

「フッ！」

俺とヴェルフの二人で危なげなく倒し、残った一体はベルが速やかに討伐した。いいなしv. 2。凄い速かった。

「それにしても凄いな、サラマンダー・ウールつてのは」

「ああ、流石精霊由来の装備だな。・・・値段はかなりしたけど」

「・・・ちなみにいくらだ？」

「ゼロが五つ」

俺とヴェルフが感心し、その高額な値段にげんなりする。まあ、それ相応の額だからお互い文句はないけど。

「でもこれで全滅の憂いがぐっと少なくなったからね」

「うん。正直ありがたいよ」

ベルとエリスが思ったことを口にだす。それには激しく同意する。

「！　また来たよ！　今度は五体！」

エリスの聴覚がモンスターを捉えた。ランクアップしてからは索敵範囲がより広まり、感覚が鋭敏に強化されていた。うちのパーティにおける要はエリスだな。不意打ちに強くなったし。

兎のモンスター、アルミラージと遭遇しこれも難なく撃破し、ベルに似てたことを弄

られていた。俺？ 当選俺もエリスも弄ったよ。

おっと、そろそろか。

「!! 大多数のモンスターが急接近してる！ それと・・・人？」

「沢山のモンスターと人だと？・・・まさか！」

「バス・パレード【怪物進呈】です！ 急いで撤退しましょう！」

「駄目！ 後ろからも沢山来た！」

「挟まれた!?!」

「構えろ！ 迎撃して薄い方に一点突破だ！」

困惑するなか、俺の指示ですぐさま態勢を整える。一体一体が弱くても、数の暴力で全滅する。それが中層の恐ろしさだ。

それにダンジョンは生きている。焦燥感に駆られる冒険者をここぞとばかりに追い討ちを掛け、まったくもって嫌らしい存在だ。

モンスターを引き付けて来たのは案の定「タケミカツチ・ファミリア」で、

「・・・ごめん！」

ヤマト・命が謝罪の言葉を落とした。

善戦していたのだがヘルハウンドによる一斉放火により、迎撃戦は原作通りの結末を迎えた。

「……ヤバイ」

「……うん」

結論から言うと、立っていた場所がいけなかったのか、ベル達とはぐれてしまった。当たり前だが階層は不明。近くにベル達の気配はしない。不幸中の幸いなのは、Lv. 2のエリスと一緒にいることだろう。

強臭袋？二つともリリルカに持たせたよ。

「……」

「アラン……?」

取り決めは十八階層に行くこと。しかしそれは、ベル達が居ること前提の話。分断された場合の作戦はない。こっちはエリスが居るとはいえ、この先ミノタウロスが集団で現れる。最初のうちは大丈夫でも、数に押し潰されておしまいだ。もし十八階層にもベル達の元にも辿り着けなかつたら……俺達は、いや俺のせいで——。

「大丈夫だよ、アラン。俺のせいで、なんて考えなくていいよ」

「!? エ、エリス……?」

突然エリスに抱き締められ、彼女は落ち着かせるように囁いた。

「アランは強くて頭が良い。私はLv. 2の獣人。私達二人に出来ないことはない

よ」

「っ……俺は強くないよ。それに判断だつて誤つた。迷惑「思つてないよ」!?!」
エリスは両手で俺の顔を挟む。顔が近い!

「アランは私を助けてくれたよ? だから迷惑に思うんじゃないよ、今から恩返ししよう! つて思つてる」

「エリス……」

「だから作戦考えて! 私こういうの苦手だし!」

「ふっ、結局人任せかよ」

えへへと笑うエリスを見て、今一度頭を回す。元気もやる気も湧き出てきた。虚勢でもない! 絶望するな! 二人で助かるために頭を回せ!

「エリス、まずは装備の確認をしよう」

「うん!」

俺達はお互いの装備を確認する。多めに回復薬を用意したので、怪我と体力は癒せる。ただし精神回復薬の数は少ないので魔法は節約しよう。

武器と防具。俺は全部無事だったが、エリスのボウガンが壊れてしまった。あれは牽制として役立つのだがまあいい。サラマンダー・ウールと防具は壊れてない。

「十八階層までどう行くの?」

「それは縦穴を使う。短縮になるからな」

頭が回るリリルカが居るんだ。それならあいつらもそうするだろう。そのあいつらは強臭袋を使いながら縦穴を利用してベルとヴェルフの魔法で進んでいた。そこにヒントがあるはず……あ。

「エリス強烈な匂いが分かるか？」

「え？」

「強臭袋だよ。あいつらは絶対それを使う」

「あ、そっか。その匂いを嗅げれば」

「合流できる！」

そうと決まれば前進だ。当面の目的は縦穴の搜索と強臭袋の匂い。どちらにせよ十
八階層に行けるだろう。

「絶対生きるぞエリス。生きてラクシユミーのもとへ帰ろう」

「うん！」

絶望を希望に変えて足を進めた。生きて帰るために。

悪臭と迷子と尻尾

「強臭袋の効果が切れました・・・」

「!?」

リリルカの突然告げられた言葉に、ベルとヴェルフの顔に緊張感が増す。

アラン達と分断された後、取り決め通りに十八階層を目指していた一向は、強臭袋と
いうアイテムの効果でモンスターという脅威から難を逃れていたのだ。怪我人はヴェ
ルフ。落下時にリリルカはバッグを失い、回復薬の残量はポーチに入れている物だけと
なった。強臭袋はバッグに一つ、リリルカの懐に忍ばせていた物が一つ、計二つ。つま
り、もう無いということだ。

現在十六階層。ゴールはまだまだ長い。

「まあ、なんとかかりますね」

「へ？」

そんな緊張感の欠片もないことを言ったのは意外にもリリルカ。だからこそベルは
間拔けな声が出た。

「だって、パーティにはアラン様が居ますし」

「アランさんが？」

「ええ。あのアラン様です」

「おいおい、リリ助。それはいくら何でも楽観的じゃないか？アラン達が落下したのを横目で見たし、俺達と同じ、いや俺達以上に窮地に陥っているんだぜ？」

自信満々な顔をするリリルカに、ヴェルフはツツコミを入れた。Lv. 2のエリスが居るとしても、向こうに強臭袋が無いことは知っている。何処にいるか分からないアラン達に期待する余裕がなかった。

しかもヴェルフはアランと知り合ってから日が浅いが、悪い奴じゃないことは分かっている。しかし、こんな状況でどうにかしてくれらるとはどうしても思えなかった。

「アラン様は認めるのは癪ですが、あの人は頭が回ります。少しでも手掛かりがあれば正解を手繰りよせる。それがアラン様です」

「・・・そうだったね。ヴェルフも分かるよ。あの人の凄さが」

「おいおい、リリ助もベルも信頼し過ぎじゃないか？」

「体感したら分かるよ（分かりますよ）」

「なんだそりゃ」

にわかには信じられないヴェルフであったが、この二人を見て微かに希望を抱いてい

た。

ベル達が強臭袋の効果を切らしたのと同時刻。

「臭っ！この近くだな」

「臭い!?!これがあのアイテムの臭いならそうだよ！臭くて鼻が曲がるよお、うわーん」
エリスは泣きながら答えた。そっか、獣人だもんな。俺よりかなりキツイわな。

「バンダナあげるから、これで鼻を覆ってくれ」

「うう、ありがとう・・・スキルで捨てなかつたんだね」

「湿布で耐久に＋3だけだったからなあ」

スキル「三択からどうぞ」により手に入れたモノは「断捨離還元」というスキルで捨てられる。捨てたモノは経験値としてアビリティに還元できる。

試しに湿布を捨てたらシヨボかった。バンダナを残していたのもそれが理由だ。明らかに低そうだもん。

「鼻使えないから耳で頑張るね！」

「おう。ベル達は近くに居るか？」

「いや心配がない。もしかしたら縦穴を使ったのかも」

なら急ごうか。ダンジョンはすぐさま修復を始めるので縦穴は時間経過で塞がるは

ずだ。強烈な匂いが残っているのを見るに、まだ塞がってないと思う。

「ベル達大丈夫かなあ」

「ベルはLv. 2だし、ヴェルフが怪我してなかったら生存率は上がる。それに向こうにはリリが居るんだ。むしろ俺達より安全かもな」

「そうだ。あいつらは強い。」

ヴェルフは前衛張れる力と、魔法だろうが放火だろうが無効化できる対魔法封じの魔法。

リリルカはサポーターとして積み重ねてきた経験。周りの状況を把握し指示を出す頭脳。

ベルはというと、詠唱破棄による速攻魔法。蓄力による強力な一撃を放てるスキル。限界突破したアビリティ。

あれ？俺の付け入る隙がない？

「むー」

「？ど、どうしたんだよエリス」

「べつにー。リリを随分信頼してるんだなあと思っただけだよーだ」

え？な、なに言ってるの。こんな時に。

何故か機嫌が悪いエリスに疑問を抱く。当然リリルカを信頼してるし、指揮官として

の能力を羨むことだって正直沢山あった。でも、

「エリスはエリスの良さがあるだろ。俺がこうして立つてられるのもお前のお陰だし」

うんうん。エリスの前向きな性格に助けられた。リルルカとは違う良さがこいつにはあるのだ。

「そっか」

「? 尻尾ブンブンしてるぞ?」

「っ!? エッチ!」

「エッツツツ!」

痛い痛い、バシバシ叩かないで。ヴェルフかお前は。

そんなこんなで俺達は縦穴を目指した。

黒くて硬くて大きなアレ

「ふざけろっ．．．！」

少年は二人を抱えて走る。

現在十七階層に到達し、一直線に進めば目的地の十八階層へたどり着けるのだ。

では少年が走る理由は何か？モンスターから？それとも地獄みたいな場所から離れたいから？どちらも正解であるが、否である。

「ガアアアアアッ!!」

鼓膜を破り地面を揺るがすかのような咆哮が一面に響き渡る。

少年が走る理由であり、十七階層に出現する超大型モンスターにして【モンスターレックス迷宮の孤王】ゴ

ライアス。俗にいう階層主である。

ゴライアスは絶望に吞まれ掛ける少年の姿を確認し、潰さんと拳を握る。

まさしく絶対絶命。十八階層までもう少しだというのに永遠を錯覚するほど先が長い。

忍び寄る絶望に沈むと思ったその時、

「倒れるオラアツ!!」

希望がや^{アラン}って来た。

—————

「倒れるオラアツ!!」

俺はレイピアで脚の腱を削いだ。ゴライアスの態勢が大きく崩れ、襲われていたベル達は危機を回避しようだ。

このレイピア強すぎじゃね? 「ヘファイストス・ファミリア」の団長殿に見てもらおうか。

「エリスはベル達を!」

「分かった! アランは!」

「死なない程度に、本当に怖いから死なない程度に^{しんがり}殿を務める!」

「了解! (恐怖でビビる) レアなアランを見て私は嬉しいです!」

「状況分かってる!」

エリスはベルが担いでいるリルルカを受け取り、ベルの口の中に体力回復薬を突っ込んだ。

俺? ゴライアスを見ながら全力避難! . . . てあれ?

「ガアアツツ!!」

ゴライアスは口の中で何かを貯めて……一気に発射!! 目標は俺達ではなく……天井か!?

「やべえ!!」

「キャ!?!」

「うわっ!?!」

俺は二人の背中を強引に突き飛ばした。階層主の放つ咆哮ハウルは、怯ませる程度のミノタウロスの比ではなく、魔導士の砲撃レベルでヤバい。

数多の岩が天井から降り注ぎ——……

「……詰んだ」

俺とエリス達の間に着た。つまり、完全に分断されて孤立した。相手は推定Lv.4の化物。俺はLv.1の新人冒険者。成長速度?そんなん関係ないね。

目の前の化物は俺を見て嗤った気がした。

—————

「ほあああああ!?!」

「グルアアアア!?!」

何時間、何分、何秒経過しただろうか。時の流れが速いように感じるし、逆に遅くも感じる。外には異変を察知した「剣姫」がベル達を保護した頃だろう。ならばあの瓦礫

の山の傍に居るのだろうか？

俺は一縷の望みに賭けて絶賛シャトルラン。高校時代の記録は確か67。今の俺なら100以上は余裕でいけるぜ！

両足の腱を削ぎ落とされたゴライアスは、左右に動き回る俺に攻撃を仕掛け回る。だいたい当てずっぽうだが効果は覷面。俺の足場が悪くなってスピードが落ちる一方だ。

「あ」

限界はすぐやって来た。足が縛れた。階層主という化物が近くにいます。プレッシャーは半端なく、思ったより体力がゴリゴリ消耗していたようだ。

ゴライアスの掌が俺を潰さんと迫る。両手両足を地面に着いている状態で前方に進む。ハイハイだね。

そのかいあって、直撃は避けられたが、

「のああああッ!! ぶべらっ!」

まあ、風圧でぶっ飛んで壁に叩き付けられたけどね。

「ゴホゴホッ、【癒光の羽衣】フウー」

魔法で治療する。全身の痛みが消え、体力が戻ってくる。代わりに精神力が失っていき頭が痛み出す。

くそっ、これでお仕舞いか？まだ完結まで見届けてないんだぞ！

「ガアアアアア」

迫るゴライアスを睨み付ける。ここまで来れば最早恐怖を感じない。むしろ一矢報いるための戦意が滾る。

唯一攻撃が通じるレイピアで攻撃するか？ダメだ。奴に攻撃が当たっても切り傷。現実的じゃない。目を刺す？これもダメだ。奴が混乱して暴れでもしたら潰される。それに届かない。

あーでもない、こーでもない。正解が見つからない。感覚のズレを直して今日まで約一週間か。もつと上手く立ち回れたら状況は違ったのかな？

・・・ん？一週間？

「スキル」

一瞬、勘違いかもしれないが恩恵に熱が灯る。そう言えばまだ一週間経過していない。もし、もしも、今日がリセットされる日であるならば・・・！

①パンツ（トランクス）

②コタツ

③全力投擲

しやあああああああつ！！

「③に決まってるだろうが畜生め！！」

俺は③を選び、

「死ねええええデカブツウウウウ!!」

レイピアを全力で投擲した。

—————

うーん、うーん。なんか鈍くて重くて怠い。腕に自由がなく拘束されてるような…。
あとは温かくていい匂い？

「……知らない天井だ」

重たい瞼を開き焦点の合わない目を動かす。なんか気持ち悪くて吐き気がするが、それを軽減する何かが近くにある。

俺はモゾモゾと動いてみる。右左と寝返りしようにも動けない。いや動かせない。

あ、ちよつとくすぐったい。フサフサした何か顔に当たってるようだ。

「……アラン?」

あらん、アラン、ああ俺の名前か。じゃあ名前を呼んだのは一体……。

「目を覚ましたの!?!アラン!アラン!」

「あうあう、そんなユサユサしないでよ……」

激しく揺らされたら胃の中の吐瀉物が姿を現すから。

「アラン、私のこと分かる?」

「もちろん。エリス・キャルロだろ？俺の大切な存在だ・・・」
「くくくつ!!」

主神のラクシユミーも仲間のベルもリルルカもヴェルフもみーんな大切な存在だ。そう、大切な・・・まで。

半ば眠っていた意識が覚醒する。

「待った！大切な存在っていうのはファミリアとして！仲間だから大切ということだから！決して告白とかじゃないから！」

「あーはいはい、分かっていますよ分かっていますよ・・・ムフフ」

「投げやり!？」

顔が赤いぞお前。いや多分俺もか。

「お二人とも目が覚めましたか？」

「うひゃあ!？」

俺達はテントに入って来たリルルカに驚いた。

「節度を守ってください。イチヤイチヤしてるのが外まで聞こえましたよ」

「イチヤイチヤしてねえよ！」

「あ、はい。では外に来れますか？これから晩御飯らしいので」

「信じてないな、お前。・・・晩御飯？」

「ロキ・ファミリア」のテントか。そうじゃなきやおかしいけどさ。

「アラン大丈夫？」

「大丈夫かな。今から行くよ」

「では行きましょうか。皆さんが待ってますよ」

リリルカに案内され行ってみると、ベルとヴェルフはもちろん、多種多様な人達で溢れかえていた。こちらに向ける視線は様々だ。

俺達はベル達の横に座った。

「皆聞いてくれ。彼らは仲間のためにここまで辿り着いた勇氣ある冒険者だ。仲良くしろとまで言うつもりはない。けれど同じ冒険者として欠片でもいいから敬意を持って接してくれ」

仕切り直して乾杯！という小人族の男性。あれが「勇者」フィン・ディムナなのだろう。貫禄があった。

今更ながら気付いたギブスで固定された右腕のせいで、食事がままならなかったけど、エリスが食べさせてくれた。チラチラと男女問わない視線がこちらに向いた。

そんな宴会も中盤に差し掛かり、

「あの・・・」

「？」

「ゴライアスを、どうやって倒したんですか？」
「・・・は？」

イケメン死すべし慈悲はない

決死の中層探索から「ロキ・ファミリア」によって保護された俺達は、彼らの晩御飯？宴会？に参加していた。それが中盤に差し掛かり、金髪美女に問われた内容に耳を疑った。

「・・・は？」

この人は何を言った？ゴライアスを倒した？誰が？俺が？

「はいはい！あたしも聞きたーい！」

「そうね。Lv. 1の貴方がどうやってゴライアスを倒したのか聞きたいわね」

元気のいい少女と落ち着きのある女性も知っていたがっているようだ。褐色肌で細い体と同じく褐色肌ではあるが一部ご立派な物をお持ちの女性。うむ。ヒリユテ姉妹ですね、分かります。

てことは、隣に居る金髪美女は「剣姫」アイズ・ヴァレンシユタインか。やっべ、ドキドキする。

「その話、僕も聞きたいね。差し支えなければ教えてくれないか？」

前方からトコトコ歩いて来たのは団長にして【勇者】フィン・ディムナ。隣のティオネが好意を寄せている男性。ちなみにアラフォー。

気になっているのは【勇者】だけでなく、ベル達含め周りの団員もこちらに視線が向いている。俺はその視線に気まづくくなる。

正直、記憶が曖昧で全然覚えてない。土壇場で獲得した【全力投擲】を使用したのは覚えてるんだけど・・・そのせい？

今は誤魔化すか。

「・・・ちなみに、ゴライアスの魔石はどこにありますか？」

「それなら僕達が持っているよ。魔石とドロップアイテムは後で君に返すから安心してくれ」

よかった。置き去りにしてこの人達ならともかく、リヴィラの連中にでも盗られでもしたら腹が立ってた。何もしてない奴らが横取りするのはムカつくよなあ？

それはそれとして。

「魔石は全て差し上げます」

「[[[[[!?!]]]]」

「・・・それはなぜ？」

俺の言葉に全員が目を見開いて驚愕の表情を浮かべているのは、階層主の魔石の価値

を知っているからだろう。俺達のパーティで一番驚いているのは案の定、リリルカ。

「滞在費と治療費です。少ないかもしれませんが貰ってください」

「いいのかい？ それらに關しては僕達は気にしないよ？」

「いいんです。ドロップアイテムがあるんですよね？ 俺はそれを貰えれば結構ですから」

ドロップアイテムはシトリーの土産にしよう。どうせまたゴライアスと戦うことになるし。

「・・・分かった。それならお言葉に甘えるところでしょう」

「ありがとうございます」

【勇者】は俺の意見を聞き入れてくれた。やっぱりタダで施されるのは違うよね。

「いいのアラン？ せっかく倒したのに」

「そうですねアラン様。階層主の魔石ならかなりの額で取引されます。全額と言わず何割か貰っておけば」

「いいんだよ。何も返さないのは俺が嫌だから」

それにどうやってゴライアスを倒したのか、もう聞かれることはあるまい！ ハッハッハ！

「あの」

「?」

「ゴライアスを、どうやって倒したんですか?」

カハツ。

振り出しに戻った。

「・・・エリス」

「ん?」

「発見当時の俺と周りの状態は?」

「えーと、右腕が曲がり曲がってたあげく、血塗れのズタボロ状態。それに比べて他はビツクリするくらい軽症だった。周りはゴライアスの魔石とドロップアイテムが落ちてたくらいかな。他のモンスターはいなかったよ」

右腕そんなグロいことになってたの? 軽症だったのは魔法のお陰か。他のモンスターがいなかったのはゴライアスの攻撃に巻き込まれて潰されたから。誕生しなかったのは、ダンジョンが修復を優先したからだな。

俺は包帯とかで固定された右腕を優しく触る。なんだろ、傷が疼く。俺は中二になったのか?

それにしても・・・。

「(ひいー視線が痛いよお〜!)」

「(アランなら大丈夫だよ。何とか切り抜けて!)」

無責任な。

あ、でももうすぐか。

「俺がゴライアスをどうやって倒したかを、貴方達は知りたいんですよね？」
コクリ。

「倒した方法は……」

「倒した方法は……?」

ゴクリ。

溜めて溜めて溜めて溜めて溜めて——

「——超頑張った!!」

・
・
・

「「「「はあ~~~~~!!」」」」」

「あれだけ溜めてそれかよ!」「無駄に緊張したじゃねえか!」「もつとここう、具体的な理由があると思っただわ!」「これだからイケメンは」「羨ましい!」「カッコいい!」

ワー、ワーと騒ぐ【ロキ・ファミア】の面々。隣の【剣姫】はポカーンとしている。俺達の仲間は……呆れているのか?

「!・アラン」

「んー？」

「ラクシユミー様が居るんだけど・・・」

獣人のエリスの聴覚が主神の気配を捉えたようだ。てか、お前の感覚優れすぎじゃね？

「じゃあ我らが主神をお迎えに行きましょうかね」

「え、軽くない？」

予定通り。俺は立ち上がりエリス案内のもと主神と思わしき神物がいる場所へ。

「アランにエリス、お主ら大丈夫じゃったか？」

「まあね」

「驚かないんじゃない。つまらん」

「まあね」

ラクシユミーだけでなく、ベルの主神ヘステイアと俺達に【怪物進呈】バス・パレードを仕掛けた【タケミカヅチ・ファミリア】の面々。それと・・・。

「ハツハツハ。ゴライアスが居なくて助かったね！」

「ええ、そうですね」

【ヘルメス・ファミリア】の主神ヘルメスと、【万能者】ベルセウスの二つ名を持つアスファイ・ア

ル・アンドロメダがいた。

「・・・君はいつたい何者なんだい？」

「知るか。ダンジョンで言うイレギュラーじゃないか？」

俺は軽薄そうな羽根つき帽子の男の首に剣を向ける。彼の隣の居た【万能者】はどう動くか迷ってるようだ。

—————

宴会が終了し、休んでいたテントに戻る。中層でのこと、右腕のこと、全てラクシユミーに話した。

「更新しよう」

「うん。俺もお願いしようと思ってた」

数秒何かを考えたラクシユミーは恩恵の更新を提案する。俺は服を脱ぎ捨て背中を見せた。

「・・・ランクアップ出来るんじゃないが、どうする？」

「お願いするよ」

この後は冒険者によるランチに遭うし、漆黒のゴライアスとも戦わなくちゃいけない。正直もつたいないと思うが、アビリティの数値は気にしないさ。

「最終値は平均Bじゃ。その中でも飛び抜けているのが、敏捷と力じゃな」

「おお随分伸びたな！まあ、逃げ回って、硬い脚を削いで、全力で投擲したから当たり前と言えは当たり前かあ・・・」

「発展アビリティは、【剣士】【耐異常】【狩人】【幸運】の四つじゃ」

「四つもか。それに・・・【幸運】？」

これってベルと同じだよな？何でこれが発現したんだろ。

「効果は知らぬ。アランは大概じゃな」

「・・・【幸運】にします」

無論、選ばない手はないか。

アラン・スミシー（16）L.V. 2

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

“発展アビリティ”

幸運 I

“魔法”

スキル

コミュニケーション

【言語理解】

サイド・ワ

【三択からどうぞ】

リサイクル

【断捨離還元】

冒険者になっておよそ三ヶ月か。成長補正もないのにこれは速すぎじゃね？

「さて。更新終わったから寝るぞ。右腕は速攻で癒すのじゃ」

「わ、分かったよ・・・」

俺は言われるがまま、魔法を発動させる。右腕がどんどん癒えていく感覚がある。待つこと数分。完全に治ったと判断して、固定されている包帯を剥ぎ取った。

「アラン、終わった？」

「終わったよ」

ひよっこり顔を出したのはエリス。更新が終わるのを外で待っていたらしい。ちなみにエリスの更新を先に終えていた。

「ちようど良かった。エリスは左側に来るのじゃ」

「ひ、左側？」

「えへへ。お邪魔します」

「私は右側じゃな」

「み、右側？」

待て待て。布団ならまだあるだろ！やめ、一緒に入るな入るな。

「・・・女の子になっちゃう」

「オセロか」

余談だが、これを目撃したヘステイアが僕もベル君と！と意気込み突入したとか。

男の浪漫

「・・・治りましたね」

「そ、そうみたいだな・・・」

俺は長い緑髪の王族妖精こと、【九魔姫】^{ナインヘル}リヴェリア・リヨス・アールヴ立ち会いのものと回復魔法を行使した。対象は【ロキ・ファミア】で、ポイズンウエルミスの猛毒を喰らった人達に。

ポイズンウエルミスは、ダンジョンで確認されている中でも強力な猛毒であり、治療するには専用の解毒薬を服用するか、都市最高と名高い【戦場の聖女】の魔法だけである。

その猛毒を二時間懸けて治した。一回目で五人治療。精神回復薬は二つ使用した。
「・・・二回目行きます」

「・・・ああ、助かる」

困惑する彼女を他所に俺は作業に移った。

—————

「で？どうだったんだい彼は」

「右腕を治して現れた時は驚いたが……あの猛毒までは癒せまい。せいぜい症状を幾分か軽くするだけじゃろう」

「……した」

「？ なんだい？」

「？ 聞こえんぞリヴェリア」

執務室を兼ねる天幕へと戻ってきたリヴェリアに、フィンとガレスは尋ねた。

『俺の回復魔法なら何でも治せます』

底知れない実力者である彼の手腕。何故か抱いていた期待感。その二つを合わせてフインは頼んだ。

『君は、ポイズンウェルミスの毒を治せるのかい？』

『分かりません』

『ほう？』

フインは思考する。

治せない、じゃなくて、分からない。ポイズンウェルミスを知っているのなら、誰だつて治せないと言う。なのに彼は分からないと言った。彼は猛毒を知っている。知らないという雰囲気ではないからだ。ならば少なからず、

『俺の魔法は毒を含めて回復させます。アビリティ貫通の猛毒だろうと、可能性は充分あるかと』

自分の魔法を信頼しているということだ。

『挑戦する価値はありそうだね。リヴェリア』

『分かった。来てくれ』

リヴェリアに彼を任せた。この時点では正直不可能だと思っていた。思っていたのだが、彼に希望を抱いている自分がいるのも事実。

だから君を見定めよう、アラン・スミシー。ベル・クラネルと同じように僕達を驚かせてくれ。

まあ、数時間も経過するとは思わなかったが。

「流石の彼も「違う！」は？」

「アラン・スミシーは！確かに数時間経過させたが！一回の魔法行使で五人も治した！私の前で治して見せたのだあいつは！」

「！！」

声を荒げて喋るリヴェリアに驚いた？確かにそれにも驚いた。だが違う。本当に驚いたのは――、

「それは、本当かい・・・？」

「ああ本当だ」

「ありえん・・・」

「事実だ。私はこの目で見た」

アラン・スミシー。Lv. 1で在りながら階層主を討伐するという大判狂わせジャイアントキリンを
しただけでなく、(聞く限りでは)前衛にも関わず、あの猛毒を癒す優れた回復魔法の
使い手。

そんな彼に一同は戦慄した。

「幸いなのが敵対心が無いことだね」

「全くじゃ。あの小僧が奴らの仲間なら、洒落にならんぐらい厄介じゃぞ」

間違いなく重宝されるだろう。こんな逸材、「ロキ・ファミリア」に欲しいくらいだ。

・・・奴らの仲間か。

「いつそのこと、協力者として依頼してみようか」

「正気か？」

「無関係な彼を、それも恩人に当たる人物を巻き込むのか？」

信じられないという目でフィンを見るが、当の本人は至つて真面目だ。

「まあ、選択肢の一つだと思ってくれ。彼は必ず必要になる」

勘だけだね。最後にそう締め括った。お前の勘は外れないだろうと、リヴェリアとガ

レスは思った。

「しばらくしたら休憩させようか」

今も頑張っているのだろう。労わらねば。

—————

「あ！アランさんお疲れ様です」

「・・・ベルか」

「本当に疲れてますね」

「まあな。ちよつと顔洗つてくるわ」

治療も一段落したし、スッキリしたいから水場へ行こつと。頭がボーとする。精神力マインドを消耗させ過ぎたか。

「ベル君。それにアラン君も」

「？」

「付き合つてくれ」

思考が定まらない頭で、ヘルメスの付き添いに了承してしまった。それがいけなかったのだ。

俺は原作の内容が頭から抜けていた。

「私らでは満足出来なかつたのか？そなたは欲張りな奴じゃのう」

「・・・アラン？何か言い訳ある？」

——申し訳ありません。実行犯に唆されたんです。しかし安心してください。犯人は捕まえてバンダナ巻いて目隠しました。なのでお二人の柔肌は見られてません。

「恐ろしく早口じゃが・・・嘘は付いてないな」

「遺言はそれ？」

——フツ、

——皆さん大変お綺麗でした（ニコツ

俺の意識はそこで途切れた。

—————

「ア、アランさん」

「んー？なんだー？」

「えと、その・・・大丈夫ですか？」

「この顔見て大丈夫だと思うか？」

「思いません。決して」

痛てて。やりすぎだろエリス。もう少し加減しろよ・・・俺が悪いけどさ。

「あ、ヘルメス様・・・ヒイツ!？」

「ひゃあ!？」

あん？

「貴方つて人はくらくく！」

「ごごごごめんなさい！つい驚いてしまつて」

はっはーん。またトラブつたなこいつ。この主人公め！

「それに貴方も！アイズさんの裸を見ましたよね?！」

「え？いや俺は別に——」

見てない、と言えなかつた。だつて見たし。大変ご立派でし

「やつぱり見たんですかあ!?!見たんですよね！見たのはお仲間だけだと思ひ見逃しま
したがあ……!！」

これは凄まじい魔力……!！」

「お、おいベル」

「な、なんですか?！」

「俺も巻き込まれてる感じ?！」

「そんな感じですか?！」

ハハハ、クソツタレめ。

「やつぱり許しませーん!!」

「ぎーせんしたあー!!」

「ごめんなさあーい!!」

俺とベルは山吹色の妖精に追い掛け回され――、

「迷った・・・」

仲良く遭難した。

今日からお前はリーダーな!!

追い掛けられ迷い込んだ先は、モンスターが跋扈する暗闇の森林。いくらモンスターが誕生しない階層だからといって長居はよろしくない。上や下の階層から来るモンスターもいるからだ。極力静かに行動した方がいいのだが……。

「人として恥ずかしくないんですか!?!もう最低です貴方は!!最低のヒューマンですつ!!」

「(ぎ) (ぎ) (ぎ)めんなさいいいつ!!」

隣でベルと「千の妖精」レフイーヤ・ウイリデイスがワイワイ騒いでいた。俺も罵倒されたけど、ベルの方がヘイトを集めていたのですぐ終わった。だから見張りをしつつ外伝の内容を思い出していた。

外伝「ソード・オラトリア」の主人公はアイズ・ヴァレンシユタイン。そして主役ばりに出番がある「千の妖精」レフイーヤ・ウイリデイス。敵は怪人と呼ばれる強力な存在に、オラリオ転覆を目論む闇派閥の残党達。そいつらが拠点としている人工迷宮に、闇落ちしたヤバイ精霊。

正直原作よりハードモードだと思う。【勇者】や【劍姫】もそうだが、目の前の【千の妖精】も大概化物だ。

まあ、今はそんなことより……

「リーダー」

「なんですか！今取り込み中ですのでお静かに！……り、リーダー!？」

面白いなこいつ。

「俺とベルより経験あつてレベルが高く、何より【ロキ・ファミリア】のメンバーだ。優秀な貴方の指揮下に入り行動したいと思つてね」

「わ、私は別に優秀では……でもそうですね！貴方達より経験もレベルも優れている私がリーダーに相応しいですね！いいでしょう！必ず送り届けますよ！」

フンと胸を張る【千の妖精】に、前世の自分に懐いていた幼い従姉妹を幻視する。元気にしてるかなああの子は。

おや？感傷に浸っている間にさっそく指示を出すようだ。

「まずはー」

どんな指示だろうな。外伝ではどんな指示だったけ？

「魔石灯を貸してください。暗くて進めません」

「……はい」

「……」

間違っていないんだけど、少々残念な気持ちになった。

—————

リーダーの指示で戦闘することなくスムーズに進んだ。後衛なのに行動力は探索者のそれに、俺もベルも感嘆する。

リーダーは大樹に登り——

「灯りを消してください!」

上から何かを見つけたのか、魔石灯を持つベルに消灯するように指示を出した。

発見したのは恐らく、

「誰なんですか、あの人達は?」

「……簡単に言ってしまうと、私達と敵対している組織です」

この時期に敵対している組織は闇派閥。彼らについて知っていれば特徴的な服装から容易に特定できる。

闇派閥の後にコツソリと忍びより、

地面が割れた。

「うわああああ!!」

「意外と深い——!?!」

何とか着地できたが、足が焼けるように熱い。暗闇に目が慣れ始めて気付く。剣や防具、冒険者達の亡骸を。

「まさかこれ溶解液ですか・・・!?」

「リーダー。それだけじゃない」

「・・・上」

「え？」

天井に根を張る極彩色のモンスターが、獲物である俺達を物色していた。

「リーダー！新種について知っているのなら情報を！」

「個体によって特徴は様々です！しかし、共通して魔力に反応します！」

もちろん知っているが、新種について知らないはずのお前が知っているのかを、「口キ・ファミリア」であるこの人に疑問を抱かせたくない。ならば全力で無知を装おう。

「どうも！三人で互いを守りながら陽動しよう！」

「っ!!なんで貴方が指示を「ベル！」無視ですか！」

「は、はい！」

「敵の武器はあの鞭だ！しかも単調で離れていれば避けられるし、視線の先に飛んでくる！」

「(わ、私より先に気付いた!?)」

「ほ、本当だ！これなら避けられる！」

「リーダー！」

「は、はい！」

「詠唱を頼む！【癒光の羽衣】」

俺とベルに回復魔法を付与して動き回る。回避に徹していればまず避けられるし、リーダーの詠唱に感付かれることはない。

【全力投擲】を考えたが、彼女の砲撃で味方の援軍がやって来る。地上にも敵が居るのに、派手さが少ない俺のは駄目だ。

俺の回復魔法は溶解液にも効果あつたみたいで、皮膚が爛れたり治つたりを繰り返していた。ランクアップを果たした今の俺なら、マインド精神力に余裕が生まれる。

「っ!!不味い！」

リーダーの莫大な魔力に気付いた新種が俺達を無視して襲うが、

「【ファイアボルト】!!」

ベルの速攻魔法が刺さる。

「作戦変更！リーダーの並行詠唱で敵を誘導！ベルは攻撃を逸らしてくれ！」

「分かりました！アランさんは!?!」

「ぶつちやけお前らの連携に合わせられん！適当に武器を投げてみる！」

それにコクリと頷いた。いきなり囿にされたリーダーは、納得してない表情を浮かべるが、それが妥当だと分かっているようなので渋々納得した。

ベルもリーダーも【劍姫】（標）から指導を受けており、あの人ならどうするかを想定して動ける。だから共闘経験が無いのに息が合う。

ベルの拾い物である大戦斧が折れ、投擲する武器も無くなった。それでも、

「防ぎきった！」

「アルクス・レイ！！」

天井に向かって一筋の閃光が走る。リーダー自慢の砲撃魔法をガードする新種だったが、

「二十秒チャージ・・・【ファイアボルト】！！」

【英雄願望】（鈴の音を鳴らし終えた）を発動させたベルの魔法が組合わさり、魔石ごと消滅させた。

脱出後に闇派閥と新種がこちらに襲撃するが、リユーさんが現れ事なきを得た。平行詠唱を完璧なまでに組み合わせた戦闘はまさに圧巻の一言だった。

「さて改めて治療をつ!? ば、バンダナあげる！」

「え？」

「同胞の人。まずは隠した方がいいのでは？」

「~~~~~!!」

傷は治せても服までは直せない。俺は視線を逸らしバンダナをあげた。ごめんなさい。

—————

あの騒動から帰還後のこと。

「お主がアラン・スミシーか？」

「はい、そうですが」

「手前は〔ヘファイストス・ファミア〕団長、椿・コルブランドだ。お主のことはヴェル吉から聞いたが、

———何やら特殊な装備を持っているようだな？」

彼女の鋭い目が俺に刺さった。

脅迫は不敬？そりや失敬

「ほうほうこれが・・・」

例の騒動から帰還してすぐ、椿・コルブランドに捕獲された。

俺はさりげなく逃亡を試みたが、首もとをガツシリ捕まれ野営地から遠く離れた岩場に連れ込まれた。無力ながら抵抗はしたが、努力虚しく徒労に終わった。（豊かなお胸を堪能したとかそんなんじゃないよ）

遠く離れたのはエリスみたいな獣人の索敵を躲すためだろうか。もしくは誰にも聞かれないのか？はたまた何も考えてないのか。

考えても分からないので、俺は要望通り彼女にレイピアと箆手を渡した。バンダナはリーダーが持っている。

「・・・」

「ふむふむ」

「・・・」

「なんとまあ・・・」

声を掛けようか?でも黙れとか言われたら悲しいしなあ。無言で待つか。待つこと三十分。

「これをどこで入手した?」

「ふえっ!? どこでつて言われても・・・」

いきなり声を掛けるなよ、ビビったろうが。スキルで手に入れました!とか馬鹿正直に言うわけにいかんしなあ。適当に誤魔化すか!

「なんか凄いいもんなんすか?」

「凄い、たしかに凄い代物ではある。しかし手前が思うにこれは――

――一重に異質な物だ」

決して冗談ではないことを、真剣な眼差しから読み取った。武装する冒険者として、武器を鍛錬する鍛冶士としての言葉。返す言葉が思い付かないけど。

まあ、話半分に聞いとくか。

「それよりお主」

「?」

「シトリーの装備を使っておるのか?」

レイピアから話しはそちらに移った。

あの娘の興味を引いた相手。遠征に参加した「ヘファイストス・ファミリア」の間で

少しばかり噂になっていたそうなの。

ヴェルフ？ シトリーの名前しか知らないんだと。

「それどころか専属契約も結びました。結ばされたの間違いか？」

「ハツハツハ！ そうかそうか！ あの娘が特定の誰かに造るとはなあ！ で？ シトリーは同行しなかったのか？」

「『面倒くさ……コホン。仕事を立て込んでいるから無理』と言っていましたね」

「本音が漏れておるぞ。全く」

まあ、本来の仕事をするようになったのは良いことかと椿は付け加えた。

後から聞いた話だと現在は衣服や包丁など、生活に関わる日用品を造っているらしく、武具などはしばらく携わっていないらしい。

「それには兄が関わっているのだが……よそう。機会があれば本人から聞いてみると
うら」

「そうします」

「では戻ろう……深くは聞かんが、それと似た武具を手に入れたら手前に見せろ」

「こ、断つたら……？」

「お主のホームに居座る」

「やめろやめろやめろ！」

冗談じゃとゲラゲラ笑う椿だが、

「・・・冗談に聞こえねえよ」

「? 何か言ったか?」

「戻りましょう。みんな心配してると思います」

俺達は野営地に戻ると、待っていたのはリヴェリアさんによる説教だった。椿さんによる犯行だとすぐ分かったので、解放されるのに時間は掛からなかった。

「なんじゃ逢引^{デート}か? 隅に置けん奴じゃな」

「へえ、いいご身分だねアラン?」

からかう主神と、怒気を滲ませる犬人。今宵の夜は長い。

—————

原作開始。

【ロキ・ファミリア】が地上に向かって出発した後、案の定ヘステイア様が誘拐され、モルド達冒険者にリンチされたベルだったが、流れが変わった。もうすぐ反撃するだろう。

んで、俺はというと・・・

「君は何者なんだい?」

「知るか。ダンジョンでいうイレギュラーなんじゃないか？」

リンチを仕掛けた主犯の後ろを取った。隣には「万能者」がどう動くか決めかねているようで、その気になれば無力化されるだろうから一気に決める。

「神殺しをすれば・・・なんて、つまらない脅し文句が通じる相手ではなさそうだ」

「人殺しは出来そうにないが、あんたは送還されるだけだ。殺したわけじゃない」

「んー・・・。じゃあこれはどうだい？神殺しをすればダンジョンが気付いて「モンスター」が生まれる」知っているのか

驚く素振りを見せるだけでヘルメスの表情は曇らない。お気に入りベル・クラネルを曇らせるぞオ

ラ。

「こちらの要求を呑んでもらおうか」

「その脅しを通じるとでも？」

「レベルを詐称しているよね」

「・・・何か証拠でも？」

【泥犬マドル】が言つてた」

「・・・嘘じゃないな」

「ルルネエ・・・！」

外伝で言つてたよ（ニッコリ

俺の提示した内容は、ヘステイア及びラクシユミーの派閥が負うペナルティの肩代わり。それと透明化の兜。覗きに使わないよ決して。

当然交渉に持つてこようとしたのだが、

「これからもベルを巻き込むんだろ?それならこれくらい何とかしろよ」

強引に黙らせた。【万能者】の答えは主神に払わせますだつてさ。流石に顔色が蒼白になつてた。ヘルメスさまあ。

「!?!」

「あちゃー・・・神威を発動させたかヘステイア」

ヘステイアパワーがここまで飛んできたぞ。神の存在感マジヤバいな。

そしてダンジョンが揺れて――

「漆黒のゴライアス・・・!?!」

「恨んでいるのさ神を。あれは俺達を抹殺するために送られた使徒。アスフィ、アラ
ン君頼んでいいかい?」

「くくくつ!!行きますよ!」

「言われなくても。どうせベル達も行くしな」

俺はお姫様抱つこで運ばれた。大勢の冒険者に目撃された時は恥ずかしかった。

そして戦闘が始まり、

「アスファイさん！」

「何ですか!?!後にしてください！」

「本当は【泥犬】から聞いてないよ!騙してごめんね！」

「はあ!?!ちよ危なっつ!!」

さて、モンスター退治に励もうか。ゴライアス?取り敢えず放置。前半はベル達が頑張るから大丈夫でしょ。ピンチの時にでしゃばろう。そうしよう。

「す、すまねえ」

「態勢を整えたらモンスターを頼む。俺はなるべく数を減らす！」

「了解だ!仲間を呼んで来るまで持ち応えてくれ！」

アヒヤヒヤヒヤ!経験値置いてけモンスターども!Lv. 2やぞこっちは!

「よつと【癒光の羽衣】！」

「こ、これは傷が治ってるのか・・・?」

「まさかあいつがやったのか・・・?」

ついでに負傷した冒険者を治療しとこ。恩を感じてくれよ?この借りはいつか返してもらおうかな冒険者ども。

「アラン発見!目を離れたらすーぐ居なくなるんだから！」

「あ、エリス」

「ラクシユミー様は避難させたから大丈夫だよ。私はモンスター倒してるけど・・・」
「全然大丈夫だよ。俺もそうしてるから」

「よかった。アランのことだからゴライアスに立ち向かうのかと思ってた」

そう言っただけで胸を撫で下ろし安堵するエリスに、俺は戦闘狂かと心の中で呟いた。まあ、否定出来ないけどさ。

あ、魔導士部隊が一斉に放って、ベルの魔法が頭を貫いた。

強気な少女を見ると・・・ゲへへ

アラン・スミシー(16) L V. 2

力：H 1 4 9

耐久：H 1 6 3

器用：H 1 2 7

敏捷：G 2 0 8

魔力：G 2 5 0

“発展アビリティ”

幸運 I

“魔法”

“スキル”

コミュニケーション
【言語理解】

・会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞ】
サード・ワゴン

・三つの中から一つ獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄(1・箆手2・レイピア3・【刀剣乱舞】4・バンダナ5・【癒光の羽衣】6・【全

力投擲)

【断捨離還元リサイクル】

・スキルによって入手したモノを捨て自身の能力値に還元する。

・価値によって変動

エリス・キヤルロ(16) Lv. 2

力：G 2 1 3

耐久：G 2 2 6

器用：F 3 1 0

敏捷：F 3 6 7

魔力：H 1 4 0

“発展アビリティ”

狩人：I

〃魔法〃

〃速度増加速ま〃

【加速アクセ】

〃スキル〃

【犬人咆哮】

・獣化

・全能力値に高補正

【貴方想奏フォーユー】

・特定の人物を想うほど効果向上

・魅了無効

あの地獄のような中層探索から帰宅し、現在に至るまでのステータスである。結論から言うと、俺もエリスもかなり伸びた。客観的に見れば異常とも呼べるものかもしれないが、これが当たり前になっているので特に驚きはしなかった。

まあ、エリスの方が俺より高いことに若干の不満はあるし、これからどんどん切り離されると考えたなら尚更だ。例のスキルによる効果だと分かっているので、俺も欲しいなあと思つづくと思う。

そんなことを考えつつ、

「スキル」

本日は「三択からどうぞ」が使用出来る日だ。成長補正が獲得できるのはこのスキルしかない。それに俺には幸運があるのだ！勝利の女神は俺に微笑んでいる！

ちなみにリーダーに貸したバンダナは洗濯されて返却された。菓子折りを持参して現れた時は律儀だねと思いました。

① 婚姻届

② 【気配察知】（スキル）

③ トランプ

②だオラアアアアアアア!!

—————

「作戦のおさらいをしよう。索敵は獣人のエリスとスキルを持つ俺が交互に行って、近くの小部屋を起点に探索をする。何か質問は？」

「はい先生」

「どうぞエリス君」

エリスが拳手をしたので、発言の許可を出す。

「私達だけで中層に行けるんですか？」

「いい質問だ。Lv. 2が二人居るとはいえ、危険であることには変わらない。ベル達が居てあれだったからな」

思いつきは前回の探索。【怪物進呈】^{バスバレード}によつてモンスターの大群に囲まれ命懸けの探索が始まったあれ。絶望に吞まれかけ、分断され、一人ゴライアスと戦闘したのは苦い思い出だ。

それにベル達が一緒じゃないのは、一時的にパーティを解消したからである。ベルに頼らず自分達の力を磨くためにそうした方がいいと思つたから。いつ組み直すかは未定だ。

話しは戻る。

「でも少人数だから助かる場合もある」

「・・・機動力？」

「ザツツライト」

「なにそれ？」

囲まれても俺達二人の足なら切り抜けられるし、いくらでも連携が取れる。そもそも囲まれる前に逃げられる。

「それに二人が索敵できるのはかなりデカイ」

「交代で出来るから常時集中しないでいいもんね」

どうしてもエリスに負担を掛けることになるが、新たに獲得したスキルで役割分担が可能になった。肉体的な疲労は薬で何とか出来るが、どうにもならない精神的な疲労は避けたいね。

「強臭袋は俺が持つてるし、『青の薬舗』で回復薬も買っておいだ。俺が思うに万全の状態だよ」

それでも気が抜けないけどねと付け加えた。

「その戦闘衣バトルクロスつてゴライアスの?」

「まあね。俺が倒したゴライアスの剛皮を加工した装備で、軽くて耐久性に優れているシトリー自慢の一品なんだぜ」

黒いような灰色っぽいような上着。その下にはお馴染み革鎧で、十八階層での決戦時に落ちてたドロップアイテムが使われており、武器のサーベルも同じで俺の装備は間違いない強化されていた。

シトリーは元氣そうだった。俺のことを聞いたんだろう、出会い頭に心配したよと抱き着かれた。久し振りのシトリーに庇護欲掻き立てられた。

エリスもエリスで装備に変化が見られる。以前の動きを重視した服装ではあるが、武器のバリエーションが増えている。腰辺りに投げナイフを数本携帯していた。

表情は・・・微笑んでいた。それが怖かった。

「その鍛冶士、今度私に紹介してよ」

・・・大丈夫？後ろから刺されない？

背中を警戒するようになった。

—————

ギルドにて。

ベル達が酒場で喧嘩したという報告があつた。下手人は「アポロン・ファミリア」という比較的規模が大きい中堅派閥。きつかけは主神の悪口を言われたかららしい。

君も気を付けなよとソフィさんから進言された。これに関しては介入してもしなくてもどっちでもいい。この先の原作に何ら影響ないし、参加するにしても経験値を獲得できる。参加しないのなら賭博で荒稼ぎできる。それが俺の見解である。

「ちよつと」

「？」

声のする方に振り返ってみれば、例の二人がそこに立っていた。強気な少女と弱気な少女。とりまお告げプリース。

「宴の招待状？」

「うん。確かに渡したから・・・御愁傷様」

そう言って二人は立ち去って行った。御愁傷様つてことは戦争ルートに突入？

ちよっ勘弁してよ。

帰宅して主神に報告。渋るだろうなと予想していたけど意外にも参加すると即決した。その理由が自分の子にエスコートしてもらえるからなんて、俺は知る由もなかった。

二人は英雄候補

ベルの魔法が漆黒のゴライアスの頭部をぶち抜いた。魔石を狙ったつもりがややズレて頭にいったらしいが、それでも頭部を失って生きられるモンスターは事実上存在しない。

「やったか！」

近くに居た冒険者が叫ぶ。その声色には喜びが多分に含まれていた。

しかーし！そのセリフはやってないんです！失敗フラグなんですそれ！

ゴライアスは逆再生のように元通り、冒険者に再び、いやそれ以上の絶望を与えた。

そして……

「ベル様あああつ!!」

「桜花あああつ!!」

ベルを庇おうと桜花が盾を持って立ち塞がるが、ゴライアスによる無慈悲な一撃で二人は沈んだ。

「【癒光の羽衣】！」

「アラン君！」

「アランさん！」

俺は倒れるベルと桜花に魔法を施す。エリスには一応モンスターが来たら倒すように伝えている。簡単に言えば見張りだね。

「もし英雄と呼ばれる資格があるとすれば——」

ヘルメスの口から紡がれる英雄の資格。このシーンは割りと好きだったりする。

「——それが一番格好のいい英雄だ」

未完の英雄は立ち上がる。主神の呼び声？ 仲間の魔法？ 男神の発破？ どれも違う。

無数にある分岐点の一つ。

純粹無垢なこの男にとっての。

己を賭す大一番だから立ち上がるのだ。

憧憬を燃やし、願いを吠える。

リンリンと鳴る鈴の音は、ゴオオオン!!ゴオオオン!!と鳴り響く鐘の音に変わる。

その音に触発されたように、荒くれ者ども、鍛冶士、くノ一、妖精が奮起する。

「ハアアアアアアッ!!」

限界まで溜められた白い閃光が、ゴライアスの上半身を吹き飛ばした。

「見たぞしかとこの目で見届けたぞ！ゼウスの置き土産を！動く動くぞ時代が動く！このオラリオの地で時代を動かす何かが起きる！」

ヘルメスは興奮しながら語る。

「大神が遺した英雄候補、そして・・・」

見据える先に居るのは、

「突如現れた枠外の英雄候補」

神の手を借りず英雄候補を導くその手腕。自分相手にも一歩も退かず逆に脅すというその姿勢。いっそのこと清々しいまでである。

「見届けるぞ。歴史に名を刻むであろう大事を！英雄達の行く末をその生と死を！親愛なる彼らが紡ぐ「眷属冒險譚」を！」

ハハハッ!!と男神の笑い声が木霊した。

漆黒のゴライアス討伐から三日後。

「アランアラン！」

「んー？」

ホームでのんびり読書していた俺に、元気のいいエリスが詰め寄る。迷宮探索？装備

も修理に出してるしちよつとお休み。これが燃え尽き症候群なのかもしれない。

エリスは片手に持つ手紙を要約して読んだ。

「ペナルティはヘルメス様が肩代わりしたんだつて。覗き魔なのに意外と優しい所があるんだね」

「そだねー」

この子ちよつと刺^{トゲ}ない？

俺と同じく読書していたラクシユミーが喋る。興味が湧いたのかな？

「もしかしたら、どこかの誰かさんがそうさせたんじゃないやろうて」

「？」

「例えば、仲間がやられるきつかけになったからとかかのう」

「仲間がですか？」

おいおい、ひよつとしてバレてんじゃねえか？逆にエリスにはバレてなさそうだな。

エリスはんー、と考えて、

「その人はきつと、アランと同じお人好しなのかもしれないね！」

「ハハハ！お人好しか。それは違うじゃないのお！」

女二人の笑い声が響く。笑えねえよこつちは。

まあ何にせよ、いつもの日常が戻ってきたのは良いことだ。これから先も困難が待ち

構えているが、ラクシユミーとエリスで頑張っていかこうと思う。
今よりもっと強くならねば。

オギヤー!オギヤー!

神々とその眷属が一堂に会しての宴が始まる。主催者は「アポロン・ファミリア」で、趣向を凝らして神々だけでなく眷属も参加可能にしたらしい。なので神々だけでなく、代表として相応しいように眷属も皆着飾っていた。

それは主神のラクシユミーも眷属の俺も例外ではなかった。新品のドレスにタキシード。着慣れない衣装ではあるが、堂々としていればそれなりに似合うはず。購入した服屋の店員さんの太鼓判だからね。

ちなみにエリスはお留守番である。

「よく似合っておるぞアランよ」

「ナチュラルに心読むのやめてくれますか?」

神つてのはこういうことがあるからな、マジ勘弁。

「私はどうじゃ似合っておるか?」

「いつもよりセクシーです」

「ハハハ。めかし込んだ甲斐があったのう」

上品に笑うラクシユミーを横目で見る。

肩らへんと胸元は隠されているが、綺麗な鎖骨と腕は惜しみ無く晒し、足首まで伸びた裾には切れ目があり、それが膝上部まで伸びていた。チラリと見える太ももが何ともエロイ！

誰も家庭菜園が趣味とは思わない魅力が、女神ラクシユミーにあった。

辺りを見渡してみれば、女神が主神の殆どが腕に手を添われて歩いている。対する俺はただ隣で歩くだけ。やべっ、世間知らずがバレる！

「・・・ちゃんとエスコートした方がいいよね？」

「よいよい。気負わず自分のペースでな」

「すげえ、大人の対応だ」

「？ 私はいつだって立派な大人じゃろて」

立派な大人は胡座をかいて座らないし、風呂上がりは下着姿で出歩かないし、お酒飲む時は爺臭くなりませぬ。

そんなことを考えつつ歩く数分後。

ヘステイア、タケミカヅチ、ミアハ、ヘファイストス、それとヘルメスが談笑していた。俺達の姿を見つけた全員が挨拶をしてくれた。

「やあラクシユミー！アラン君！中層ではお世話になったね！」

「こちらこそ、じゃな。そなたの眷属達が居なかったらアランとエリスは大事になってただろう。ヘステイアだけでなく、そなたらに感謝するのじゃ」

「ありがとうございます」

俺とラクシユミーは頭を下げた。これに対する対応はそれぞれで違った。

「それじゃあ中に入ろう」

「そうだな」

俺達一行は会場に入場した。

優雅な音楽に美味しそうな食事。雰囲気的にもオシヤレと感じるか、

「・・・胃が痛い」

この後のことを考えたら純粋に楽しめそうになかった。そんな俺を見兼ねたのか、

「もう少しリラックスしなさい。それと、こういう場では顔に出さない方がいいわよ」

「あ、すみません・・・」

真つ赤な赤髪の女神から忠告を貰う。このお方はさつき一緒にいたヘファイストス様だ。

「椿から聞いたわよ。貴方、異質な装備を持っているんだってね」

「ええ、まあ」

「当然のように不壊属性が付いて使い続けても切れ味が落ちない。一人の鍛冶士とし

て気になるわね」

女神様の目付きが変わった。職人だから気になるんだろうね。

「……いや待て。あれ不壊属性デユランダル付いてたの？だから壊れなかつたのか。

「今度椿さんに見せると思うので、その時に見てみますか？」

「いいの？じゃあお言葉に甘えるわ」

ここで見せる訳にいかないよな。驚かせるし、最悪締め出される。

「——今宵は新しい出会いの予感すらある。今日の夜は長い。楽しんでくれたまえ」

いつの間にか挨拶をしていたアポロンに、男神と視線があつたのかビクツとなるべ
ル。

「アポロンも面白い計らいをするなあ」

「今日は普段と随分勝手が違うわね」

呑気に感心してる場合じゃないですよ、ヘステイア様。お宅のお子様狙われてます
ぜ。

「今夜私に夢を見せてくれるかしら？」

「っ！」

ハハハ、狙われているのはアポロンからだけじゃなかつたね。

それにしても、すごい筋肉だな。鍛えに鍛えたんだろうなあ。

「何か場違いなこと考えとるじやろ」

「滅相もない」

「くれぐれもフレイヤを見るなよ。エリスと違って、そなたは魅了が通じるんじやから」

「うつつす」

だから【猛者】に視線を飛ばしてるんです。視界の隅に捉えただけで美しさが伝わったんでね。

「——妬けるわね。熱い視線を飛ばすのはオツタルだけかしら?」

「うひゃあ!」

い、いつの間に……!音もなく近寄るな!ほ、本当にビビったんだからな! (泣)
「あらあら、驚かせたみたいね——お詫びに私の寝室に「そこまでにするのじゃ」残念ね」

間に割って入ったラクシユミーによって、フレイヤは残念そうに退散した。こつつつわ。あの女神こつつつわ!

「何だったんだいったむぎゅ!」

「よしよし、怖かったねえ。もう大丈夫じゃからなあ」

セリフの途中だったんですが、あの。まあ、正直今も怖いからお胸に頭を埋められる

と安心します。もっとこのままでおなしやすーやべえラクシユミーの母性があつあつあつ！（性癖が歪む音）

冗談はさておき、フレイヤに骨抜きにされなくて本当によかった。

去り際に【猛者】から何やら見られた気がした。期待でもされたのかな？

♪

おや、これは何のBGMだ？

「これはダンスのやつじゃな。見てみい、皆踊っておるじやろ」

本当だ。全員が全員、綺麗に踊ってるね。

「そうじゃな。私も踊ってみるか？」

上手く踊れるかなあ。

「アランは冒険者じやろ？並外れた動体視力で私の動きを捉えてみせよ」

それは無茶振りというやつす。

「・・・私はそなたと踊りたい。何たってアランは初めての眷属じやからな」

——レディ、一曲どうですか？

「フフ、喜んで」

ラクシユミーと踊った。プロが見たら下手だと言われそうだが、俺もラクシユミーも

楽しかったので別にね。

チラツと横目で見ると、ミアハ様、タケミカツチ様そして。

「ベルくうん!!」

「アイズたああん!!」

二柱の悲痛な叫びを物とはせず、ベルと【劍姫】は踊っていた。【劍姫】の美しさにあ
る意味魅了されギャー!?

「目の前に私が居るのに……随分な仕打ちじゃな?」

「す、すいやせん女神様……」

「全く、私がエリスだったら朝までコースじゃったぞ?」

え、なんでここでエリスが出てくるんだ?

「そなたというやつは……」

頭痛がするんすか?

「刺されぬよう、背中に気を付けるじやよ」

ええ……。

「ハスティア、この前は世話になったな」

「あ、アポロン……」

躍りは終わり、ベル達のもとへアポロンが歩いてきた。そして——。

「——愛しい我が眷属にこんなことをしておいて、シラを切る気かい?」

「——あくまで自分達が悪くないと言い張るか!」

「——君に、いや君達に【戦争遊戯】ウォーゲームを申し込む!!」

流れるように宣戦布告をした。それに君に、ではなく君達に、か。ダフネだったか? あいつは御愁傷様と去り際に言った。分かっていたけど、特に何もされなかったぞ。

「ラクシユミー、久しいな」

「・・・ああ、そうだな」

アポロンはベル達から視線を外して俺達を見る。知り合いなのかな。

おっとあまり近付くなよ? 用があるならそこで言えい!

「世間話はほどほどにして、君にも【戦争遊戯】を申し込むって言えば分かるかい?」

「・・・私らはそなたから嫌がらせを受けとらんぞ?」

「嫌がらせ? まさかルアンのことを言っているのかい? ハハハ! それはヘステイアの眷属が仕出かしたこと。つまらない言い掛かりはやめてもらおうか」

おいおい、いつそのこと清々しいなこやつ。

「正確に言うならば、用があるのはアラン・スミシー君個人だ」

俺?

「新たに入団した僕の眷属が君に因縁があつてね。それに決着を着けたいと言つてきたのさ」

つまり、狙っているのはアポロンではなくこいつの眷属か。その眷属はどういう立場なんだ?

「分かってないようだな。ならば紹介しよう。来たまえ愛しの眷属よ」

カツカツと靴音立てながら近付いてきたのは、

「久し振りだな。貴様に嵌められて全てを失ったこの私を憶えているか?」

眼鏡の奥にある目元には隈が浮き出ており、頬の肉がげっそり落ち、とても弱々しい印象を与えるが、その目にあるのは紛れもない殺気。気付けばラクシユミーの前に立ち身構えるほどだ。

男は不気味な笑みを浮かべる。俺はこいつを知っている。知っているのだが……。

「お、お前は——……誰だっけ?」

俺の返答に神々は盛大にズッコけた。

そんなのあり？

「・・・何て言った？」

目の前に立つ男の目付きがさらに鋭くなった。殺気と怒気、それに悪意まで滲ませる。関係のない周りの冒険者が主神を庇うぐらいだ。

「ちよつと待つて。・・・ラクシユミー、あの人知ってる？」

「知らないのじゃ。私は他人とあまり関わりがないし。てか、あんな男、一度見たら忘れないじゃろ」

「だよねえ。あんな不健康で悪人面の男、オラリオでもそういないもんね」

「アランに因縁があるように見えるのじゃが・・・」

「んー、恋人さんが目移りしちゃったんじゃないかなあ。ほら俺ってイケメンらしいし？」

「罪な男じやのうそなたは」

「いえいえ、それほど」

「誉めとらんわ」

「アツハツハ!!」

「全部聞こえてるぞ！一度ならず二度までも愚弄するか貴様あ!!」

おおっと。こりや失敬。取り敢えず当てずっぽうで言い当てるしかないか。

「冗談だよ冗談。君は裏町のマイケルだ。縄張り争いに負けたと聞いたけど、その後は順調かな？」

「違う！私はマイケルではない！」

やべつ、間違えた。

「じゃあ弟のホイケルだ。欲深い兄貴の面倒は大変でしょ」

「誰だそれは！私はホイケルなどではない！」

ええ、違うのお？じゃあ手詰まりだよ。降参だよ。

「貴様あ……！私を陥れるだけじゃなく、公の場で恥をかかせるとは……！」

陥れた？それに恥？あ、神々が肩を震わせてる。必死に笑いを堪えているのか。ごめんね。そんなつもりじゃなかったんだ。

「私は元【ソーマ・ファミリア】団長のザニスだ！貴様が主神を誑かしたせいで全てを失った！私は貴様を許さない！」

「ああ、可哀想で胸が張り裂けそうだ！現主神の私はこの子の気持ちを汲んでやりたい！因縁解消をするならば【戦争遊戯】をするしかあるまい！」

あく、こいつザニスか。よく見れば面影が……ありまくりだわ。本人だわ。てか、そういえばアポロン居たね。ごめん忘れてた。

いや、それよりさ。

「お前が全てを失ったのは自業自得だろ。神酒で団員酔わせて金儲けするだけじゃなく、悪事にまで手を染めていたんだから。完全に逆恨みじゃねえか」

「言い掛かりだ！ 私が悪事を働いた証拠でもあるのか!？」

「俺の言葉に嘘があったか？」

「ないのじゃ」

「ぐう……!」

言い負かされたザニスは苦虫を噛み殺したような顔になる。周りの人達も、ザニスの悪行に不快感を抱いているようだ。

こいつ、全部失ったのを俺のせいにして、自分の非を認めないつもりかよ。

「その話、詳しく聞かせてもらおうか！ この俺！ ガネーシャにいいいい!!」

え？

「【酒守】、我々に同行してもらおうか」

は？

「待て！ この子は私の眷属だ！ いくらガネーシャでも勝手は許さ」この男の罪を知つ

て庇うつもりなら、貴方も同行していただきます」ザニスよ、行ってこい」

「アポロン様あ!?ちよつやめ、離せ!アラン・スミシーイイイ!!またしても貴様はああああ!!」

あれれ??

「闇墜ちしたザニスと【戦争遊戯】で決着つける流れじやいの?なんで連行されてんの?」

後から聞いた話だが、復讐を誓ったザニスはランクアップを果たし、強力なスキルまで獲得していたようだ。

また、【ガネーシャ・ファミア】の事情聴取で犯罪の数々が山のように暴かれ、恩恵を刻むことを禁じられたのこと。ついでに懲役二十年。牢屋から出た後はオラリオから追放されるらしい。

「・・・俺の派閥も【戦争遊戯】をするんすか?」

アポロンはブンブンと首を横に振った。

—————

おまけ

「ただいまー」

「ただいまなのじゃー」

「おかえりなさい！」

ホームに帰りエリスの出迎えを受ける俺達。こいつに宴のことは話さない。俺とラクシユミーの決めごとだ。

「・・・エリス、ちよつと」

「? どうしました？」

「いいからいいから。アランはリビングで待つとれ。着替えるなよ」
「?」

ラクシユミーはエリスを連れて違う部屋に移動した。俺は言われたようにリビングで待った。冷えたお茶が美味しかった。

待つこと三十分。

「アラン、お待たせ・・・」

「随分長かったねえ。着替えの手伝いでもしてた・・・のか——な？」

振り向けば、普段着からドレスに着替えたエリスが立っていた。恥ずかしがる彼女であつたが、あまりの綺麗さに見惚れてしまう。

ヤバイ、なんかドキドキする。

「ど、どうかな・・・？」

「——え？あ、ああ凄く綺麗だよ。ドレス買ったんだ」

「その、ラクシユミー様がね？用意してくれてたんだ」

へくらくシユミーが……。本当に頭が上がらないな。いや本当にお世辞抜きですつつつごく綺麗だ。

スーツの俺とドレスのエリス。取り敢えずやることは一つだよな。

「——俺……。じゃなかった。私と一曲踊ってくれませんか？」

「——はい、喜んで」

♪

いつから居たか分からないラクシユミーが、あの音楽を鼻唄で再現してくれた。

エリスとのダンスは気恥ずかしかったが、いつまでも思い出に残るだろう。まあ、こんな狭い部屋じゃなくてもつと広くてきらびやかな場所ならムードがあっただけど……。。

「私は嬉しいよ。アランとこうして踊れると思ってなかったから」

「そっか。そうだよな！俺もエリスと踊れて良かったと心から思ってる」

「フフフ」

ヤバイ、エリスを見てるとドキドキする。

なんだろう、不整脈でもなったのかな？

「アポロンが宣戦布告した【戦争遊戯】は、見事人数差を覆し【ヘステイア・ファミリア】が勝利を収めた。」

俺達は参加してない。因縁を持っていたザニスが逮捕されちゃったから。ザニスというイレギュラーが無くなった今、ほぼほぼベル達が勝つので、

「じゃあ貰ってくね」

「「チクシヨオオオオ!!」「」」

賭博に参加していた。エリスもラクシユミーにも頼んでおいたので決して少なくな
い金額になったはずだ。

使い道は新しいホームを手に入れること。いつまでも男女が一つの布団で寝るのは
よろしくない。最近は変に意識しちゃうから特にね。

ともかく大金を手に入れたのは事実。酒場からウハウハな状態で出ると、

「やあアラン・スミシー。十八階層ではお世話になったね」
はい？

目の前に立つ男は一族の英雄か、それとも腹黒勇者か、はたまたアラフォーシヨタか。
彼の微笑む顔はとても不気味だった。

お前が囹になるんだよっ!!

それは【戦争遊戯】の賭け事が行われていた酒場を出てすぐのことだった。【勇者】フィン・デームナから依頼を頼まれたのは。

「ここは単刀直入に言おう。敵対する組織を討ち倒すには君の力が必要だ。僕達に協力してくれないか？」

敵対する組織とは十中八九闇派閥のことだ。一介の冒険者である俺に頼んだのは、猛毒を解毒してみせたあの回復魔法が目当てだろう。

「君の考えている通りだ。ゴライアスを倒せるほどの力を持ち、尚且つあの猛毒を癒せる君に頼みたい」

何？心読むの流行ってるの？最近のトレンドなの？

まあ、それは置いといて。

「幾つか条件があります」

「分かった。明日【黄昏の館】に来てくれ。その時詳しく聞こうじゃないか」

「ありがとうございます」

そう言つて【勇者】は帰路に着いた。

俺はこの依頼を承諾する。闇派閥に関することといえ、あの【人造迷宮^{クノッソックス}】であり、決して少なくない死者をだす。

だから運命^{正史}を変える。

「準備に取り掛かるか」

「ますばあそこだな。」

—————

「こんにちは、アラン」

「ああ、こんにちはシトリー。出会い頭にハグするのはやめて欲しいかなあ」

「アランは、嫌……?」

「嫌じゃないけど……心臓に悪いっていうか、そのねえ?」

「当たるんですよ。それに匂いに敏感なエリスに問い詰められるんですよ。怖いんですよ。」

「今日はどうしたの?」

「お前の話を聞かせてくれないか?」

「私の?」

「うん。出来ればいいよ。無理矢理聞く気はないから」

死地に赴くんだ。悔いは残したくないし、シトリリーの気持ちか軽くなればいいかなあ。

「お兄さんのことを聞かせてくれ」

「!」

彼女の顔が強張った。踏み込み過ぎたかも知れど、俺は引き下がらない。

シトリリーの友人である店員から、詳しくは教えて貰えなかったけど、『私には不可能だったけど、貴方ならきつとあの子の闇を払ってあげられる』って言われたのだ。それにシトリリーの口からたまに兄の存在を聞く。武器を造らなくなつたのはそこからだし。

知っておきたいな。この先聞く機会なら幾らでもあると思うが、同行する場所が場所だからね。お節介で自己満足かも知れど、可能な範囲で何とかしたい。

「俺に教えてくれないか? お前の過去、そしてお兄さんのこと」

「・・・アランは約束してくれる?」

「ん? 誰にも言わないことか?」

その質問に、シトリリーは違うと言った。

「多分だけどね? アランは兄の命を奪つたあの女のもとへ辿り着く。だから約束して

?」

あの女?

「――」
俺は了承した。

シトリーの過去と、約束をしたあの日から数日後。

「おいフィン！なんでこいつらがここに居る!？」

「僕が依頼した協力者だ。治癒士として……いやなんでアミッドが……？」

「それは……」

ここはダイダロス通りにある地下水路。目当ての物を見付けた「ロキ・ファミリア」は、そびえ立つ扉の前に集合していた。

「凶狼」が言うように、俺達がここに居ることを知らなかった周りの団員が驚いていた。知っていたのは「勇者」「九魔姫」「重傑」の首脳陣と主神のロキ。他は搜索で忙しくしていたので今の反応だ。

まあ、「戦場の聖女」が来ることに「勇者」は知らなかったみたいだ。困惑気味のアミッドがチラリとこちらを向いた。

「俺が個人的に依頼したんです。代金は俺が負担するのでご安心を」

「ええ。彼が絶対大怪我するので来てくれと言ったので……」

(((((【戦場の聖女】を連れ出せるこいつは何者だ……!?!))))

一同は首を傾げた。優秀な治癒士である彼女を、最大派閥でも、なんら権力もないただの冒険者が店から連れ出せるのは不可能に近い。大怪我したのなら店に行けばいいだけだし。

「よく、ディアンケヒトが許可してくれたなあ……」

「もちろん反対してましたが、彼の一声で……」

(((本当に何者だこいつ……?)))

ディアンケヒトは金の亡者であることは周知の事実。金を持っていなさそうな冒険者に虎の子を貸すとは思えない。

疑問が深まる一方だ。

「まあ、君が居てくれるのは心強いよ。アラン、アミツドの配置はどうする気だい？」

「彼女はここで待機させます」

「それはなんでや？」

「このアジトが未だ謎だからです。不明点が多いこの状態で連れて行くのは危険です」

彼女を失うのは痛い。オラリオにとっての損失と言っても過言ではないほどに。

【勇者】も賛同してくれた。

「アランは僕達と、アミツドはリヴェリア達とここで待機。怪我人が出たら頼むよ」

「はい」

そんな話をしてしていると……。

「開いた……!?!」

それなりの重量がある扉が開いた。奥に誰かいたような……?!

偵察を頼まれた【凶狼】とクルスと呼ばれた青年が戻って報告をする。モンスターと人は不在だったけど、この中はまるで迷宮だったと、彼は自身の見解を述べた。

「君の意見を聞きたい。敵の狙いは何だと思う?」

「俺ですか?」

「ああ。君ならどうする?」

俺ならどうするって?それなら決まってる。

「貴方を殺します」

「[[[!!]]]」

全員の顔が強張……いや怒りか。素直に答えすぎたな。【怒蛇】が今にも飛び付いて来そうだし、何なら剣を抜こうとしている人がチラホラ見える。

誤解を解こうか。うん、解いた方がいいな。まだ死にたくない。

「理由を言えば貴方がこの派閥の頭だからです。敵に回ったら厄介な【勇者】を始末すれば、優秀な指揮官が消えると同時に士気が下落する。絶対的な信頼感が貴方にはあ

る」

「なるほど・・・なら真っ先に狙われる僕はどうするべきかな?」

「そんなの決まっています」

——囹（ア）になつてください」

俺は微笑んだ。

悪魔の如し所業に、周りはドン引きした。

絶対に全員を助ける策を思い付いたからね。最悪死ななきやいいんだ、死ななきやなあ?」

親指が疼く。

かつてない痛みとなつて。

モンスター（ア）の波が割れる。

道を作るように、かしづくように。

歩みだすのが。

王の代行者であるかのように。

（赤髪の怪人!?!戦闘力が上がっている!あり得ないほどに!!どれほどの魔石を食べれ

ば!?)

「十八階層の借りを返すぞ」

魔法を使わなければ負けるという刹那にも満たぬ迷い。それが決定的致命に

——な……ら……な……か……つ……た……。

「^{モルブル}強臭袋だオラツ」

「!! ぐあ!!」

剣は振り下ろされなかった。いつの間にか接近していたアラン・スミシーが阻止したからだ。

顔面という至近距離から激臭を喰らった怪人は、視覚と嗅覚をやられた。

「いやー、これって催涙弾みたいに目もやられるから取り扱いに神経使うんだ。みんなも気を付けてね」

「誰に言ってるんだい? でも助かった——よ!」

「ぐう……! チツ!」

【勇者】の追撃を躲し、赤髪の怪人は扉の奥へと逃亡した。残されたのは新種と——

「何やってんだよおおおお!! 作戦が台無しじゃねえかああああ!!」

【殺帝】ヴァレッタ・グレーデ。かつて暗黒期に暗躍した主要幹部の一人であり、冒険者や一般人問わず殺戮の限りを尽くした最低最悪の悪人。

「てめえ、何者だ・・・!?!」

「ただの冒険者だ。新人のな」

そしてヴァレッタこそ、シトリーの兄を殺害した女である。

「これで終わりだよ、ヴァレッタ。大人しく降参してくれないか?」

「糞があああ!!」

人工迷宮に惨めな女の断末魔が響いた。

—————

今週の「三択からどうぞ」は、

①【限定強化】

② 雑巾

③ 槍

さて、オリ主は何を選んだでしょうか?

高み

散らばり砕けちった魔石に、モンスタ―消滅時に舞う灰が辺り一面に広がっていた。そんな場所には、心臓近くに幾つもの剣が突き刺され、倒れている女が一人。神から得た恩恵の力で絶命できず、また治療できないせいで苦しんでいた。

「ガハッ、ゴホッ・・・ハハ、ハハハ、アツハハハハハハハッ!! てめえらああああ!!こんなこととして只で済むと思ってるのかああ!?私を殺した所でてめえらが死ぬことには代わりないんだぜえ?フイ~~~~ン?今も苦しんでんだぜお仲間があ。助けに行かないのかあ?優しい優しい勇者様よお?」

「こいつ、まだ生きてるのか・・・!?」

誰かが呟いた。その言葉には恐れが含まれていた。だって死ぬ寸前の女が嗤い、怒り、愉しんでいるのだから。

それでも【勇者】は通常運転だった。

「君の言う通り苦しんでいるのなら助けに行くさ。君から奪った鍵があるからね」
手にはアルファベットのDが刻まれた球状の魔道具が握られていた。これこそが、こ

の迷宮の扉を開く文字通りの鍵である。

「ゲホツ、それがどうしたあ？この迷宮は馬鹿みたいに広えのにどうやって探るつもりだあ!?まさか、さつきみてえにその男を頼る腹か？」

その男。つまり俺である。まあ、何にせよ。

「安心しろ。だいたいこの位置はスキルで把握してる。鍵がある以上、サクサク進めるからな」

「そういうことだ。全く、嫌になるよ。彼が居なかったら僕達は君の思惑通り死んでいたかもしれないだからね」

それは【勇者】の心の底からの言葉。事実、俺が不参加だったら、怪人に斬られ分断され死者をだす。今は自分が甘かったと自責の念に囚われてるのかな？

「じゃあねヴアレツタ。あの世で待つていてくれ。最も、すぐには逝けそうにないから気長にね」

「!! フィイイイ「黙れ」ブギヤ!?!」

名前を呼ぶ前に【凶狼】が頭を踏み潰した。シトリー、お兄さんの仇は討つたよ。それにしても・・・おええ、あまりのグロさに吐き気がする。

「ハハ、彼が吐く前に退散しようか」

だからナチュラルに心読むのやめて・・・いや、多分俺の顔色はすっごく悪いと思う。

この人じゃなくても察してるね。

あ、背中撫でてくれるの？ありがとう、気持ち吐き気が治まっオロロロ!!

「結局吐くのかよ!!」

これはヴァレッタ・グレーデの供え物ってね。

—————

一方その頃。

「アリア、貴様が来るのを待っていたぞ」

「私はアリアじゃな．．．目が充血してるよ?」

涙目で苦しそうな怪人に、アイズは頭の上に疑問符を浮かべた。

—————

俺のスキルと鍵の力で次々仲間と合流し、

「チツ、ここまでか．．．!」

「待てやああああ!!なんで充血してんだてめええええ!!」

【劍姫】と怪人が戦っていた場所に辿り着いた。小説だと斬られてなかった?

「よく無事だったね」

「うん、なぜか苦しそうだったからかな．．．?」

「「「．．．」」」

「……んっ？」

まあ、至近距離で強臭袋モルプルを喰らったらね。目に入ったらそりや充血するよ。今は怪我人癒してる最中なんで、鬼畜を見るような視線を向けないで。

それにしても、この呪詛中々強力やね。ランクアップを果たした今の俺でも完全に癒せねえわ。これ癒せる聖女様すげー！

「俺の魔力じゃここらが限界みたいっす」

「それでも楽になりましたよ！後は止血すればいいだけだし

！」

「精神回復薬を飲んでおいてくれ。君に倒れられたら終わるからね」

そうだねえ。回復と索敵を担当してるもんね。実質このパーティは俺を中心に回ってるよね。

「じゃあ撤退しましょう。あの方向に最後の一組がいますから」

「お主の索敵は範囲が広いんじゃないのう」

「遠く離れていたら大まかな位置しか掴めませんけどね」

「充分過ぎるよ。よし、部隊を引き上げる——」

【勇者】は最後まで言い切る前に止まってしまふ。親指が尋常じゃないくらい痛みだしたから。

それを皮切りに、ドシンドシン！と地面を勢いよく踏み抜く重低音が近付いてくる。それも物凄い速さで。

「これは不味いのう……！」

「こいつはやべえ……！」

「うわぁ」

次に「重傑」に「凶狼」、気配を感じられる俺が反応する。尋常じゃないほどの存在感を放つそれは、

「逃げろおおおお!!」

超硬金属を易々とぶち壊す質量を持つ、「穢れた精霊」と呼ばれる新種のモンスターで天の雄牛。

その特徴は、

『アリアアアアア!! 私ト一ツ二ナリマシヨオオオ?』

モンスターの常識を覆すほどの知性を持つ。

「走れえええつ!!」

「あれは遠征で見た同系統のモンスターです!今の自分達だと勝ち目が薄い!」

「! 団長! 前方から新種の群れです!」

「囲まれたか! 不味いねこれは……」

後ろには精霊、前には食人花の大群。絶望的な状況に――

「俺と【勇者】であのモンスターを討つ」

「「「――!!」」」

「状況分かってんのかてめえ！」

勝算が少ないが、今は治療中の怪我人を運んでいる。中には意識が朦朧としている人おり、精霊に割く戦力はない。

「僕達二人だけでできるのかい？」

「正確には貴方だけが戦いますけどね。作戦は――」

「――その提案乗ってあげるよ！僕は君に賭ける。ガレス！部隊を頼んだ！」

「フィン！それでよいのかあ!!」

「ああ！最後の最後まで彼の迷惑通りになるけど……僕は今日冒険をする!!」

「ガハハハツ!!ホームに帰ったらお主の冒険を聞かせて貰うからな！」

そう言つて部隊は離れた。中には反対する者もいたが、渋々指示に従つた。

ちなみにあの人達の進行方向にリーネさん達がいる。怪我をしているだろうが、ヴァレツタが死んだ今、彼女らを追撃する者はいない。

「魔槍よ、血を捧げし我が額を穿て」〔ヘル・フィネガス〕

フィン・デイルナの魔法。それは能力を大幅に引き上げる強化魔法であり、その代償

に判断力を失い狂者となる狂化魔法でもある。

五十九階層と違い仲間もおらず、魔法で敵に隙を見せる愚策。しかしここには、

「【癒光の羽衣】！それとコレあげる！」

「(本当に狂化が抜けた!!それとこれは槍?どこから出した?いやそれよりも——
手に馴染む!!)」

後ろには状態異常を癒す治癒士がおり、狂化も例外ではなかった。この時フィンを知る由もないが、この槍はスキルで獲得したものであり、売り払って新居に必要なお金にするつもりだった。だからこの状況は狙ったわけではない。

偶然だったにせよ、結果的に繋がったから良しとしよう。

——金の槍を掲げ。

——白光の衣装を纏い。

——巨悪を見据えるその姿。

同族がこの場に居たのなら口を揃えてこう言うだろう。

——^{ファイア}一族の光が居ると。

「これは俺からの八つ当たりだ。死ぬほど恨め。お前にはその権利がある」
フィン・ディムナは(口調は乱暴だが)狂気に吞まれず漲る力だけを纏う。そんなあまりにも強い殺気に、

「!! 生意氣生意氣生意氣生意氣生意氣生意氣生意氣生意氣生意氣!!」
壊れたオモチャのように、あるいは恐怖を誤魔化すように精霊は混乱した。
暴力の化身と化した【勇者】と、力及び機動力に特化した【穢れた精霊】が衝突した。

後日、一つの報せがオラリオを湧かせた。

——【勇者】フィン・デムナ、L.v.7到達。

小人族がどう思ったかは知らないが、少なからず影響されただろう。

だって、ダンジョンに向かう多くの者がサポーター用のバッグでなく、彼の象徴とも
言える武器楯を手に持っていたのだから。

—————
あの侵攻から帰ると待っていたのは、

「アランお帰り。どうだったの? 【ロキ・ファミリア】のお手伝いは?」

「お帰りなのじゃ。さぞかし過酷だったじやろうて。所々服に傷がある」

殺伐とした戦場ではなく、エリスとラクシュミーが居るいつもの日常。それが堪らな

く嬉しくて。

「ただいま、二人とも」

「!! や、ヤバい！微笑みの破壊力が・・・!!?」

「き、気をしっかり持つのじゃ！油断するとコロツと逝っちゃうぞう!!?」
何言ってるか分からないが、俺の口元は自然と緩んでいた。

マジ勘弁っす

原作通り【イシユタル・ファミアリア】は崩壊した。【勇者】はイシユタルが闇派閥と繋がり、さらに例の鍵を持っていると予想するが、たしか副団長タンムズからフレイヤに渡っているはず。

無駄足になるだけだから探さなくていいよ。

アラン・スミシー（16） Lv. 2

力：F 3 5 6

耐久：G 2 4 0

器用：G 2 5 1

敏捷：F 3 0 3

魔力：E 4 1 9

“発展アビリティ”

幸運 H

”魔法”

” スキル^グ【言語理解】
コミュニケーション

・ 会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞで】
サード・ワッド

・ 三つの中から一つ獲得

・ 選んだモノの貯蓄と引出し

・ 一週間後に再選択

貯蓄(1・ 箆手2・ レイピア3・ 【刀剣乱舞】4・ バンダナ5・ 【癒光の羽衣】6・ 【全

力投擲】7・ 槍(返してもらった)

【断捨離還元】
リサイク

・ スキルにより入手したモノを捨て自身の能力値に還元する

・ 価値によって変動

エリス・キヤルロ(16) Lv. 2

力：D563

耐久：D520

器用：B712

敏捷：B 7 8 5

魔力：C 6 3 5

〃 発展アビリティ

狩人H

〃 魔法

〃 速度^速増加^ま〃 【加速^{アッセル}】

〃 スキル

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

【貴方^{フォー・ユー}想奏】

・ 特定の人物を想うほど効果向上

・ 魅力無効

あの戦場から帰ってから後日。俺達はステータスを更新した。【人工迷宮^{クノッソス}】を乗り越えたのにあまり成長してないと思うが、上位の経験値はそれなりに貯まっており、どれ

か一つでもアビリティD評価にすることと、あと一つ偉業を達成すればランクアップするとラクシユミーは言っていた。

また、俺とは対照にアビリティがかなり成長しているエリスだが、まだまだ上位の経験値が貯まってないようだ。だから偉業を積まない限りはランクアップができない。

「新居はどうするのじゃ？賭けでそれなりに儲けたじやろ」

「それが・・・」

俺はありのままを伝えた。賭博で得たお金は全て「ディアンケヒト・ファミリア」に渡したことを。

「仕方なかったんです！秘薬もアミッドも居なかったら死人が出てたんだから！事後報告でホント申し訳ないけど、予想以上にお金が掛かったんですううう!!」

だから俺は弁明を兼ねて謝罪した。D O G E Z Aである。全て許されると武神が言った、最終奥義^{極東風謝罪}。我ながら綺麗に決まったと思う。

「・・・頭を上げるのじゃ。賭博で溶かしたんじやなくて、人のために使ったんじやろ？ならば責める道理はない」

「うん。お金から貯めればいいしね。それにこれからも一緒に寝れるし・・・」

「ふ、二人とも・・・!」

女神が、ここに優しい女神達がいる・・・！エリスが小声で何やら言っていたが許さ

れたらしい。俺の心は幾分か軽くなっ——

「アミッドって【戦場の聖女】だよな？いつから下の名前で呼ぶようになったの？」
胃が痛くなった。

それには事情があつてだな・・・

「どんな事情？ねえ？私に教えて？」

ひえ。

た、助けてラクシユミー・・・！

「お茶が美味しいのじゃ」

ラララ、ラクシユミイイイイイツ！！

「ごめんくださーいっす」

「だ、誰か来たみたいだなあ〜！待たせると悪いから行つてくるね！」

俺は逃げるように玄関まで走った。ナイス来客！お前がナンバーワンだ（ベ〇ータ

風）

が

「・・・そんなに嫉妬するなら告白すればよかろうに。好きなんじやろ？アランのこと

「……はい。私はアランを愛しています。彼が他の女の子と仲良くするのは堪らなく嫌だ。でも、告白して振られたり、強引に迫って今の関係が壊れるのがすつごく怖いんです」

「それは……杞憂だと思ふんじやがなあ。アランはきつと受け入れるぞ?」

アランは自分よりも仲間を優先する。知り合つて間もないエリスに魔導書を渡すぐらいだし。

「そこに愛はありませんよ、きつと。心に残るのは虚しさだけです。だから私を好きになつてくれるよう彼を振り向かせます! 目移りなんかさせませんから!」

こいつはこいつで一途だ。愛なんて恋人になつてから育めばよいだろうに。恋は盲目なんじやろか。

「まあ、励むとよいわ」

「もちろんラクシユミー様は第二婦人です!」

「ぶふうつー!?!」

飲んだお茶を吹いた。

—————

「以上で報告は終わりつす。団長から『君のお陰で初心に、いや、目指したいものを再確認できた。心から感謝する』と言つていましたつす! 自分も仲間を助けてくれたこと

に礼を言わせて欲しいっす!」

「いえいえそんな」

そんなに感謝しないで欲しいっす!俺は原作知識をフル活用したただけだから!

「それとこれをどうぞっす」

「バッグ?」

「その中には今回の報酬と、アランさんが『ディアンケヒト・ファミリア』に依頼した分のお金が入ってるっす」

は?待て待て。依頼金を知ってるのか?かなりの額になるぞ?そこに報酬が加わったら・・・やべえ返さな——

「返品不可なので、自分はそれじゃ!」

「ちよつ待つ・・・速!?流石L.V. 4だな!『超凡夫』すげえ!!」

感心してる場合じゃない。取り敢えずリビングに戻るか。

「ぶふうっ—————!?!」

いや何やってん?

幕間 数万年後の君へ

そこはかつて広大な都市があつたとされる古代遺跡。

雑草が整備されていたであろう道路を突き破り、人が生活していた建物からは蔦が伸びていた。

建物の中には城と見紛うほどの豪勢なものもあり、その城まで歩き疲れるほどの庭もある。

そんな都市で一際目を引くのが、半ばからポツキリ折れた“塔”である。その塔が健在ならば現代の物より遙か高く、研究者の見解ではまず再現不可能なのだとか。

その塔は都市の端から端まで届く勢いで倒れており、数百年前の戦争で折られたとされる。

その時にはもう都市としての役割を終えていたので、一般人は生活しておらず被害者は当然いない。

昔の人がなぜここを襲撃したのか不明である。一説には八つ当たりだとされる。この都市にはあらゆる説がある。

曰く、怪物が誕生する洞窟があつたとか。

曰く、そんな怪物と戦う職業があつたとか。

曰く、全ての英雄伝説はここから生まれたとか。

曰く、曰く、曰く。

昔つからある説は信憑性があるものもあれば、眉唾物であるものまで存在する。

信憑性があるものは、動物の化石である。人型の化石もあれば、近場の湖で発見された竜型の化石もある。現代ではまず見ない生物なので、ここから——いや、どこかの洞窟で誕生したと考えられている。だってこの都市にそんな洞窟発見されてないし。

眉唾物のものは、神がいた。最近発掘された書物の中には神々から力を授かつたと記されていた。人々が作つた神話によくある話だし、神を信仰する宗教なんてさらにある。神ではなく、占い師的な存在を信仰してたんじゃないか？ いわゆるプラシーボ効果的な？これが有力である。

この中に正解があるのか、ないのか。それとも全ての説が本物なのか、それとも偽物なのか。

今になつては不明だが、調査で何か分かるかもしれない。

匙を投げ出した様々な分野の学者に代わり、この俺、アラン・スミシーが見つけてやる！ 学校に提出する卒論のため——もとい、研究旅行を兼ねてやって来た。

都市の名前は「オ・ラ・リ・オ」。なんだか懐かしい響きだなあ、と昔から気になっていた都市。

史実によればおよそ数万年前に栄え、世界の中心とされた都市国家である。

——意気込んだはいいが、「白い妖精」と呼ばれるお化けが出現する噂を思い出し、今まさに後悔している。

—————

これは記録にして、誰かの記憶。

一人の青年が体験した物語。創作の定番である転生を果たし、神秘的な女神と出会い、恐ろしいモンスターと戦い、生涯の恋人と愛を深めた人生譚。

物心付いた時から少しずつ、頭がパンクしないように気遣いながら、情報が流れ始めた。

笑って泣いて驚いて。

アクション、ファンタジー、コメディ、ロマンス、サスペンス。色んなジャンルを詰め込んだような物語に、私はいつもハラハラドキドキしていた。

その物語はついに佳境へ。主人公が老齡のお爺さんになり、愛した人達は随分前に亡くなっており、自分が寝ている布団の周りにはたくさんの人達に囲まれている。その中には女神様はもちろん、息子夫婦に孫夫婦、幼い曾孫もいる。

あの息子がこんな大きくなってなあくなんて、保護者面している私がいる。そうして青年もとい、お爺さんは呟いた。

『スキル』

【スキル】という三文字。これは一週間に一回呟く言葉であり、現代ではあり得ない超常的な力を実現するもの。

その効果は表示される三択から一つだけ選ぶ能力。選んだモノは物体として現れるか、自身の力として反映されるかのどっちかだ。

今回は何も出てこなかったたので、恐らく自身に反映される系のモノ。

お爺さんはそれに満足したのか、薄っすらと開いていた目が静かに閉じた。

そして——息を引き取った。それがこの物語の完結である。

私は泣いた。自宅でかなり泣いた。小学校の卒業式でもこんなに泣いたことはなかった。目が腫れてズキズキと痛むまで泣いた。

泣き止んだ私がつた行動は、

聖地巡礼。調べた限りこの物語はフィクションではない。なぜなら実際に存在する

からだ。存在するといっても魔法やスキルではなく、主人公が生きた都市が。

その場所は「オラリオ」。今や荒廃した都市国家で、昔は世界の中心だった迷宮都市である。

そう言えば卒論に手を付けてなかったから丁度いいな、なんて打算的なことは考えてないよ？ 本当だよ？

私は取り敢えず必要な物をバッグに詰め込んで、出発日を設定する。女一人の旅は無用心が過ぎるけど、テントじゃなく車中泊だから幾分か安全か。

「……まあ、頑張るか」

ちなみに私の名前はエリス・キヤル口。主人公が愛した女性と容姿も名前も瓜二つである。

ツンデレの需要

新居に必要な資金が手に入り、どんな場所に住みたいかワイワイ話している時、「凶狼」ことベート・ローガが家に来た。

何でも、閨派閥の手掛かりが欲しいのだとか。敵を知ることはいいいことなので、何か喋れることがあるかなあ、なんて考えて疑問が浮かぶ。

「一人だけなんですか?」

仲間は一緒じゃない?

「別にいいだろうが、そんなこと・・・」

おや? 何この反応?

確か外伝では亡くなった団員に暴言吐いて追い出されていたはず。

はっはーん。

「もしかして、追い出されました?」

「!?」

ピーンと尻尾が上を向く。顔を見れば凶星を突かれた表情をしている。

追い出された理由は恐らく、

「『ハッ！雑魚に助けられて何喜んでんだ。てめえの身一つ満足に守れねえなら巣穴から出てくんない!!』とか？」

「ウグツ?!」

当たりかよ。

俺は目の前で悶える狼に呆れの視線を送った。

ちなみに、

『訳』この先の戦いはもつと過酷になるから、他派閥のあいつに頼ろうとか思うな。上級冒険者だとしても敵は厄介なのでホームに居てください』

これがベート語の翻訳文。

「追い出されたけど何もしないわけにもいかず、手掛かりでも見つけて帰ろうって魂胆か」

「て、てめえ……!」

どこまでお見通しだとか、フィンを相手しているみたいだとか思ってたそう。

(こいつ、どこまでも見通してきやがる。クソツ、フィンを相手しているみたいだ……!)

貴方が分かりやすいだけです。

「手掛かりは歓楽街か酒場、アマゾネス辺りが持っていますよ」

「それを早く言ええっ!!・・・それと、ありがとよ」

あばよ、と言いながら帰った。

分かったことは、ベート・ローガは拗らせツンデレだということだ。

それはそれとして、教えた手掛かりの先に居るであろう、レナちゃんによろしくな(愉
悦)

「あの」

「？」

「ベートさん、ここに来ましたか・・・？」

「ん」

帰った方向に指差した。

—————

最近、

「やあ！」

「「「ギヤオ!?!」」」

「とお！」

「「「グキョ!?!」」」

「たあー！」

「「「ゲギヤ!?」」」」

エリスがヤバイ。

十八階層までほとんど一人で終わらせている。単体だろうが集団だろうが、強化種や異常事態だろうが。たった一人で終わらせており、俺は専らサポーターみたいなことしてる。

本人曰く、動きが最適化されてすつごい調子がいいのだとか。レイピア貸してと言われて渡したら、

ズバツズバツズバツズバツズバツズバツズバツズバツズバツズバツ!!

断末魔を上げる前にモンスターをみじん切りにしていた。

・・・あれ?あの動きってもしかして。

「俺の【ソード・ダンス刀剣乱舞】か?」

「うんそうだよ。アランの動きを真似してみたら型に嵌まったみたいなんだ。同じようなスキルが欲しいけど中々出ないんだよね」

さらつとヤバイこと言ったぞこいつ。俺はスキルに頼ってるのに、こいつスキル無しかよ。

・・・そういえば天才肌だったな。忘れてたわ。

「おいお前らー！」

「?。」

ダンジョンで冒険者に話し掛けるのは御法度・・・あ、気付けばここリヴィラか。

「ファイヤーバードが群れで現れやがった！ボールス達の援護に向かつてくれ！」

「どうする？行く?。」

「・・・行こうか。放っておくわけにはいかんし」

この街の頭領ボールス筆頭に冒険者達との関係が悪化するのはい避けたい。

あゝ、でもなあゝ。ファイヤーバードかあ・・・。

「? アラン?。」

「どうした?どこか調子悪いのか?。」

「いや、何でもない。俺達もとつとと参加しよう」

行きたくないなあ。原作史上特大の爆弾を抱えて胃痛が酷くなるやつだし。ベル達だけじゃダメえ?

余談だが俺とエリスの前に現れたファイヤーバードは全てエリス一人で屠った。

俺も回復魔法で援護したもん。本当だもん。

“ダンまち”はいつこのすば”とコラボしたんだ？

「くんくん、アラン」

「ん？」

「あつちにベルがいるよ？でも、モンスターと一緒にだ」

ファイヤーバード戦でエリス無双が行われた数分後、彼女の嗅覚がベルを発見した。当然俺もスキルで発見したが、あえて言わなかった。そもそもだいたい距離離れてるし大丈夫かなって。

あの距離で匂うなら、至近距離にいる俺も匂っているはず。一応気を遣っているけど・・・やべえ、臭くないかな。

「アランは大丈夫だよ。それより行こう。久しぶりに会いたいし」

「俺ってそんなに分かりやすい？あ、待って引つ張るなって」

力のアビリティに差が開いているので抗えず、ズルズルと引こずられる形で連行される。

「!? アランさん、エリスさん・・・！」

「・・・よお、元気してたか？」

「久しぶりだね、ベル。みんな元気にしてる？」

サラマンダーウールを被されている小さな子を庇うように、ベルは前に出た。少し、いやかなり警戒している。

俺は知らぬが仏とばかりに話を振らないようにしていたが、それを破るのがエリスクオリティ。

「ねえベル。その後ろのさ、モンスターだよね？」

「!! ち、違います、この子は——」

「獣人の鼻、舐めてる？」

エリスの言葉に鋭さが混じり、そして腰の武器に手を伸ばした。それを見たベルの顔はどんどん曇る。

「モンスターなのに、なんで倒さないの？なんで自分の装備を着させてるの？お姉さんに教え「そこまで」あうっ」

頭を軽く小突いた。全然痛くないよね？俺より耐久高いんだし。だからそんな目で見ないでエリスちゃん。

いや、そんなことどうでもよくて。

「モンスターを庇うとどうなるか分かってるよな？悪評が広まるならまだいいが、最

悪オラリオから追放されるんだぞ」

「っ!!・・・はい」

エリスはわざと悪役になったのだ。誰かに見つかる前にモンスター始末する。例えベルから恨まれたとしても。

多分、やつと解放されたリリのためなのかな。もう不幸にさせない! 的な。

事の重大さを痛感したベルは俯くが、

「・・・理由を言ってみろよ」

「え?」

「お前のことだ。何かあるんだろ?」

「アラン、さん・・・」

あんなベルを見てられなかったから声掛けたけど・・・何やってんだ俺ええええ!!

エリスもラクシユミーもいるんだぞ! これに関わるのはマズイだろ!!

「実は——」

「モ、モンスターが喋った!?!」

「おいおい、どうなってんだこりゃ・・・」

あの後、リルルカ達と再会した俺達は、モンスターが喋ったことに驚いた。あ、春姫さんチツス。エリスさん、俺を睨まないで怖いっす。

俺は原作で知っているが、こう目の前で喋られると知ってても驚く。ヤバイねこりや。

「・・・これについて、どうお考えですか？久しぶりのアラン様は？」

「どうってお前な・・・イレギュラーだろ」

「分かりやすくして説得力あるお言葉をどうもありがとうございます！」
まだ怒ってます？いや、こんな状況だから腹が立つても仕方ないか。

「取り敢えず帰ろう。留まるわけにはいかないだろ？」

「そ、そうですね！みんなもそれでいいかな？」

ベルの言葉に全員同意し、俺達はこれから一緒にパーティとして同行することになった。

ちなみに、原作通り名前をウィーネにしたそうな。

—————

「むんっ！俺が、ガネーシャだああああ!!」

「あ、そつすか」

「おい、うるさいのじゃ」

「冷たい!? 塩対応に俺、悲しい・・・」

【ガネーシャ・ファミリア】に俺とラクシユミーは訪れた。もちろん情報収集のためである。

「単刀直入に言います。喋るモンスターとか見たことありますか？」

確信めいた発言を繰り返した。

—————

「ヒヒ、おいお前ら」

「？」

「(うっわ)」

アクセルの冒険者カ○マさん、もといジャージ姿の男神が現れた。そういえば原作でも出くわしてたな。

「喋るモンスターを知ってるか？」

「!？」

「・・・逆に聞きますけど、貴方はあるんですか？あるからその質問をしたんですよ？」

「ヒヒ、それはどうかなあ？」

「(こ)までくれば気色悪いな(こ)いつ。」

「質問を変えるぜ？」

「これ以上イカれた神に付き合いたくないんですが」

「フヒヒヒ！面白いなあお前。俺好みだ」

やつべ、つい悪態付いちまった。それにしてもきめえこいつ。

「じゃあ「やあベル君、アラン君」ちっ」

遮る形で現れたのは男神ヘルメス。何でだろう、こいつが神に見える。

ヘルメスは君たちは行きたまえ、と帰宅を促し、俺とベルは当然長居したくなかったのでササッと撤収した。

「どうしましょう？」

「時の流れに身を任す」

ギルドからもうじきクエストだか、ミッションだかがあるはずだ。それしかない。まあ、その時は頑張つてね。

後日。

『ラクシユミー・ファミリア』及び『ヘステイア・ファミリア』両派閥は二十一階層へ目指せ』

なんで俺達もだあああああ!!

君が一番綺麗だよ

「リリスケ、確かにここなのか？」

「ええ。目的地に辿り着きましたが……」

ギルドからの命令により、俺達は二十一階層へとやって来た。俺達両派閥は未到達ではあるが、L.V. 3のベルを始め、L.V. 2の俺、エリス、ヴェルフ、命が四人もいる。それに、春姫の魔法で底上げ出来る。正直、過剰戦力だと思う。

そんなこんなで地図が示している場所に来たものの、周りには人間より大きな水晶があるだけで、それ以外何らかの痕跡一つなかった。

もう一度と、リリルカは二十一階層を見回ろうと提案したが、

「ここで合ってるよ。ヴェルフ、水晶壊して」

「水晶って、これのことか？」

「そうそう。ドカンと一発頼むよ」

ヴェルフは背中に仕舞っていた大剣を構え、上段から振り落とす。

水晶は勢いよく破壊され、

「こいつは……!」

「まさか、未開拓領域ですか……?」

奥へと繋がる通路が姿を現した。未開拓領域とはダンジョンの中で未だ発見されていないエリアのことであり、それをギルドに伝えると報酬を貰えるとか。

未開拓領域は発見が困難だからこそ、こんな場所に何かを隠すのに打ってつけなのだ。

「凄いやアラン!よく分かったね!」

「隠したい物をバレル所に置かないよね」

みんなが感心して俺を褒める。スキルにたくさんのもんスタアの反応があったし、何より原作知識によるところが大きい。

チャホヤされるのって正直気持ちいいよね。完全に癖になってるわ。

「んじや、気を引き締めて行くよ。何かあるか分からないからな」

キリツとキメ顔を作り、おう!はい!とみんな言って俺の後に続いた。もうやめて、気持ちよくなってくるのおおお!!(キモい)

—————

「久しぶりの客人だぜみんな!宴の準備をしろ!」

赤い鱗を纏うリザードマンの声掛けで、多種多様なモンスター達が一齐に準備をします。

ベル達はポカーンとした表情になる。当然である。さっきまで本気のバトルを繰り広げていたのだから。

「あの……」

「ん？」

俺に話し掛けて来たのはセイレーンのモンスター。この人はさっき、俺とエリスの二人掛かりで相手した。流石Lv. 5相当。かなり強くて、こちらの攻撃らしい攻撃といえばエリスがかすり傷を付けただけだった。

名前は確かレイだっけ？容姿が人に近くてセイレーンの異端児だからそうだと思う。

そして何より……

「デック……ごほんごほん、えっと、何か用？」

「私達を恐がらないんですか？貴方だけ他の方達と反応が違いますから……」

言われてみんなを見る。今のところ友好的な反応を見せる人はおらず、少し警戒しているっぽい。

俺がそんな反応をしないのは、ある程度知っていたからだし、この世界の住民ではないことが大きいだろう。某スライムが主人公のアニメを見てたし。

「俺は差別とかしませんし、それに貴方みたいな綺麗な人を恐がる人はいませんよ」
前世では女性と縁が無きすぎて恐れの対象だった。だが今世では身近にラクシユ
ミーとエリス、シトリーという美女、美少女が居る。そのうちの二人と一緒に寝てるん
だぜ？信じられるか？

おい、リリルカ。小声で変人って言うな。聞こえたぞ。

「き、綺麗・・・!?わ、私がですか？」

「そうですけど・・・」

え、なんで赤く・・・やべつ、目の前の相手を綺麗って言っちゃまった！絶対キモがら
れるやつ！

「ふくん？」

「ど、どうしたエリスさん？」

いつの間に横に居たんだよ！環境に溶け込みすぎだろ！

「私には綺麗って言ってくれたこと・・・あるね。でも一回だけだよな？今の私には
言ってくれないの？」

「だって、お前は綺麗って言うより可愛いの種類じゃん。あの時はドレス姿がよく似
合ってたから綺麗だと言ったんだよ」

「!! ふ、ふくん。そうなんだ・・・私って可愛いんだ」

やべっ、またやつちまった！気まずいなあもう！

「ねえリリ、あれなんだろ」

「アラン様は思ったことを素直に言い過ぎたことに悶えて、エリス様は他の女性を褒められて不機嫌になったけど、その後不意打ちで褒められて照れたのでしよう」

「なるほど」

「冷静に分析するな（しないで）！！それと納得するな（しないで）！！」

「おっ！あの二人息が合ってるな！」

「お二方は好き合っていると、そういうことでしょうか？」

「へえっ！ロマンティックだねえ！」

「~~~~~っ!!」

やめて！俺達のライフはもうゼロよ！

「初めまして・・・いや、何だこれは？」

黒衣を纏う謎の人物が来るまで弄られた。

お、お前!

黒衣の人物もとい、愚者^{フェルズ}と名乗る人物が登場したことにより、宴は終了した。彼? 彼女? から一通りの説明をしてもらうためだ。

知性のあるモンスタを「異端児^{ゼノス}」といい、ギルドの創設神ウラノスはフェルズやその他の協力者と共に彼らを保護しているとのことだ。その協力者とはあのガネーシャ。都市の治安維持を担当し、前回開催された「怪物祭」は、彼らとの共存を目的としているらしい。俺やラクシユミーはあの神から教えてもらった。

「ギ、ギルドが!?!」

「ガ、【ガネーシャ・ファミア】もでございますか・・・?」

これにはベル達は驚いた。

まさかギルド（厳密にはウラノス）と【ガネーシャ・ファミア】がこんな秘密を抱えているとは思わなかったからだ。もしバレたら組織の信用が急降下し、民衆の不満が一気に爆発するだろう。改めて聞くと、とんだリスクを抱えてんな、神ウラノスとガネーシャよ。

「モンスターを倒すことに躊躇わないでくれ」

リザードマンの【異端児】リドが全員に告げる。その中で特に、躊躇の色を見せていたベルの心に刻まれた。これからはもう大丈夫だろう。

全ての話を聞き終わり、その帰りの際にウィーネが離れ離れになることを嫌がったが、俺達はまた会うことを約束し、一応は納得してくれたみたいだ。

「フェルズ、相談があるんだが・・・」

「? なんだアラン・スミシー」

まさかウィーネとはあんな再会の仕方をするとは誰も思っていないだろう。原作を知っているが、俺には「イケロス・ファミリア」をどうにかすることが出来ない。せめて助言だけでもと思い、フェルズに相談した。何にも出来ないことがもどかしいし、見捨てる形になるのが悔しい。

せめて、日時をずらすことって出来ないかな?

「・・・君の言うことは分かった。しかしまだ君を信用していない。それが本当かどうか不明だからな」

まあ、そうだな。こんなこといきなり言われても信用しない。俺だってそうかも。

「だから【異端児】最強の彼を呼び戻す。幾分かマシになるだろう」

「最強が来るんなら安心だ。ちなみに実力はどのくらい?」

「流石に【猛者】よりかは下だろうが・・・それでもLv.7に届く」

「・・・マジ?」

「マジだ。深層域のモンスターを喰らっているからな」

「やっぱやべえよメインヒロインは。あれとまた戦うことを約束したベルも大概だけどさ。」

「それならマシになるね。でも一応警戒させておいてくれ。安全とは言えないから」

「任せろ」

「アラン? もう出発するよー」

「分かった、今行く!・・・じゃあ、みんなによろしく」

俺はベル達の後を追った。不安は消えないが、あれが原作より早く来るんならまあ大丈夫だろう。

「あー、でもでも。【ロキ・ファミリア】の連中と和解して外伝で協力するんだよね確か。変えたら変えたで絶対影響するよなあ。最悪ゲームオーバーだよあ。慎重に動くか。目標はベルとの再戦。そして【異端児】と協力関係になってもらうこと。頑張ろ。」

—————

「糞がつ!!ここは中層だぞ!!?なんであんな化物がいやがる!!」

男はあらゆる箇所から血を流し、折れた足を引き釣りながら悪態を付いた。

男とその仲間達は移動中の知性あるモンスターを捕獲するため張っていたら、そのモンスターは姿を現した。男達は何とか制圧していたのだが、突如として現れたモンスターに滅茶苦茶にされてしまった。

その結果、この男を除く仲間達が皆殺しにされたのだ。

「俺の呪詛を使えれば何とかなつたんだが・・・」

彼の呪詛は狂乱。簡単言えば対象を狂わせ、狂った生物は近場の生物を襲うというものだ。あのモンスターの近くにいたのは自分だった。

重症を負いながらも、仲間を囿にすることで命からがら逃げ出せた男は嗤った。

「一匹捕まえられたのは運が良かった。こいつを利用してあの牛野郎に復讐してやる・・・！」

男の名前はディックス・ペルディクス。「イケロス・ファミリア」所属で「人造迷宮」^{クノッツス}創設者ダイダロスの直系の子孫及び、ダイダロスが遺した呪いに狂わされた狂人である。

「……………」

「やったー！ランクアップだよ！」

帰宅後のこと。

ラクシユミーに恩恵の更新を頼んだ俺達は、順番にやってエリスの番で発覚した事

実。

「おいおいマジかよ……」

「早すぎじゃろ、流石に……」

ラクシユミーはいつもの余裕が消え去る。例のスキルも当然知ってるし、更新の度に早いことだつて分かつてる。でもランクアップは別。偉業を達成しないと不可能だも
ん。

「やっぱあれかなー。私の攻撃がレイに当たったことだよ。あれしか考えられない
もん」

「あの時か。なら俺だつて」

「アビリティはよく伸びたが、アランは上位の経験値が足らんのじゃよ」
ぐぬぬ。

エリス・キヤルロ(16) Lv. 3

力：10

耐久：10

敏捷：10

器用：10

魔力：10

発展アビリティ

狩人H

剣士I

魔法

// 速度^速増加^ま” 【加速^アセル^セル】

スキル

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

【貴方^フ方^ォ追^ー奏^ユ】

・ |

・ 特定の人物を想うほど効果向上

・ 魅了無効

女子会に男が混ざるな

「これより十八階層へ出発する！」

シャクティ・ヴァルマの号令で、彼女が団長を勤める「ガネーシャ・ファミリア」の一団はダンジョンへと向かった。その中に俺も居てベルも混じっていた。

十八階層に向かう理由は、リヴィラで起きた大規模な「怪物の宴」モンスターパーティーを調査するである。そのためか、この件が解決されるまでダンジョンは封鎖、冒険者はホームで待機命令がギルドによって下された。

この命令に安堵する者もいれば、不満を溢す者もいる。前者は中層探索に不馴れな派閥が多く、後者は血気盛んな冒険者が多い。反応は様々である。

話は戻るが、この調査を任されたのが「ガネーシャ・ファミリア」だ。この派閥には第一級冒険者が多数存在する強豪でチームの技術を有しているため、この件を鎮めるのに向いていると言えるだろう。この判断には誰も疑わない。神々や一部の策略に長けた者以外は。

「ダイダロス通りに行くよ」

「ロキ・ファミリア」のホームで待機していた「勇者」フィン・ディムナは、ギルドの命令を無視する前提であることを進め始める。これに至った理由については、彼の神掛かった頭のキレによるものだと断言しておこう。

部隊は「ダイダロス通り」へと進み始めた。

—————

「武装したモンスターです！」

十八階層に到達し、団員の一人が対象を発見した。

「部隊を二手に分ける。モモンガ、リヴィラへ向かい生存者がいないか確認しろ！」

「はい団長！あと自分はモダーカです！」

「「ウオオオオオオオオ！」」

「！！ 総員戦闘開始！タイムを施すことを忘れるな！！」

「「了解！！」」

モンスターの咆哮を聞いたシャクティは迅速に指示を出す。人と怪物、二つの影が激突した。

俺とベルは何もすることなくその様を眺めていたが、

「「こつちだベル！リドがいる！」」

「リドさんが!？」

スキルで気配を感じ取った俺はベルを連れて走る。リドは戦闘中の【異端児^{ゼノノス}】と一緒にではなく、離れた場所に一人だけ立っていた。

「……いや、立っているよりも待っている？」

「お二方、止まりなさい」

「リユ、リユーさん……」

「それに【万能者】と……えと、【麗傑】だったけか？」

「！ 我々は透明になっていたと思うのですが」

「驚いたね。そういうスキルかい？」

リユーさんの他に気配が二つあることは知っていた。リヴィラの冒険者と【ガネーシャ・ファミリア】以外の冒険者が居るとすれば、絶対この人達だ。

「クラネルさん、スミシーさん。私達も同行してもよろしいでしょうか？」

「リユーさん達もですか!？」

「いや、それは……」

それは非常にまずい。この先にはリドが居るし、何ならモンスターが喋ることがバレる。現段階でそれはまずい……のか？ 案外大丈夫なのか？

でもあつれえ？ アステリオスさんにボコられてなかった？ ヤバイ、頭の中の原作知識があやふやになってる。

「ベル。この先に居るから取り敢えず先に行け」

「アランさんは？」

「俺はすこおおし時間を置いて向かうから。先に行つて」

「分かりました！」

脱兎の如くこの場を去つた。脚速いな、流石Lv. 4間近の敏捷だわ。

「ちよつと雑談しません？特に【万能者】にとつては……いやヘルメスにとつて耳寄りの話だと思えますよ」

「……それはなんですか？」

「」

【万能者】は一瞬考えた末に、

「分かりました。聞きましたよう」

「どうもありがとうございます」

時間稼ぎの雑談が始まった。

「」

「こつちだ、ベル・クラネル。欲を言えばアラン・スミシーも同行してもらいたかったのだが……まあ、足止めをしているのだ。文句は言うまい」

「この先にウイーネが居るんですよね？」

「ああ。彼が言うにはな」

フェルズの案内のもと、ベルは「人造迷宮^{クノッツス}」を進む。不幸中の幸いは闇派閥が姿を見せないことだろう。負傷や疲労した状態でウィーネ救出作戦の成功率は下がる。闇派閥との戦闘は避けたいところだ。

ちなみにリドはここに居ない。一人「人造迷宮」へ進んだ仲間からベルを案内するよう頼まれていたのだ。ベルと再会を果たした後、意味深なことを呟いてグロス達のもとへと戻った。今「ガネーシャ・ファミリア」と戦闘中。

「着いたぞ」

「ウィーネ!!」

「ー・ベル!!」

自分の腕の中でワンワン泣くウィーネに安堵した。どこにも怪我が見つからないから。

ドスンドスン!と音を立てながら近付いて来た影にベルは警戒の色を見せた。

「ミノタウロス・・・?」

目の前に立つミノタウロスは、ベルが知るミノタウロスではない。肌の色が黒く変色し、体格が何倍も優れている。即座に強化種だと断定した。

「アステリオス」

「え？」

「彼は「言わなくていい」分かったよ」

（喋った……？フェルズさんがアステリオスと言ってたし、このミノタウロスも【異端児】なのか……？）

「名は？」

「え？」

「名を知りたい」

「ベル。ベル・クラネル……」

「ずっと、自分はずっと夢を見ていた。たった一人の人間と戦う夢。あの最高の好敵手がここに居る」

「ま、まさか貴方は……！」

ベルは気付いた。目の前のミノタウロスの正体に。

「自分はアステリオス。最高の好敵手、ベル・クラネルよ」

「ベル……？」

ベルはウイーネの前に出てナイフを抜く。ミノタウロスもといアステリオスが言わんとすることが分かったから。

「再戦を」

その言葉を聞き終わり、ベルはナイフを構えた。それを見てニイツと口元を緩めた。そして――、

「うおおおおお!!」

「ヴウモオオオオオオ!!」

薄暗い迷宮で、あの戦いが再び始まった。

うわあああん、ママアアアア（泣）

「何これ、地震かな？」

「これは……」

「戦闘音だね。地下で、【人造迷宮^{クノッツス}】で誰かが戦っているみたいだ」

小さく揺れる地面を踏み締めながら、フィン^{クノッツス}は推察する。ここは【ダイダロス通り】。彼の読み通り、ここに現在進行形で何かがある。

「まさか【穢れた精霊】か？」

「規模が小さいからその可能性はないだろう。いくらアダマタイトで固められているにしては、振動が届かなすぎる」

それにこの近くであのモンスターが動けば、この比ではない振動と音が響く。フィンは最後にそう付け加えた。

「お主、耳が良すぎないか……？音だけでは距離を測れんぞ」

「種族差と言いたいけど……これはランクアップされて五感が強化されたみたいだ」
フィンはあははと苦笑いした。

仕切り直して調査を開始しようとした時、

「『ギルドから通達します。これより災害を想定した避難訓練を開始します。災害場所【ダイダロス通り】です。避難誘導を担当する【ロキ・ファミリア】の指示に従って避難を開始してください。繰り返します——』」

アナウンサーが都市中を駆け巡った。これには困惑の色を隠せない。

「ちよつ、なんで私達!?!」

「私達がここに居るの知ってるわけ!?!ギルドに立ち寄ってないし、そもそも誰も遭遇してないわよ!」

「どうなってやがる・・・!」

「フィン」

「んー。これは・・・」

（冒険者ではなく、僕達を特定し指名した。いや、何故避難訓練をする? ロイマンの指示か? いや、あの男がこんなことしない。なら考えられるのは・・・）

（ウラノスか? 確かにあの男神ならロイマンを動かせるんやが、なーんかまどろっこしいんよなあ・・・）

（いまいち神意が分からない。本当にウラノスの指示なのか?）

上から、フィン、ロキ、ヘルメスが別の場所で考察する。ギルドの意図が見えない。

「取り敢えず指示に従おう。避難場所は大通りまでいい。念のため闇派閥に気を付けろ！」

「『了解！』」

ゾロゾロと家から出てきた住民の避難を進めた。親指の疼きが止まらない。

「【ロキ・ファミリア】は指示に従うみたいだな」

ヘルメスは屋根から動向を確認する。誰かがこの盤面を操っている。フィンやロキ、フレイヤではなく自分達の思惑の外に居る誰か——まさか！

「ヘルメス様！」

「アスファイ！アイシャちゃん！それにリユーちゃんまで」

肩で息をする自分の眷属を労おうと思つたが、それは止めた。猛ダツシユで戻つて来た理由があるみたいだから。

「アラン・スミシーから伝言です！」

「やはりアラン君が絡んでいたか・・・よし、伝言を聞かせてくれ」

「『ベル・クラネルを英雄にする。手伝え』です」

「・・・それだけ？」

「それだけです。恐らくこの振動と、避難訓練が関係しているのかと」

アスファイは伝えた。これがアラン・スミシーの雑談内容だ。ヘルメスは少しだけ考え

答えに辿り着いた。

「アハハハハハ!!」

「へ、ヘルメス様・・・?」

「ああいや、悪いな。アラン君がここまでとは思わなかったんだ。当然返答は了承だ。このヘルメスが手伝おうじゃないか!」

ヘルメスは己の眷属を使い走りにした。露骨に嫌な顔するが、無茶振りに慣れているアスファイは従った。

向かう場所は当然。

「【勇者】!」

「ん? 【万能者】 じゃないか。何か用かい?」

「実は——」

「それは本当かい?」

「ええ。ヘルメス様もアラン・スミシーも貴方達に信頼を寄せています。だから——」

「ヴウモオオオオオオオオオオ!!」

「!! 君は戻ってくれ!」

「分かりました!」

地上に一体のミノタウロス。そして――、

「【リトル・ルーキー】!? なんだあの男が戦っているんだ!？」

「それにあの光はアラン・スミシーの魔法じゃないか!？」

光る羽衣を纏うベルが現れた。

「フィンさん!」

「君がここに誘導したのかい?」

言葉がキツイ。それはそのはず、地上を戦場に変えようとしているのだから。

「イケロスが地上に通じる扉を開けた」

アランはウィーネやリド達が地上に現れない今、「ロキ・ファミア」が【人造迷宮】に攻め込むと推理して、彼らだけに観戦させようとしていたのだ。

しかし、何処からともなく現れたイケロスが扉を開け、あの二人がそつちに流れていった。

イケロスの顔を殴った。男神の鼻が曲がった気がするがそれは気のせいだ。

「協力者に頼んで避難訓練という形で離そうとしたんですが・・・」

「んー、ギリギリ間に合っていない、かな?」

「これから俺はあの二人の近くを走り回ります。フィンさん達は今までのように避難を。それとリヴェリアさんと、リーダーに障壁魔法の準備を急がせてください!」

「分かったよ。詳しい話は後で聞いていいかな？」

「もちろん。こうなったら全て話します」

失礼します。と言いながら走り去った。彼は逃げ遅れた住民を守るように動くらしい。

「僕も頑張らないとね・・・ところでリーダーって誰だ？」

フィンに残りの部隊を率いて進軍した。

—————

ヤバイヤバイヤバイ！

『アラン・スミシー！今地上はどうなっている！』

『二人の戦闘のせいで一部の住人が逃げ遅れてパニックになってるけど、それ以外は大丈夫！「ロキ・ファミリア」が避難を進めてる！』

それでもヤバイのは変わらない。

「ふんぬっ!!」

瓦礫が飛んで来るが根性で受け止める。

「うわああああ!?!」

「よっつと!!」

人の上に屋根が落ちてくるが一緒に躲す。

「ル、ルウ！」

「なんのお!!」

巻き込まれそうになっていた子供を庇う。

万全のアステリオス相手に、今のベルだと簡単にやられてしまう。だから常時魔法を発動させている。これがキツイ！

あいつら場所を考えずに戦うから、こっちの負担が重い!?

「アラン・スミシーだな」

「おいおい、なんでこのタイピングで……」

なんで「猛者」オツタルが居るんだよ!?

それだけではなく、

「なんで俺達がこんな愚図なんか……」

「言いたいことは分かるが、女神の神意に従え愚猫」

「(中二発言省略)」

「ベル・クラネルだけでなくこの男もか」

「まあ、あの男よりマシだな」

「それでもギリギリだな」

「羨ましい。殺すか」

「フレイヤ・ファミリア」の幹部勢揃いじゃないつすかー。いや、なんでええええ!? ほんで最後物騒だしよおおお!!

もうヤダアアアア! ラクシユミイイイイ!

「あの、俺は今暇じゃなくて・・・」

キツ!

ヒエ!

「フレイヤ様の神意だ。我々はお前に従えと命令された」

「つまり・・・分かるな?」

いや、分かりません。何故俺に? 【勇者】かヘルメスだろそこは。

「・・・女神の神意を背く指示を出したら?」

「殺す」

だよねえ。この人達本気でしそうだわ。ここは無難に、

「じゃあファイ「よし、殺すか」移動しながら指示を出します!」

【勇者】フィン・ディムナに頼むのダメなんですか? そんなに仲がよくない、わな。うん。仲がいいはずがなかった。

「バベルまで誘導します! そこで二人の全力の一撃を撃たせます!」

「それは悪くないが——」

「おい愚図野郎。女神に当てる気か？」
殺気立つな怖えよ。

「リヴェリアさんとリーダーに、結界を展開させます。だからエルフ二人は伝言頼まれてくれませんか？」

「それなら任せよう」

「(コクリ)」

すんませんエルフ呼びして。名前ド忘れしちゃったんです。

「【女神の戦車】と四ツ子さん達は、これに便乗する闇派閥を撃退してください」

「ちっ」

「避難誘導よりいいな」

五人は離れた。一番怖い人と別れたのでホッと一安心。

「俺はどうする」

「脳k・・・じゃなかった、【猛者】は戦いの余波を消しつつ、ベルにその大剣を渡してください」

「心得た。・・・ところで今、脳k「あぁー!!あそこに逃げ遅れた人がいるうううう!!」・・・」

全力で逃げた。前世で俺が思っていた【猛者】オツタルの蔑称だ。それがポロツと出

掛けた。「女神の戦車」を蔑称で呼ばなくてよかった。

よしよし、さつきより楽になってきたな。

「おい！」

「どうえい！」

「てめえ、あの猪野郎とはどういう関係だ？」

急に現れんなびびったろうが。ベートさんや。

「女神に気に入られてるみたいす」

「女神・・・ちっ」

「ベートさん、仲間の人達に誘導を優先させてください」

「ああ？なんで俺が」

「闇派閥は「女神の戦車」達が抑えてくれます。だから「てめえ！あの猫野郎にも頼

んだのか!？」ううう、うっす！」

ワナワナと震えてる。あつれー？何が気に入らなかつたんですか。

「俺が全部片付けてやる!!おい、リーネ！他の奴らに伝えるー！」

「は、はい！」

「ちよ、ベートさん!？」

そう言つてベートさんは走り去つた。

「・・・もういいや」

俺は元の作業に戻ったその数分後、

——大鐘楼が響いた。

よっしや!ランクアップだぜえええ!!

ゴオオン!!ゴオオン!!

「!ベルのスキルか!」

鐘の音が鳴り響く。安全圏で観戦していた冒険者や神々、それに一般人が音のする方向へと視線を向ける。

現在、ベル達の場合は「ダイダロス通り」を抜けた先にある大通り。フィンさんから指示でそこに誘導したのだ。また、その大通りを進んだ先にあるのは、

「そのまま押し込め!」

アステリオスはベルに突進し、目的地であるバベルまで押し込んだ。

「【ヴィア・シルヘイム】!!」

【ロキ・ファミリア】の師弟コンビ、リヴェリアとレフィーヤの障壁魔法が二人を包み込んだ。

ベルとアステリオスは睨み合う。

その光景を、ただただ見守っていた。

「——動く」

誰かが眩きと同時に、

「はあああああ!!」

「ヴモオアアア!!」

スキルが発生させた極光と、魔剣が発生させた雷光が激突した。

—————

ベルとアステリオスの再戦は、結論を言えばベルが負けた。原作では片腕と疲労というハンデを背負った相手に負けた。しかし、今回は両腕で体力が有り余っている万全の状態。当然と言えば当然である。

アステリオスは次で決着を決めようと約束し、再びダンジョンへ消えた。ベルはこの戦闘を通して、強くなりたいという気持ちが一層高まり、再戦を強く望んでいた。

俺はそれを見て羨ましい気持ちになった。好敵手という存在は、更なる高みへと至らせるらしいから。

事態が終息に向かった後で、俺はフィンさんを連れて十八階層へと足を運んだ。確か【ガネーシャ・ファミリア】が居て、【異端児】達をタイムという建前で保護してくれてるはずだから。

そうして街へと辿り着いたら——

「ボールス、この資材はどこに置いたらいい？」

「向こうに置いてくれー!グロス、それはあっちだ」

「おーい!追加で肉果実採って来たぞー!」

「よっしや、休憩しようぜ!いい酒があるんだ!」

「レイちゃん!一曲頼むぜ!」

「ウイーネたん、ハアハア・・・」

「なんだこれ・・・?」

俺とフィンさんは街の光景に啞然となる。人と怪物が笑い合つて、手を取りながら協力しているのだから。

「【勇者】、アラン・スミシー」

「シヤクテイじゃないか。すまないが挨拶抜きにして、取り敢えず説明してくれないか?絶賛混乱中でね」

「実は——」

彼女の説明を要約するところだ。

【異端児】を全員抑え込んだ【ガネーシヤ・ファミア】は、ボールスを筆頭とした冒険者に感謝されると同時に街の復興の手伝いを頼まれた。

幸い死者は居なかったが、普通のモンスターより強くて厄介な【異端児】によつて負

傷者はかなり出た。それでも派閥の指針で無下に出来ないので手伝おうとしたら――

「『ならばタイムしたモンスターを使うのだ！……え？ 魔道具越して誰か分からないって？』ゴホンツ、俺は！ガネーシャだああああ!!」

モンスターが所持していた水晶から、自分達の主神であるガネーシャの声が聞こえた。周りを見るに幻聴ではなかった。

突如の指示。これだけでも混乱するのに、

「そういうことなら、俺達に任せろ！」

「」「モモモ、モンスターが喋ったああああ!」「」「」

「なんてことを……」

モンスターが喋るなんて事案、極々少数の人間にしか伝わっていない。冒険者達に知られれば、大混乱を巻き起こすことが目に見えているからだ。だから黙っていたのに……。

リヴィラの冒険者達は、モンスターに敵意がなくて、自分達より数段強い「ガネーシャ・ファミリア」が監視しているから大丈夫かと、警戒しながら作業を進めた。

進めた結果、彼らの事情を知り打ち解けた。そこに納得していない者もいたが、稀少なドロップアイテムの提供に野良のモンスターの撃退を約束され、レイを始めとした美

女美少女【異端児】の登場で、「たく、しゃあねーな・・・」と引き下がった。受け入れられる要因となったのは後者だろう。男のほとんどは下心ある目で見てるから。

「なるほどね、アラン。君はこれを伝えるためにここに呼んだのかい?」

「ええまあ。でも、俺が伝えたかったのは知性を持つていただけです。こんなに仲良くなっているとは思わなかった」

「そうか・・・」

もしかして、原作超えた? あ、でもウィーネと【剣姫】の絡みをやっていない。やっべえ、原作崩壊じゃん。

「アラン」

「え?」

「彼らは作戦に組み込めるかい?」

フィンさんの言う作戦とは、【人造迷宮】クノッツス 攻略を指しているのだろう。

【異端児】はアステリオス以外にも知性があつて強い。多くの者が混乱するだろうが、

「可能です」

「そうか」

ギルド創設の神、ウラノスの私兵としての側面を持つている。冒険者が地上から、【異端児】が迷宮から攻めるなら充分可能だ。フェルズもいるし、なんなら俺がこつちに着

くし。

「・・・よし、アラン付き合ってもらうよ」

「付き合うって、どこに・・・？」

「そんなの決まってるじゃないか！」

——【人造迷宮】さ。

ヒエ。

—————

「おめでどうアラン、ランクアップじゃ」

「マジか!」

「リトル・ルーキー」を支援しながら、逃げ遅れた一般人を守った。それと同時に、口キとフレイヤの派閥を巧みに操ったのが決め手になったようじゃな」

「指示しただけだぞ?」

「我々からしてみれば充分過ぎる偉業じゃぞ」

そうなのか。

これは伝えてないが、その後で【人造迷宮】へ行ったことも含まれてるよね。絶対。

アラン・スミシー（16） L v. 3

カ：I O

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

“発展アビリティ”

幸運H

剣士I

“魔法”

“我が第三の手をここに” 【見えざる手】

・拘束魔法

・拘束は力、距離は魔力に依存

“スキル”

コミュニケーション
【言語理解】

・会話や文字の自動翻訳

サード・ワッポン
【三択からどうぞ】

・三つの中から一つ獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄(1. 箆手 2. レイピア 3. 【刀剣乱舞】 4. バンダナ 5. 【癒光の羽衣】 6. 【全力投擲】 7. 【気配察知】 8. 槍)

【断捨離還元】

・スキルにより入手したモノを捨て自身の能力値に還元する

・価値によって変動

これがランクアップした俺のステータスだ。

L.v. 2 時点のアビリティ平均はおよそC。その中でも魔力がA、力がギリギリBだった。本来なら見送るべきだが、これからのことを考えたら今からでも強くなるしかない。アビリティの貯金は惜しいけどね。

【見えざる手】という魔法だが、これはフレイヤから御褒美として貰った【魔導書】^{グリモア}で発現したもの。人手が足りないかと常々思ってるからね。それで手が増えたらしい。ベルみたいに速攻魔法が良かったなあなんて考えてる。効果は後程。

「じゃあランクアップもしたし、引越しようか」

お金が貯まりに貯まって、この世界における不動産で良物件を見つけたのですぐに決めた。ちゃんと三人の要望に応えた住居である。

俺の要望は当然自室。今のホームは、自室が無いからプライバシーも当然ない。だか

らりびングで女二人に囲まれて寝てるんだけど・・・新居はちゃんと部屋があるから気を遣う必要なんてないからとっつても嬉しい。

俺達は必要な荷物だけ持って旧ホームを後にした。

「・・・なんか、視線を感じるんだけど」

大通りを歩くと、全方位から熱烈な視線を肌で感じる。主に女性が多くかった。真相を知りたいから隣のエリスに聞いたのだが・・・

「ふんっ」

「アランよ、エリスの口から言わすのは少々酷じゃよ」

えー。

後から聞いた話だが、身を粉にして人々を守った俺を英雄視しているらしい。なんか女性中心のファンクラブも創設されたとか。神々の戯れと、外見の良さがそれを後押ししているのだとか。

俺は頬を引きつらせた。・・・正直、嬉しい気持ちもある。

「・・・アランのバカ」

聞こえるように小声で呟いた。心が痛い。

そんな俺達を、ラクシユミーが愛おしそうに見つめていた。

知識が尽きた

俺達は今、一つの方向に目が釘付けになっている。

視線の先は、机の上に置いてあるギルドから渡させられた羊皮紙に行っている。その内容を簡単に要約すると、

『「ヘステイア・ファミア」と共に、下層に向かえ。尚、これは遠征であり、拒否権は無いものとする』

内容を見るにただの冒険者依頼ではなく、ギルドから課せられる強制任務^{ミッション}。普通は遠征は等級がD以上の探索系に求められるのだが……。

「私達って等級いくつ?」

「えっと、等級は確かI〜Sに分けられるから……」

こういうのってレベルの平均で表されるんだっけ?俺とエリスはLv. 3だから、3 + 3 = 6、6 ÷ 2 = 3。つまり、

G……なのか?

あれ?でも、「ヘステイア・ファミア」は、Lv. 4が一人。Lv. 2が二人にLv.

1が二人。 $4 + 2 + 2 + 1 + 1 \parallel 10$ 。 $10 \div 2 \parallel 5$ 。 あれれ？

「Gであつとるぞ。 ちなみに「ヘスティア・ファミリア」の等級はCじゃ。 計算式は $4 + 2 + 1$ 。 レベルで分けて計算するのじゃよ」

なるほど、 $4 \div 1 + (2 + 2) \div 2 + (1 + 1) \div 2 \parallel 7$ か。

「でもなんで私達も遠征に？」

エリスが最もらしい質問をする。 冒険者依頼として発令されるのは分かる。 しかし、強制任務として出される理由が分からない。 創設神ウラノスか、高確率でヘルメス辺りの思惑が働いているとみて間違いないだろう。

「まあ、準備を進めるか・・・」

理由を突き止めても何も変えられないから、考えても仕方ない。「ヘスティア・ファミリア」と下層に向かう準備を進めよう。

あ、虎の子の強臭袋モルブルを用意せねば。

—————

「あ、遠征に「ヘスティア・ファミリア」が関わってるってことは、原作ってことじゃんか」

俺の知識は【異端児ゼノス】編で終わっている。 主人公ベル・クラネルが居るのなら、絶対

に何かある。最悪命を失うような危機的状況が。

「・・・ま、まあ、どうせ階層主が出現時期より早く産まれるだけだろ。ベルのスキルがあれば何とかなるよな！最悪、俺の【全力投擲】もあるから大丈夫だよな！」

あのチャージは強化ゴライアスを吹き飛ばした。俺の【全力投擲】も通常種のゴライアスを穿った。エリスも居るし、ヴェルフの魔剣もある。下層の階層主が現れても大丈夫だろ！

「勝ったな」

俺は勝利を確信して眠った。

—————

遠征には【ヘスティア・ファミリア】だけでなく、【ミアハ・ファミリア】と【タケミカヅチ・ファミリア】の面々が参加していた。ヘスティア様が同盟を組もうと呼び掛けたいらしい。また、【ヘルメス・ファミリア】に改宗した春姫の姉貴分のアイシャも同行するとのこと。彼女は下層探索の経験者だけでなくベルと同じLv. 4。心強いと同時に、これだけ集まれば過剰戦力だと思う。

「お告げが・・・どうしよう」

「？」

カサンドラの顔が青ざめている。どうしたんだろ。

「行きましよう、遠征へ！」

ベルの音頭で俺達はダンジョンに足を踏み入れた。

下層は中層よりモンスターの出現頻度が増えたが、アイシャの知恵もあつて難なく遠征は進められた。その矢先でのことだった。

主人公が居るのに都合よく進められるはずがなく、俺達を待ち受けていたのは、強化種のもスヒュージだった。通常種とは違い苔を纏い更には知性があり、奴が飛ばしてきた種子に千草がやられ、そのモンスターがベルと一緒に河川に流され分断された。

「【癒光の羽衣】」

「な、治った……」

「マジでか……」

厄介にも種子は植え付けられた人の体力を吸って成長し、カサンドラの回復魔法が効かなかった。治療には「戦場の聖女」じゃないと不可能だつて結論が出たのだが、俺の回復魔法で何とか治療できた。

皆が皆驚いていたが、正直ランクアップしてなかったら治せなかつたと思う。精神力マインドが半分ほどこっそり持っていかれたから。

道中で同じくモスヒュージにやられたドワーフのドルムル、エルフのルヴィスと遭遇。遠征途中で襲われたらしく、種子が植え付けられていた。

「癒光の羽衣」

「な、治った、だと・・・!?」

彼らは同じ反応を示す。追加で彼らの仲間を治療して勝負を仕掛けた。リルルカの指示で俺は待機。俺はこのパーティの生命線だつてさ。精神力回復薬をがぶ飲みして後方に控えている。

モスヒュージが集めた蟹型のモンスターに囲まれたが、アイシャのステータス、エリスの加速、ヴェルフの魔剣、春姫の魔法。そして・・・。

「アルゴ・ウエスタ聖火の英斬」!!」

「グギヤアアアツ!!」

河川に流され下に落ちたベルが合流して、モンスターは無事倒された。皆は（特にリルルカ）ベルが来た時に喜びを見せた。これが主人公か。絶望が一瞬で希望に変わった。

「この後どうする?」

「撤退です。余裕はありませんが、遠征を進めるのは危険です」

「同感だね。中層ならともかく、ここは下層だ。同じようなイレギュラーに遭つちまったら、たまつたもんじゃないよ」

こうして俺達の遠征は終了した。帰り道も特に何も起こらず十八階層へ辿り着いた。

おろ？なんかアツサリ終了したね。俺とエリスが居たからか？

この後何か起こるとか？でも下層から帰ってまた下層だなんて無茶はしないよな……？

「ん〜？あれ〜？」

「？ どうしたの？」

「いやあ、何でもない……」

まあいいや、今日はもう寝るか。なんかエリスが隣で寝てるけど気にしない気にしない。
い。

明日にはホームに帰れるし、スキルの選択日だったよな。地上の光が楽しみだ。

「ひ、ひひひ、覚悟しろよりオン……」

薄暗い地下で笑みを浮かべる者が居た。人波乱起きることをアランはまだ知らない。

なんだかんだ言つて長生きがしたいっす

「仲間が【疾風】に殺されたんだよっ!!」

リヴィラの街が喧騒に包まれる。血気盛んな冒険者の街だから当然といえば当然なのだが、いつもの日常とは違っていた。

殺しがあつた。これはリヴィラを中心とする冒険者にとっては見過ごせないものだ。上級冒険者を殺害するほどの殺人鬼が彷徨っているのはたまつたもんじやないから。

「本当に【疾風】だったのか？ 確か復讐後にどこかでくたばつたつて噂だったが……」
「俺は本当に見たんだ！ あのエルフが俺達の仲間を殺したところをな！」

旗頭のポールスが質問し、猫人の男が詳しい事情を話しつつその質問に答えた。更には【疾風】を殺しに行こうと提案する。目的地は下層である。

端から見ていたベルは、信じられないと言うような表情を浮かべ、俺はあの猫人を見る。最近まで戦っていたあの集団と既視感があるからだ。

「アラン様はどう思いますか？」

遠征パーティが集まる天幕で、リルルカが俺に尋ねる。

あの後、「疾風」討伐をするか迷っていたポールスだが、多額の懸賞金が懸けられていと知って討伐が決定した。

今は俺達だけで情報を精査している。推測の域しかでないが。

「怪しいね」

「怪しい、ですか？」

「どういう意味だい？」

「必死が過ぎる」

俺はアイシヤに間髪入れずに答える。あの猫人は仲間を殺されたから敵討ちに行こうと言っているんじゃないやなくて、俺達冒険者を一つの場所に誘導しているように感じられる。

「それに、「疾風」だと特定出来るか？俺やベルが知るあの人は頭と顔を隠している。状況から察するに殺人は夜間に行われたんだよな？だから、「疾風」はおろかエルフという種族すら分らないはずだ」

「！！！！」

まあ、正面から見たら別だけどねと、俺は付け加えた。それに、五く六年経過すれば服装くらい変えるだろ。生きていることがバレないように。

「じゃ、じゃああの人は・・・」

「これは予想だが、あの冒険者達は恐らく——」

「しゃあ！行くぞてめえらああああ!!」

「「「おおおおおお!!」」」

ボールスの指揮で【疾風】討伐隊は下層へ向けて進軍した。ベルはボールスと同じ前線に居る。俺やエリス、リリルカ達は後衛寄りの中衛。【ロキ・ファミア】より劣るものの、大規模な人数での進軍となっている。

「【豊穡の畑番】！回復頼む！」

「了解！」

俺は負傷した冒険者に回復魔法を大人数に使用する。怪我がみるみる治る様に、初めての者は驚きを見せた。

ちなみに【豊穡の畑番】は、俺の二つ名である。あのダイダロス通りでの勇姿を見ていた神々がそう名付けた。少しこそばゆいが、痛々しくないので良しとしている。

「あ、あの……」

「ん？」

「夢を信じてくれて、ありがとうございます……」

進軍中、カサンドラが礼を言う。原作だとこの人は予知夢が見える。その内容は百発百中なのだが、(ベル以外)誰も信じない。親友であるダフネさえ信じないのは、謎の運命力が働いているのだろうか？

「もちろん信じるさ。だから安心しなよ。どうにかして運命を変えるから」
「！」

青ざめていたカサンドラの顔が晴れる。ベル以外の人間が信じるとは思っていないかつたからだろう。俺は微笑んだ。

本当は俺はベルと一緒に行動する予定だった。主人公を補佐すれば、原作を良い方向へと変えられるだろうと考えたから。しかし、夢の内容を聞いて即座に辞めた。だってさ、

「腹を貫かれて死ぬって言うんだもん……」

俺の戦闘衣はあのゴライアスの素材を使われてんだよ？それを貫くって何やねん。そんなモンスター、下層に居るんか？深層から流れて来たのか？

一応、ベルには籠手を貸した。ゴライアスマフラーなる物を渡されていたけど、何故か心細いと思ってしまった。その籠手は彼の右腕に装着された。

一向は下層へ到着し、そして――

「うわっ!？」

「なんだ、地震か!？」

どこかで爆発音が響き、下層全域が揺れた。

俺達は猫人を監視しつつ行動していたのだが、いつの間にか見失った。地震が起きたのはその直後である。

これだけでは当然終わらない。

『アアアアアアアアア』

ダンジョンが哭いた、のか・・・？

俺達がそれに呆気にとられていると、

「これは、何かの冗談かい・・・？」

誕生する時期を無視して絶望が誕生した。ここは二十五階層。二十七階層へ向かったベルを救出するため俺達に立ち塞がったその名は――

「アンフィス・バエナ・・・!？」

それぞれ違う能力を有する二つの頭を持つ竜種。階層無視して滝の激流を泳ぐ怪物。

俺達は今日、主人公抜きで冒険をする。

「アラン様!？」

「アラン!？」

俺はカサンドラとリルルカを庇った春姫を突き飛ばした。目の前には蒼い炎を溜めるアンフェイス・バエナが居る。回避しようにも精神力が枯渇気味でもう動けない。こちらに向かおうとエリスが向かおうとするが、彼女の脚には小型のモンスターに咬まれた傷がある。そのせいで上手く走れないらしい。

精神力枯渇で治せなくて良かった。治していたら躊躇わずこちらに来ていたから。一緒に死ぬことはない。ラクシユミーによりしく言っておいて。ああ、声が届かないか。

いやー、ベル抜きで我ながら善戦したと思うよ、ホント。階層主をここまで相手取るパーティは中堅派閥でもないだろ。このパーティは個々の能力が尖っているからね。まあ、善戦出来たのは、やる時はやる人達が多いからだろうけど。

あ、そう言えばスキルの選択日は今日だよな。最後に選んでおくか。消えない炎が迫ってるし。

「スキル・・・は?。」

選択画面に俺は間抜けな声を出す。

【三択からどうぞで】

- ・三つの中から一つ獲得
- ・選んだモノの貯蓄と引出し
- ・一週間後に再選択
- ・貯蓄

これがスキルの詳細だ。今回も例の如く武器とか魔法とかスキルとかが出るかと思っただけだが……。

「……③を**選ぶ**」

どうやら俺は思い違いをしていたらしい。モノは、『物』という字が全てではない。だからもうちよつと長生きできそうだな。

「———『盾となれ、破邪の盃』」

敵か味方か (外伝のネタバレ含みます)

「[ディオ・グレイル]!!」

円環が前方に展開され、燃え尽きたとしても消えることのない蒼炎を遮った。

俺の目の前には、黒いローブを全身に纏う人物が一人。この魔法の持ち主は、オラリオを含め、全世界を探しても一人しかいない。

「フイルヴィス・シヤリア……」

神々から「白巫女」の二つ名を授かり、闇派閥が引き起こした六年前の大事件の唯一の生き残り。その後、この人とパーティを組んだ者は死ぬと噂され「死妖精」と呼ばれるようになる。

また、彼女の服装は白を基調とした格好だ。こんな黒色ではないし、そもそも外伝で見ただことがある。

「フイルヴィス・シヤリア……マチガツテイナイガ、イマハ【エイン】トヨベ」

「お前は闇派閥側だろ？俺達の味方なのか？」

「オマエ エタチヲ タスケル キハナイガ、
お前達を助ける気はないが、 貴様の キサマノ 『モ』 に ナツタ。」

逆らうことが出来ないの
で、ゾンブんに使え
サカラウコトガデキナイノデ、ゾンブンニツカエ」

「分かった。じゃあ、アンフィス・バエナを倒して俺の仲間達を守れ」

「リヨウカイシタ」

そう言つて、エインは勢いよく飛び出した。本来の魔法から変質した黒い雷が、階層主を焼き焦がす。ステータスは恐らく第一級冒険者と同等以上。相手は階層主だが、下層のモンスターは彼女に太刀打ちできない。

「アラン！」

「あ、エリスどわっ!?!」

交代するようにエリスが登場。ガバリと抱き着いてきた。涙を流しながら俺の肩に頭を乗せた。

「悪かったよ、心配掛けた」

「本当だよ、アランのバカ！なんで犠牲になろうとするの！やだ、やだよお、居なくならないですよ……!」

「(めん」

こんなことしてる場合じゃないけど、エリスの頭を撫でる。慰めは重要だからな。

「アラン様、その……ありがとうございました」

「すみません！私が惚けたばかりに……!」

「いいよ、無事ならそれで」

俺が庇った春姫とカサンドラが謝罪する。二人とも申し訳なさそうだ。

「アラン様」

「ん？」

「あのお方はどちら様なんですか・・・？リリの目が確かなら、何も無い所から突然現れたような気が・・・」

スキルで喚びました、なんて言えないよなあ。

「援軍だよ。ちよつとだけ、ホントちよおおつとだけ訳ありだけどね」

「は、はあ・・・」

もはや何も聞くまいとリリルカは視線をアンフィス・バエナに戻した。彼が言う援軍は目を疑うほど強力で、あの階層主の頭を一つ消滅させていた。

「ヤレ^{やれ}」

「【ウチデノコヅチ】！」

「いつの間に・・・」

隣で春姫が魔法を発動させる。更にはアンフィス・バエナの動きが結界で封じられている。あれは重力魔法。使用者はヤマト・命。

春姫が魔法を掛ける対象は、

「ヘル・カイオス」!!

アイシヤ・ベルカ。擬似的に昇華されたステータスは、第一級冒険者であるLv. 5に至る。

最後の首が斬られ、残る魔石を「タケミカツチ・ファミリー」団長の桜花が砕いた。

「どうなるかと思ったが・・・」

「ええ。援軍の手を借りましたが、ベル様抜きで階層主を撃破しましたね・・・」

この戦いで全員一皮抜けただろう。ランクアップする人が多いのでは？

「アラン・・・」

「エリス？」

「例のスキルだよね？あの人誰なの？」

「いや、それは・・・」

「あたしも聞きたいね。あんな冒険者、オラリオにはまず居ないからね」
闇派閥だよ！とは言えないよなあ。全員気になつてゐみたいだ。

「・・・エイン、正体を明かせるか？出来れば元の姿になつて欲しいんだけど・・・」

「機カマワん。貴キサ様マのモノだからな」

「[[[[[?]]]]」

彼女は仮面とローブを脱ぎ捨てた。露になるのはモンスターと人が融合する姿。ア

イシャとエリス、そして桜花とヴェルフは武器を構え、リルルカ達後衛組は衝撃的な姿に後退する。

息ができない。そんな重苦しい状況で言葉を発するのは、

「フィルヴィス、深層に行けるか？」

「可能だ」

「その触手？みたいなのを引つ込めるか？」

「可能だ」

ニユルニユルと触手を引つ込める。皆が俺に何か言いたげに視線を送るが、フィルヴィスが遮る。

「アラン・スミシー。すまないが頼みを聞いてくれないだろうか」

「なんだ」

「呪縛から解き放たれた今、レフィーヤに……友に謝罪をしたい。戦力は半減するが、頼む。分身の許可を」

頭を下げる。半減するってことは、Lv. 2〜3ぐらいに落ちるってことだよな。そうなるって深層行きは困難になるんだが……。

「こいつは……人では無さそうだが、本当に味方なのか？」

「味方ってよりも、手綱を握ってる状態かな」

「この女を信じた結果、殺させるなんて笑い話にならないよ……まあ、判断はお前に任せるさ」

「リリルカはどう思う？」

俺はこいつを信じる。今は人手が欲しいし。

「正直理解が追い付きません。ですが！ベル様を救出できる可能性があるなら、例えモンスターの手でも借りたいです！」

「決まりだな。フィルヴィス、頼んだ」

「了解した。私の力が半減しても、このメンツなら戦力的に大丈夫だろう。」

「【エインセル】ヨシ、ワタシが私貴様貴様らの盾となろう」

片言に戻った。黒い方がエイン、白い方がフィルヴィス・シャリアか。

リリルカの指揮で一行は深層へ向かった。

—————

フィルヴィスさんが消えた。

エインと名乗る怪人も消えた。

フィルヴィスさんは先ほどまで隣で戦っていた。その人が、敵として目の前に立ち塞がった怪人と一緒に姿を消した。

透明になったわけではない。本当に、存在ごと消えたように彼女は消えたのだ。

そして――

「!? 撤退! 急いで【人造迷宮】^{クノッソス}から抜け出すわ!」

迷宮が揺れると同時に、同行していた【ディオニュソス・ファミリア】の恩恵が消滅した。それを意味するのは主神ディオニュソスが送還されたということ。混乱が伝播する。

アキさんの焦燥めいた指示で撤退が決まる。いくつもの方向から、以前の【食料庫】^{パントリー}で見た緑色の肉が押し寄せ、力を剥奪された酒神の眷属達を無情にも呑み込んだ。

無力にも何もできなかつた私は、自分の感情を血が滲みでる下唇と一緒に噛み締めながら撤退した。

「――すまなかつた」

「――え?」

地獄のような撤退から次の日のことだった。

消えたファイルヴイスさんが目の前に現れ、自分に謝罪したのは。

プロポーズ

「エイン、今いいか？」

「・・・ナンダ。テミジカニイエ」

「おい今はそんな時じゃ「黙りな」グエツ!？」

現在、二十七階層の小さなルームに籠城している。通路は一本。モンスターが大量に入り込めば間違いないこのパーティは崩壊する。

リリルカも俺もそんな危険なこととはしない。しないのだが、敢えて籠城を選んだのは理由がある。「ヘスティア・ファミリア」唯一の鍛冶士が己を賭けたからだ。

カツーン、カツーンと鉄を打つ音が響く。そして、鍛冶場の熱気か、それともヴェルフの心の熱か、その両方かもしれない。背中に熱が伝わってくる。

通路からモンスターが押し寄せ、「タケミカツチ・ファミリア」の桜花、ここまで来る道中で救出したリヴィラの旗頭ポールスが前衛で盾を張り行く手を阻む。

中衛に俺、エリス、アイシヤ、フィルヴィス、命、ダフネの六人で溢れたモンスターを殲滅する。

そして後衛には、リリルカが指揮を取り、千草が矢を放つ。春姫の魔法で一斉に昇華させ、カサンドラの回復魔法で前衛の二人を癒した。

これでも依然足りない。

ダンジョンは狡猾で嫌らしい。フィルヴィスやボールスが参戦しても、その戦力を上回るようにモンスターを排出させる。

余裕などない。でもここで言う必要があると思った。

「生きる価値なんてない、そう思っているか？」

「・・・アア。ああワタシモ、私フィルヴィスモソウオモツテイル」

一度死んで、そしてモンスターと融合して甦蘇った。その後、主神ディオニユソスの謀略に勤づいた仲間を自分の手で始末した。ダンジョンで他派閥さえも同様に。一度や二度ではなく、スキルで召喚される前に何度も何度も手を汚した。

こんな自分に生きる価値なんて皆無だ。レフィーヤと出会ったフィルヴィスは、精神を病み掛けるほど苦しんだ。

「そうか。でも敢えて言うぞ。『生きる』」

アラン・スミシーは、目の前のモンスターを駆逐しながら真つ直ぐ言い放った。それに言葉が詰まる。

「お前がどんな経緯でそうなったか知らないし、どれだけ手を汚したかは知らない。

それでも生きろ」

「――」

「穢れていても」

狐人は目を瞑る。

「手が汚れていても」

女戦士は大剣に力を込める。

「後ろめたいことがあっても」

小人は前を見る。

「俺はお前の味方だ」

「!!」

「そして、お前は俺のモノだ。生きる価値なんてないなら、俺がお前にとっての生きる理由になってやる」

「……ソノコトその言葉に嘘はないなバニウソハナイナ？」

「ない」

俺は即答する。

こいつを押し量ることなんて無理だし、何も知らないのに同情なんて出来ない。でも、

それでも、

所有者仲間として、フィルヴィス・シヤリアとエインの生きていいと思える理由になれる。

「ケツ、ダンジョンでイチヤ付きやがって」

「ハツ、常に大人で冷静に、なんて思っていたが、あの坊やと同じとんだお人好しだったね」

それぞれがそれぞれの反応を見せる。アイシャとポールスは悪態？を吐き、桜花は男・・・いや、漢だ！と感心する。残りの女性陣は、

「ちよつ、こんな状況でプロポーズしないでよ・・・」

「お、『お前は俺のモノだ』って・・・」

「おおお『お前にとつての生きる理由になつてやる』ですか・・・」

「アラン様は、なんて大胆な御方なんでしょう・・・」

赤面する。まあ、勘違いさせる言い方したアランのせいだ。

「でも意外ですね。アラン様はてつきりエリス——ヒイツ?！」

リリルカは隣のエリスをちらりと見やり、悲鳴を上げた。般若が居るからだ。

「私が甘かつたんだ一緒に寝たくらいじゃ意識しないそれなら日頃から胸やお尻を当てていやもうこうなつたら押し倒して既成事実を作るしかないよね一度そういう関係になつたらアランは責任感じるから目移りしないはず「逃げてアラン様あ!!」」

ブツブツと恐ろしいことを口走るエリスは、もう手遅れかもしれない。何かがブツツン切れたから。

アラン様の貞操はもうダメだ。リリルカは両手を合わせてお祈りした。

「完成したぞお前らあ!!・・・え、何やってんだ？何があつたんだ？」

みんなの様子がおかしいことに疑問を浮かべ、なんか一人だけ疎外感を味わったヴェルフであった。

NTRと卒業式

信じられない。

信じられるか。

信じてたまるか。

私は神だ。

例え謀略策略戦略に長けていない神だとしても、あのロキやヘルメス、天界では常に計画の邪魔をしたウラノスにだって出し抜けた。

私の計画は完璧だ。穴などあるはずがない。いや、あつたとしても最早関係ないのだ。

オラリオを物理的に吹き飛ばす。その準備は完了に向かっている。例え「フレイヤ・ファミリア」が来たとしても間に合わない。

それなのに何故だ！

何故、今になって胸騒ぎがする!?

私は――

「エニユオ」

ああ、そうだ。私は都市エの破壊者オ。そして、目の前の女こそが、私の信頼する手足——は？

「イエーイ！ エニユオ君見てるう？ お宅のエインちゃん、俺がいただきまし
たあ——!!」

目を疑った。

いや、だって・・・は？ なんでお前がここに居る？ なんでお前はエインの肩を寄せている？ それにいただいただど？ 何を言っているこの男は。

おいこら、ロキ。ゲラゲラ笑うんじゃない。てか、いつからそこに居た？

「なあ、エニユオ。今どんな気分なんや？ お氣にの娘が他の男に寝取られるのは」

「・・・お前はアラン・スミシー、ロキ達と協力関係にある【フィールド・キーパー豊穣の畑番】アラン・ス

ミシーだ。ただそれだけのはず。それが何故だ。何故お前は・・・クソ、クソが、胸騒ぎの正体は・・・お前かあ!!」

「うわ、怖つ。いきなり声荒げんなよ」

エニユオを名乗る全ての黒幕は、フウー、フウーと息を荒げた。これじゃあラスボスじゃなくて、ただの小物だな。

—————

ベル救出に向かう一行は、ヴェルフが新たに製作した折れない魔剣で探索速度が増した。魔力を糧にする魔剣は、魔力に秀でたエインによつて威力が増す。だから下層のモンスターを悉く焼き払った。

追加でリド率いる【異端児】と、【ヘファイストス・ファミリア】団長椿・コルブランドに加え、リユー・リオンが働く【豊穰の女主人】の同僚達が援軍として参加したので、俺達はサクサクと進んだ。

目指す場所は深層の三十七階層。リドが言うにはベル達はそこまで落ちたとフェルズから言われたらしい。

深層はかなり広くて凶悪なモンスターが多数出現し、第一級冒険者と同等の力を誇るリドでさえ敬遠する。そんな場所に俺達は向かう。

「まあ、俺達だけじゃなさそうだけど・・・」

ギリギリエリスの索敵に引っ掛からない後方から強力な気配。

これはモンスターではない。それに、この気配を俺は知っている。

都市最大派閥の一角、【フレイヤ・ファミリア】だ。

遠征が始まる前、ベルがLv. 4に到達する要因となったダイダロス通りでの攻防。女神フレイヤの指示で彼らの指揮を務めた俺だから分かったことだ。

そんな人達が陰ながら援護してくれているので、進行速度が速い速い。

俺達は無事、深層まで辿り着き、

「！ 居ました、ベル様あ!!」

「ち、治療を早く！二人とも酷いケガだから！」

俺とカサンドラは急いで回復魔法を使用した。ズタズタのポロポロのままここまで辿り着いたベル達は、合流した俺達を見て安心したのか、意識を失った。

俺達は地上を目指し、地獄のような遠征は終了した。

—————

【戦場の聖女】 ことアミッド・テアサナーレの頼みを受け、ベルとリユーさんの治療のため「ディアнкеヒト・ファミリア」に通った帰りの晩のこと。

「アランがイケないんだよ？アランが私の気持ちを無視するから・・・」

「ちよつ、エリスさん!!何してらっしやるんですか!？」

なんかベッドがモゾモゾするなあ、と思つて目を開けたらエリスが居たんだよね。あれれー?おかしいなあ?戸締まりちゃんとしたよねえ?

「大丈夫だよ。すぐ終わるから・・・ハアハア」

「あつ、ちよ、待つ——あつ————!!」

獲物を狙う獣のようなエリスに逆らうことが出来ず。彼女とはそういう関係になった。

び
え
ん

昨夜はお楽しみでしたね

アラン・スミシー(16) Lv. 3

力：D 6 3 4

耐久：C 7 1 2

器用：D 6 1 0

敏捷：C 7 2 3

魔力：B 8 0 2

発展アビリティ

幸運 H

剣士 H

魔法

“我が第三の手をここに” 【見えざる手】

・拘束魔法

・拘束は力、距離は魔力に依存

スキル

【言語理解】
コミュニケーション

・会話や文字の自動翻訳

【三択からどうぞで】
サード・ワゾン

・三つの中から一つ獲得

・選んだモノの貯蓄と引出し

・一週間後に再選択

・貯蓄（1. 籠手 2. レイピア 3. 【刀剣乱舞】 4. バンダナ 5. 【癒光の羽

衣】 6. 【全力投擲】 7. 【気配察知】 8. 槍 9. フィルヴィス・シヤリア（外出

中）

【断捨離還元】
リサイクル

・スキルにより入手したモノを捨て自身の能力値に還元する

・価値によって変動

あの下層遠征が終了し、ベルと【疾風】リユール・リオンを【ディアンケヒト・ファミア】で治療した帰り、ホームで俺のステータスを更新した結果である。

アビリティの伸びが異常なのは、もうお約束・・・いや、おかしいね。遠征前はラン

クアップしたのもあつて全部初期値¹だった。それが何でD以上になつてんの？ 魔力に至つてはBだし……。俺は考えるのをやめた。

【三択からどうぞ】により、新たにフィルヴィス・シャリアが仲間になつた。今は敵の本拠地である【人造迷宮^{クノッツス}】に潜んでいる。明日辺りに神ロキかフィンさんが来るだろう。レフィーヤさんを通して事情を知つただろうからね。包み隠さず吐こう。それがいいや。ちなみにラクシユミーは遠い目をしてた。ごめんね！

一瞬だが、フィルヴィスは俺のモノという言葉に反応してしまい、エツチな妄想をしてしまったが、その刹那をエリスが感じ取つた。彼女の微笑^覗みは怖かつた。

他には特に無い。全然使用しなかつた拘束魔法に、スキルの【断捨離還元】は置物と化しているから。だって【癒光の羽衣】の方が便利だし。貯蓄から中々捨てられないし。

エリス・キヤルロ (16) Lv. 3 (4に可能)

力B805

耐久C754

器用B835

敏捷SS1100

魔力B840

発展アビリティ

狩人G

劍士H

魔法

“速まれ”
【加速】アツセル

スキル

【犬人咆哮】

・ 獣化

・ 全能力値に高補正

【貴方追奏】フォー・ユイ

・ 特定の人物を想うほど効果向上

・ 魅了無効

いや、おかしいだろおおおお!! どんだけ冒険したんだお前はああああ!!

・ ・ ・ いや、スキル無しの俺でアレだったのだ。成長補正スキルを持つエリスなら当然か。それにしてもさ。ランクアップ可能ってマジ? 敏捷SSになっちゃってるし。君はベル君目指すのかい?

君はベル君目指すのかい?

おいおい、エリス。さつきから熱っぽいような目でチラチラこつちを見るんじゃない

い。野生の本能？お前より弱い俺は狩られるの？・・・と、イカンイカン。卑屈になつてる。俺より凄いなら純粋に褒めるべきだろ。仲間を疑うのは駄目だ！

エリスが俺を襲うわけないし、もう寝よ。

「ああ—————!!」

エリスに喰われた。

—————

「やあ、アラン。遠征帰りでお疲れのところすまない。君に用があつて・・・やつれすぎじゃないか？疲れが抜けてなかったのかい？」

「いやー、ハハハ」

予想通り、フィンさんと神ロキがここに来た。警戒してると思ったけど、そんな素振りは見せなかった。信用されると考えていいのかな？

今はエリスは外出中。遠征の後処理に追われている。いや、ただ単純に昨夜のことで

気まずいだけだ。顔を赤くしながら早々に出てったし。

昨晩はエリスに失神する一歩手前まで絞り取られた。だからフィンさんの言う通りやつれているのだ。反対にエリスは艶々してた。ラクシユミーは避妊は大丈夫かとか、少々声を抑えろとそれとなくやんわり注意した。それがかえって俺達の気まずさを助長させた。

今は話し合いだ。昨夜のお楽しみは忘れる！集中だ、集中！

「エリスちゃんとお楽しみだったと見た！」

「ロキ、彼らに失礼だよ。違うよね・・・アラン？」

「アハツ、アハハ、違うに決まってるじゃないすか！ただ遠征の疲れが酷いだけですから!?お楽しみとかつ、そんなあるわけないじゃないですか！」

「・・・」

こんな苦し紛れの言い訳で騙せると思った俺はバカヤローである。

「あー・・・君に聞きたいことがある」

「せ、せや。レファイヤから聞いたと言えれば分かるよな？」

お二方の気遣いが痛いっす。

「フィルヴィス・シャリアの件ですよね？それについてはスキルが関係してまして――

――

「そんなスキルがあるのか。じゃあ害意はないんだね？」

「ありません」

「ほんなら、敵の裏を掛けるんやな？ 例えば——」

「名案ですね。それに加えてこれとか」

「ハハハ。中々えげつない作戦だね」

「敵に情けは無用ですから」

こんな風に作戦会議が始まった。策略に長けた神口キとフィンさんが居るのだ。エニユオを陥れる作戦はどんどん決まる。

そして、

「イエーイ！ エニユオ君見てるう？ お宅のエインちゃん、俺がいただきましたあー
!!」

侵攻決行時に、フィルヴィスのNTRが完遂された。薄い本待ってます。

俺必要ですかね!?

「アアアアアアアツ!!」

クノツソスにおける、闇派閥との最終決戦は佳境に入る。一度有るか無いかの前代未聞の派閥連合は、「穢れた精霊」と決戦を行っていた。

集団で挑む中、なんと俺達はたったの四人編成。リーダーを任された俺が、ベル、レフィーヤ、フィルヴィス三人を指揮していた。あの腹黒勇者こと、フィン・ディムナに厄介ごとを押し付けられたと言っても過言ではない。恨むぞ、ホント。

最初は原作知識もなく不安だったものの、この三人が本当に優秀過ぎた。

迫り来る触手をベルが切り落とし、敵の魔法をフィルヴィスが守る。守りきれなくても、急所さえ無事ならいくらでも再生できるチートぶりを発揮した。そして、隙を見計らってレフィーヤの広範囲魔法。魔法をストックできるとかヤバいだろ。

フィンさんでさえ予想外の七体目。そんな相手を即席パーティーの連携で相手取っていた。

「蓄力チャージするので、守ってください!」

「私も最大出力の魔法をお見舞いします！陽動お願いします！」

「分かった！アラン、前に出るぞ！」

「うえええええッ!?俺も!?嘘だろ！」

後衛で援護ヒールに徹していた俺が、強制的に前に出された。触手攻撃の大部分はフィル
ヴィスが請け負ってくれるが、俺にだって迫りくる。捌ききれずに負傷する。

痛い！痛だだだ!?【癒光の羽衣】が無かったら死んでるよコレエ!?

ゴオーン、ゴオオオオン!!

腹の底に響くような大鐘鐘の音楼は、【人造迷宮クノッツス】に居る冒険者、あるいはオラリオに住まう
一般人にも聞こえているのだろう。絶望を切り裂く希望の音、と言ったところか。

・・・流石英雄。俺とは違って、皆に希望と勇気を与えてる。

そんなことを考えつつ、ベル達の蓄力及び詠唱チャージはついに完成する。フィルヴィスも防
御から攻撃に移った。

【ファイア・ボルト】!!

【レア・ラーヴァテイン】!!

【ディオ・トルソス】!!

「ぜぜぜ、【全力投擲】!!…………あ」

俺はブチブチ音を鳴らして捻曲がる右腕を横目に気絶した。

「……いいね、三人とも。立派な魔法があつて。俺のは自滅技だもん。釣られて使うもんじゃなかつたわ。」

—————

「アランー、いい加減起きなよ。冒険の時間だよー?」

「やだ、動く気力がない」

「もう……」

【穢れた精霊】との戦いで犠牲者は出たものの、冒険者側の勝利に終わった。赤髪の怪人は【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインが討ち取つたらしい。

そんな奴らを率いてオラリオ転覆を企てた【都市の破壊者】こと、男神ディオニユスは自らの手で送還した。最後の眷属たるフィルヴィスは、彼の幕引きに何も言うことなく、そつと静かに目を閉じたようだ。

表向きでは善神ぶつていたディオニユスが、実は黒幕だったと世間が知れば混乱は必死。それを見越したのかギルド長ロイマンは、敵の手によつて命を落としたと報道した。その際、涙を流して泣いてたらしい。あの人か?嘘だよな?

俺は精神枯渇やら右腕ぐっちゃぐちゃやらで意識を失っていたので、この戦いの結末マインドダウンをかなり後に聞いた。

これはエリスから聞いたけど、「フレイヤ・ファミア」が来たってマジ?もしかして、美味しいところをかつさらおうとしたの?なんかウケる(笑)

意識が回復し、無茶したことに怒り心頭の視線を浴びせてくるアミッドをよそに、エリスがベツタリくつついていたのと言うまでもない。

あの激闘から数日が経過した今、燃え尽き症候群に襲われてエリスの太股に顔を埋めている。太股はほのかに温かく、いい匂いがする。素肌なので寝心地抜群:いや、艶かしい。

エリスは仕方ないね、と言わんばかりに俺の頭を撫でた。心地いいよすぎて幼児化注意。エリスママァ……。

主神であるラクシユミーは、豊穡が何とかで外出中。デメテル様の代わりにこの先の祭りに協力するんだと。

「まだ寝てるのかアランにエリス……て、何をしてる?」

「あ、フィルヴィス。おはよー」

「おはよう、フィルヴィス」

「ああ、おはよう。出来れば質問に答えてくると助かる」

フィルヴィスは現在、俺達の本拠地（ホームに住んでいる）。黒モーター戦闘と日常で切り替え可能らしい。敵だった彼女の扱いは現在監視対象として経過観察中。誰がするって？もちろん俺だよ。

「まあ、いい。お前らダンジョンへ行くぞ」

「なんでさ?」

「レフィーヤとの修行ついでに鍛えてやる。下層に行くから着いてこい」

「なんでさ・・・」

このレフィーヤガチ勢の百合妖精め。

フィルヴィス・ブートキャンプ

「ちよつと待つて！また【怪物の宴】とかマジイ!?」

「これで何回目!?少しは手加減してよっ!」

「ひいい、スパルタ過ぎませんかね!」

下層にて。

俺達は現在、フィルヴィス指導のもと地獄の特訓を行っていた。下層には前の遠征で痛い目にあつたから、あの滝の音には心底嫌悪感を抱いた。

そんな中で行われる特訓は苛烈を極めた。内容は至つて単純で、襲い掛かってくるモンスターを倒していくだけだ。技とかを教えるとか、そうゆうんじやなくて、ただただモンスターとぶつかつていくスタイル。

何度も繰り返し返ってくるフィルヴィスの【怪物の宴】——【怪物進呈】か?に、ついに泣き言を漏らした。忌々しい滝の音はもはや気にならなくなつた。

食事はリヴェリアさんとフィルヴィス、十八階層に待機していた【異端児】達が用意してくれた。感謝の言葉をレイさんに述べたら、それはもう喜んだお顔を浮かべて…

ヒエ。就寝は下層のルム小部屋でフィルヴィスが見張り、それ以外の魔石やドロップアイテムの換金とかはリヴィラを活用した。日に日にボロボロになっていく俺達に冒険者は引いていた。

戦闘時の立ち回りはこうだ。

俺は回復魔法を活用しながらレイピアで切り裂く。【ス刀剣乱舞ル】のおかげで剣術に磨きがかかる。そのため、多くの敵と戦う前衛を担当していた。

エリスは速度を活かした遊撃。速度を上げる魔法はシンプル単純に強い。モンスターは人間同様大量出血で死ぬので、大量出血を狙う感じで喉を刈り取っていた。浮気しようものなら俺も刈り取られるのだろうか。

レフィーヤは自分のオハコ十八番である召喚魔法を行使していた。短文から長文、さらに詠唱をストックできるレアスキルで蹂躪していた。どの魔法をどんなタイミングで使うか。判断力に関しては、俺やエリスより成長したと思う。

「お前達はこの先、あらゆる危機を乗り越えなければならぬ。だから学べ。そして必要な経験を積みながらステータスを上げていけ」

フィルヴィスの言いたいことは分かる。主人公と今後も付き合っていくのなら、必然的に危険が付きまとう。だから最低でも恋人エリスを守れるくらい強くなりたい。

まあ、エリスのがレベルが高くて強いけど。

「後ろには私が控えているのだ。死ぬ前には助けてやる」

顧問として同行してきたのはリヴェリアさん。．．．いやあのね？安心しろみたいに言うけどさ。つまり死ぬ直前まで助けてくれないってことですよ。今助けてください。お願いします。

．．．そんな願いは届かず、

「ほれ追加だ」

「「うわあああああ!?!」」

オラリオに労基つてあつたつけ？無いのなら、今からでも入れる保険を紹介してください。

—————

「死ぬかと思った．．．」

「もうくたくただよお．．．」

「うう、しばらくダンジョンに行きたくないです．．．」

一週間以上に及ぶ【怪物の宴】モンスター・パーティーの繰り返しはまさに地獄。時間感覚を忘れるぐらいに渡つて開催されたフィルヴィス・ブートキャンプは深層のモンスター（強化種）の討

伐を皮切りに終了し、《昇華の手応えを感じつつ》帰路に着いていた。十八階層で一晚寝たけど疲労は消えなかった。体がダルい。

最後の【怪物の宴】で入手した魔石とドロップアイテムは、上層までフィルヴィスが運ぶ手筈になっている。リヴィラでする手もあるけど、適正価格よりも安くなるしなあ……。

地上から俺達が運ぶのは、彼女をあまり人目につかせたくないからである。フィルヴィスの事情を知る者は確かに居るが、それは限りなく少ない。

【都市の破壊者】こと、邪神ディオニユスは敵に破れて眷属ごと送還されたということになっており、その中には当然団長も含まれている。彼女が生きていたと知られたのなら、絶対に都市中が混乱になるだろうし、神々が動き出すのが目に見えている。地上に辿り着く前には俺の中（意味深）に入ってもらおう。

余談だが溢れて運べなくなった魔石は、彼女が美味しくいただいた。おま、さりげなく強くなってんじやねツ！

一週間経過したからアレがある。

三択から選んだのは、【吸収】という魔法だ。これは読んで字のごとく、相手の体力・魔力・精神力という体内に存在するエネルギーを吸収して自身に還元するという破格の魔法。デメリットが自分だけにしか使えないことと、相手に触れる必要があることだ

が、それを差し引いても中々使える。

体力や精神力^{マインド}を回復しながら戦えることに、エリスもレフイーヤも羨ましがっていた。

まあしかし、あの自然回復を速めるのが【精癒】なら、【吸収^{ドレイン}】は薬を使ったような即効性がある。ある意味チートだな。

モンスターに使ったら、突撃の勢いが無くなってへにやへにやになった。

馬鹿みたいに精神力^{マインド}を消費する【癒光の羽衣】と相性が抜群。修行中は継続的に使用できた。

「私はアランの中に戻る。用があれば召喚しろ。またな、レフイーヤ。失礼します、リヴェリア様」

「またご指導よろしくお願ひします！」

「ああ。レフイーヤを見てくれて感謝する」

「ああ、お疲れ様——て重たあっ!？」

「アラン大丈夫!？」

バッグを俺に手渡したのと、フィルヴィスが消えるほぼほぼ同時だった。どんだけ入ってるんだよ、腕が持つてかれそうになったぞ……。

地上に通じる螺旋状の長い階段を、一步一步ゆっくり上がっていく。なんでこんな長

いんだよ、エレベーターを設置しろよツライしキツイから。そんなことを切実に思いつつ、あることに気づいた。

「? なんか騒がしくはないか?」

「あ、本当だ。——えと、炎? 魅了? それに・・・フレイヤ?」

エリスは獣人特有の聴力で、聞き取れたことを反芻する。フレイヤと聞いて、嫌な予感しかしない。

「フレイヤ・・・て、ええ!? あの女神フレイヤですか!」

「民衆が騒いでいるということは、派閥総出で何かを仕出かしたのか? 何にせよ急ぐぞ。私達のフアミリアも、無関係ではなさそうだからな」

俺達はリヴェリアさんと共に走り出す。

フレイヤは何をやらかした? まさか、ベルを手に入れるためにオラリオ中に魅了をしたとか? いやでも、いくらフレイヤでもそんな無茶苦茶なことができるはずが——

「アラン、エリス! それにお主らも帰ってきたか! 留守の間に色々あつたんじゃぞ! まったく、あのアバズレ^フ糞^イ女神^ヤめ・・・!」

「久しぶりだなラクシユミー! 早速なんだけど、どういう状況なんだ?」

バベル前で待っていたラクシユミーに、再会を喜ぶより今の状況を問い詰めた。地上の情報が全く届かない下層に居たのだ。俺達四人には、聞きたいことがたくさんあつ

た。

ラクシユミー曰く、フレイヤが街中で「ヘステイア・ファミリア」を襲撃し、ベル・クラネルを強奪したとのこと。しかし、公式の【戦争遊戯】ウオー・ゲームじゃなく非公式の強奪ときた。許させることじゃない。

「なるほど。それを良しとする方法が——」

「都市全域を魅力して、神々含む民衆の記憶を捏造すること。ヘステイアの眷属ではなく、元からフレイヤの眷属だったことにしたのじゃよ」

「えげつねえ」

「魅了された人達はどうなってるんですか？」

「ヘステイアの権能で解放されて、ほとんどの冒険者はフレイヤの本拠地ホー・ムを襲撃している」

俺達が居ない間に目まぐるしく変化してんな、おい。でもまー、これで「フレイヤ・ファミリア」の天下はこれで見納めか。フレイヤの反感を買ってオツタル達にメツされなくて済む。良かった良かった。

リヴェリアさんとレファイヤは、フレイヤの本拠地ホー・ムに向けて走り出した。自分の仲間達も戦闘に加わっているからだ。

「あ、ラクシユミーも魅了されたのか？」

「うむ。しかも、魅了された時にフレイヤの奴が私のもとへ訪ねて来おつてな？あの糞女がなんて言ったと思う？」

『アラン・スミシーはどこ？』

「アランを警戒しとつたわ！隠しきれておらんあやつの必死さは傑作じゃたわ！」
アツハハハ！と豪快に笑った。してやられたことに腹を立ててつつ、フレイヤを馬鹿にする。我が主神ながら、すげえ器用な女神だ。

・・・わざわざ俺を探してたの？警戒する価値は無いと思うけどなあ。

「まさに盛者必衰。ゼウスヘラ同様に、フレイヤも例外ではなかったか・・・」
笑い疲れて落ち着いたラクシユミーは、騒ぎの中心を見ながら呟いた。

「フレイヤ・ファミリア」がいかに強大な存在といえど、オラリオのほとんどを敵に回したのだ。積み上げてきた権威は当然失墜し、彼ら彼女らの居場所もはや無くなつたと言える。

俺達は崩壊していく派閥の最後を見ないまま、久方ぶりのの本拠地ホトに帰ることにした。

その翌日に流れたニュースに驚くことになる。

『【ヘステイア・ファミリア】VS【フレイヤ・ファミリア】による【戦争遊戯】が決定！開催日時や勝負内容はおいおい決定する模様』

・
・
マジっすか？